

い。ちや一んど自分の業が、それらを選定したのであるといはねばならぬ。かやうに考へてくると、世の中に偶然とか、無原因とかいふとは決して有るわけでない。謂ゆる運命と思はるゝものは、皆必然的に縁由するところがあるのである。

と同じやうに、現在の我々の大小の善悪業は、其の形は消えても、力はすべて立ち消えになるものは無く、他に對してそれぞれの影響を及ぼし、その報果は早いか晚いか我に感應して來なければならぬ筈である。

折角善事をして世に認められぬ。人が知つてくれなければ、縁の下の方もちで誠につまらぬ。況んや善いことをしながら反て誤解さるゝやうな場合は尙つまらぬ。又悪事をして、うまく世人をごまかすか、或は人が見てをらぬならば、全くまうけものだ。だから認めらるゝ範圍の方で善いことをし氣附かれぬ程度に於て悪事をすれば宜しいので、どんな人だとして表もあれば裏もあるのが、當然だと、考へ

てゐる人は少からぬやうだが、それは誤つた考といはねばならぬ。たとへていふならば先祖の病氣が子孫に遺傳するやうにわざはその場で消えても、その善たり悪たる力、それが一面に他に影響し、一面にわざをなした人に果報となつて其人の謂ゆる運命となる力は消えないから、人の知る知らぬは兎もあれ蒔いた種は正確に自分が收獲しなければならぬ道理である。だから表もあれば裏もあるのは當然だと心を許すのはわざの形の消えるのを、力までが消えることを見る非常な算盤違ひである。だが晚くとも今生の間に報はるゝなら、善事を勵むに樂しみもあるが、たとひそれが無効にはならず報ふとも、死後生れ代つた世に於てあるならば、自分の蒔いた種を自分が收獲するとは感せられぬ。善きも悪きも降つて涌いた偶然の運とより思はれまいといふ氣がせぬでもない。

私が考へるに、收穫の時期がいつであらうと、それよりも、私どもは日常の三業はそれほど怖ろしき嚴肅なものであるといふことに注意し、さて自分は善きわざが

行へるか、悪きわざが廢めらるゝかど内省することが急要であると思ふ。私どもは業力の強いことが思はれ、ば思はるゝほど、善きわざをしたい念ひが強くならねばならぬ。收穫の時期が何時であらうと、それよりも私の今の業、そのものを省察せずには濟まされぬ。

われ／＼の世界に千種萬類のものがあるが、それは色（色彩、形状）、聲、香味、觸法の六種に分類せられてわれ／＼の眼、耳、鼻、舌、身、意の心の機能を刺戟する。それを六境六識といふ。

ところが六境と六識との交渉状態は如何かといふに、われ／＼の心は常に六境に執着し、愛憎し、煩悶してゐる。それで六境は心を汚す塵のやうだといふので、又六塵とも稱へられてゐる。六境こそんだ迷惑で、六境に罪はないが、それを六塵といふ程それらの刺戟に由てわれ／＼の心が不淨に傾くことを表してゐるのである。われらの心は終日終夜六境に對してゐる。そして常に心が迷うて、財産慾、名

譽慾、性慾、食慾等に焦燥してゐる。これが我々の意業のほとんど全部で、この意業が身業口業に顯動してゐるとすれば、われ／＼自身のわざといふことについて深い怖れをもたすにはをられぬ。

佛教の説明では、眼、耳、鼻、舌、身といふ五識は、色、聲、香、味、觸、の五境をたゞありのままに我が心にうつすだけである。それだけでは執着も好悪も起らぬ。然るにその五識には意識といふものが随伴し、意識の所縁たる法境（五境以外の客觀的存在）と共に五境に對しても計量分別し、執着好悪するのである。意識は常に「われ」といふ者に支配せらるゝものであつて「われ」を標準として色、聲、香味、觸法の一切の境に對して、われが好む、われが嫌ふ、われが所有したいといったやうに執着を起すのである。

佛教の心理學でいふ意識は、廣く一切の境を觀察する心のはたらきであるが、その意識が「われ」の思想に支配せられてゐるから、事々物々に對してほしい、惜し

い、好き、嫌ひの葛藤を心中に生起する。これが我々の毎日毎夜の意業である。近來誰もが盛に用ふる「自我」といふ言葉はよい意味のことであり、又理想のことであるらしいが、實際日常の自我は、上に言つたやうに、執着の根本である。六境を六塵たらしむるものは實にこの「われ」の情想である。かうした意業が顯動して我々の身口二業となり、この三業が我々の一生のわざである。こんなわざが人間集團の世界に無量無邊に紛糾交錯してゐるのだが、これを善い世界といはれるでせうか。他をも不満ならしめ愁苦せしめ、自分も不満にあへぎ、愁苦に悶ゆる、これを善業と思はれるでせうか。どんな種を我々は蒔いてゐるであらうか。どんな收穫を我々は期待せられるであらうか。それを正面に考へるこそが苦しいから、常見斷見といふ偏見を製造して、自己を欺瞞して安心しようとするものもできる。

常見とは、人間は人間以上にも、以下にもなり得ない。いかなる善を行ふとも、

人が神や佛にはなり得ぬ、いかなる惡を積むとも人が畜生や餓鬼にはなり得ぬと思つてゐる考である。斷見とは、人間は一生に限られてゐる。生前もなければ、死後もない。今生の終焉は火が消えたと同じでそれでしまひだ。善も惡も死ぬるときが一切帳消し、貯金にも借金にもならずと思つてゐる考である。さすがに善惡の因果を思ひ自己の一生のわざを思へば、正面からはどうしても怖しくて見るに堪へぬ。そこですてばちに思ひついたが常見斷見といふ邪見で、それで自分の怖しさをごまかさうとする卑怯な愚案である。我々はそこをはつきりと考へなければならぬ。ごまかしや、理想で、此明白な現實を封じてはならぬ。私はどうしてみてもおれが、われがの心が離れぬ。月を見ても、我が月ならばと貪ぼる思ひをし、花をながめても、他人の花はなせ紅いと愚痴をつのる。得ざれば得たし、得たらば失ひともなし、色聲香味觸法に染着し、自他の差別に親疎恩怨のへだてを爲し、主義や思想や平等や公平やと大言壯語することは何でもなければ、

おれがわれがの鐵壁がゆるぐことは思ひもよらぬ。偽善僞愛にうぬぼれ、空論放言に昂奮するも、慚愧懺悔の謙虚を知らない。これが悪人でなくて何であらう。癡愚でなくて何であらう。私の往時、私の現在、私の朝、私の夕、私の内業、私の外業之を検し、之を察するに私はどこまでも悪人、どこまでも痴愚であるのだ。

私はどうなるものであらう。私はどうすればよいのだ。しかし、われ／＼はそのおれが、われがを少しでも大きい我にしようとするのではないか。個我を家庭我に社會我に、國家我に大きくひきのばそうとして苦心してゐるではないか、國家社會家庭をふみにじつて、個我の愛憎好惡の放埒を許さうといふのならこそ、おれがわれがは悪いが、外延をひろげて行くだけ個我の内包たる執着は薄くなりて、家庭社會國家と、利害の關係を廣くすればするほど、個我の利害は抑制されてゆく。それがわれ／＼のつとめつゝある善への進趣であらねばならぬ。

私どもは、私一人の勝手のために、家庭のめいわく不利益をまねかせては相

濟まぬと思つて、行狀にも經濟にも注意してゐる。否、私は一家の幸福のために私といふものを投だして、勤勉してゐる。この場合の私は、一家全体に一致してをる大きさのわれである。私は同時にまた社會のために盡したいと念願してゐる。私とはたどひ微力ではあつても、此願念を忘れることはないから、此點に於いて私は社會の大きさと一致するわれである。更に私は國家のために御奉公申したい精神は決して人後に落ないと思つてゐる。ろくな働きのできぬ私のことであるから、思ふばかりで實際のお役には立つまいが、なれども、それでもその一念はいまだ曾てゆるましたことはない。此の點に於いて私は國家と一致する大きさのわれである。おれが、われがの思ひは執着でもあらふが、個我を擴張して大きなものに一致せしめたいと勵みつとめることも、またおれが、われがをよりよくしようと思ふから起ることで、それが善に向ふところであるから、われといふ思ひを一概に罪惡視することは當らない。私どもは現にそれを修養してゐるのだ。

古來からの大人物が高遠なる志願を立てる、その目的は小我を大我に融合することである。小我を擴大して大我に一致せしめる、即ちわれが神となり佛となることを目標として、大修行、猛精進をしてゐるではないか。小我も進めばここまでも進むものである。私どもは直ちにそれ程超越した望みをもつことは分外ではあるが、かうも理想さるゝわれであれば、われを怖いものゝやうに悪くむのは偏見ではないか。小我を大きくしようとする修養、小我を大我に即せしめようとする理想、その修養は善であり、その理想は廣大である。全くそれに違ひない。聖賢の勸むる道も佛敎聖道門の成佛の敎へも、それである。

然り、その通りである。筋みちを言へばその通りに違ひないが、實際が其の通りになり得ないのが問題なのである。小我が大きくなるには小我が解體して大我そのものになつてしまはなければならぬ。即ち大我は無我であらねばならぬ。然るに小我をしつかりと圍ひながら、大我にならうと勉める勵むと言つてみても、果してそ

れが勉める勵むと言ひ得ることだらうか。おれが社會のために盡さねばならぬ。おれが國家のためにはたらかねばならぬと思ふは、思はぬに、勝るは萬々なれど、おれがに力瘤をいれて、さも大進修、猛精進をなしつゝあるように好い氣になつてゐる所は、それが眞の進修か精進か、主觀的に内省して甚だ自分ながら怪しまれなければならぬでは無いか。もしかすれば進修する精進すると思ふことそれ自身が僞慢誇大妄想になつてゐるのではあるまいか。

發明家が發明する、それは社會のために甚有益なものである。しかし發明家の目的は特許權を獲て私利を満たすことにある。大醫が醫術に精通する、非常に患者の爲めに尊きことなれども、大醫自身は大病院を経営して儲けたいが目的である。しかるを世の爲に發明した、患者のために醫術を勉強したと誇りがほになつてゐるならば、それは僞善僞愛であり、僞慢の邪見であらう。小我が消えて大我になつてしまふなれば好いが、小我を握り締めながら、大我に

ならうとする心は、やはり貪瞋痴慢の淺ましい執着である。さては聖賢の道も、成佛の教も、私には及びもつかぬことである。私はおれがわれに沈んでゐる悪人か、國家社會を念としてゐる悪人かである。

好んで悪人と誣ふるのでは無い。わが業を察して、われを省みるに十分嚴明深刻であらねばならぬことをいふのである。善人でも無きに、修養だ理想だなどと法螺を吹いて、好い氣になつて善人づらす鈍感を警覺するのである。刻々につくる業その業が他に廣く影響し、我に永く報ふのである。觸るれば切れる名刀のやうな怖しい業を無量に造りながら無關心であつてはならない。(完)

三 不 足

梅 原 眞 隆

この頃の世のなかに足りないものが三つあります。

「ありがたい」といふことろ

「ごもつたいない」といふことろ

「おまのどくだ」といふことろ

であります

現代の私達の生活には、この三つの心が少くとも稀薄になりかけてをります。それがために生活にうるほひがなくなり、生命そのものに觸れるやうな感じがなくなり、どこどなく味氣ないものになつてだん／＼と生活が荒廢してゆくやうであります。

近頃の生活は瞬くひまもなく、進んでゐることは、事實であります。けれども、何となく大切なものを取落していたづらに駆けてゐるやうな不安があります。それは、生活の外形だけに氣を奪はれて、生活の内面にいきいきしたいのちがわすれられてゐるからではないでせうか？

生かされて生きるいのちの内感がなくなると、人生は寄木細工をあつめたやうなもので、生き／＼した生活感がなくなり、全體としての綜合感がなくなつて終ふ。これは氣をつけなくてはならないとであります。尤もありがたいとか、ごもつたいたいとか云ふこゝろもちは、封建的な生活に虐げられたものが苦しい生活の中からやつと自分を慰めるための立場若くは自分を欺くための立場として技巧したこともあり、加之よわきものを支配する人々の詐術と化してむごたらしい徳目の鞭と弄ばれたこともあつたので、近頃の眼ざめた大衆が反感をいまくやうになり、敢てみすてたやうな點もないではありません。

けれども、ありがたい、ごもつたいたい、おきのどくである。かうしたこゝろはこの地上に生きるものゝ自然な正しい生活感であつて、秋毫も人間の獨立と自由をきづけるものでない。またこれらの心持は、まづこれらのこゝろもちを内感する人それ自身の生命の糧であつて極めて自律的なものであります。

だからたとひ、これらの徳目を弄んでいやな結果にみちびいた古い世間があつたにしろ、それは欺いたり弄ぶことを糺せばよいのであつて、それがために、なつかしい心持其ものを見捨て、はならないのであります。

かうしたこゝろもちは人間にめぐまれた最もたふとい資物のひとつであつて、どんな時代になつても輕視したり粗末にしてはならないと思ふ。そしてこれを輕視したり粗末にすることはいよく人生を不幸に陥らしめることである。

われ等の祖先はたふとい教法にそだてられて、かなり豊かにかうしたこゝろもちをつゞけてきたのであります。

それが時代の轉化に伴ふ反感やら、慌しさやらで、私たちはこのたふどいものを忘れかけようとしてゐます。私達は聰明に而して今のうちにこれを取かへしておく必要がありませう。

「ありがたい」といふころもちは恵まれて生きるものゝ法悦であります。そしてこの「ありがたい」といふ法悦はわれをばくみたまふ聖なるものに通ふころであり素純な道交である。

「めぐまれて生きる」といふことは感傷的なまぼろしの影であるなどさげすんではならない。わたくしたちは不斷たかあがりしてゐるから、いかに自分ひとり生きてゐるやうにかんがへたり何もものにも支へられずに生きてゐるやうに振舞うてゐるけれ共、そんなにかんがへたり振舞つたりするときは何となくさびしい感じがしませう。それは生かしてくれるものゝめぐみをふみつけてゐるからであります。少しばかり謙讓になつて頭がさがりかけたら自然にありがたく感ぜられるのであ

ります。

私たちはかうしたことを感觸することはあまりに鈍い性質であるが、それはすこしづゝでもころがけて敏活なころを養ふ必要があります。

それは手近なところから眼を開いてゆくがよい。因縁の深い人々のうへから氣をつけてゆくがよい。一碗の飯をいただくにも親しい人のことばをうけるときにもしみぐと味うてゆくがよい。生の斷片の上にもでもかすかながらも慈恩の光を見出すことが出来るなら、やがて、全體の上にもおのづから海山の御恩が知られます。

かうした人はやがてたふどい生命をめぐみたまふ大悲の佛恩をもきつとすなほに感戴せずに居られなくなります。尤も、佛恩が知られたら一切の恩徳が知られるのであるといふのが、もつと適切かも知れませんが、それは何れから緒口が手ぐられてもよいとおもひます。「ありがたい」といふころそのものが、なつかしい宗教的な感念であります。

洛外のある村の瑣事

洛外のある村の瑣事をここにさしはさみます。

その村の巡査駐在所へある巡査が赴任してきました。まだ、三十に手の届かない獨身者でありました。そのため身のまはりの世話をするものもないので、いくらかだらしない點もありました。ことに風雨の夜など區域を巡邏してかへると脚腫も靴も泥まみれになるが、その泥を落す元氣も失せて、疲れるまゝに脚腫も靴も入口にほつ散らかして寝こんでしまふのでありました。

ある朝のこと、出かけようとするど靴がみがかれてあり、脚腫がきれいに洗濯してかさねてあります。巡査は不審に思ひました、そして、これはその朝がはじめてでないやうな氣がする、これまでも二三遍はこんなことがあつたやうな氣がする。朝寢して慌しく出かけるためにつひそれに氣づかなかつたやうなことまでおもひ出される、いよ／＼不審がふくなる、いくらか薄氣味もわるくなるのでありま

した。

裏の井戸に出かけて顔を洗ふとき垣越しに隣のおかみさんの姿をみたのですべてをはなした、そして『あなた、御存じないですか、わたくしはまだこの村に知合のお方もないしそんなに世話してくださる方もないのですが、どうも變なことです』と巡査はたづねるのであつた。おかみさんは『さうですか、それはけつたいなことゝすえな、わてい知りまへんせ』とおなじく訝がるのでありました。しかし、おかみさんがちらと笑をかくしたやうな氣もしたので、巡査はそれが氣にかゝつた、隣のおかみは知つてゐて意地わるく知らしてくれないのではないかとおもつたが、それ以上たづねるわけにもゆかないし、謎の中へうづまかれたやうな氣もちでありました。

ところがそれから二三日たつて謎はとけた。それも風雨のはげしい夜、何時のやうにだらしなく泥だらけの脚腫をなげすて、寝てしまいました、あすのあさ、ふと

めざめると入口に人の氣はいがする『誰れです』と、どがめたてながら入口の障子をあけると、そこには隣のおかみさんが泥だらけの脚絆を片手にさげたまゝ、手ぬでぬました。巡査はすべてがよめた、そしてこゝろからお禮を云うた。すると隣の女主人は迷惑さうに、しかも、率直にすべてをぶちまけて云つてしまひました。その意味はかうである。

あんたからおれいをはれると私のこゝろもちが味氣ないことにもなりますから、おれいなど云はないで下さい、私はもどからこうしたこゝろもちになれる女ではなかつたのです、これまでは、あべこべに人を裁いてばかりゐた一人です、となりの駐在所へ来て下さる巡査さんはどれもこれもだらしがないやうに非難したいこゝろさへ感じました、そして夜なぐ区域をまはつてくださるときも職務なんだからあたりまへであるとおもうてゐたのです、ところが、ふと、それがあたりまへであるとすまされなくなりました、わたしは主人と下女と三人でくらし

てゐます、主人は商賣のことで他行がちです、大ていは下女と二人でくらししてゐます、日本の家はまつち箱のやうなものです、こんなかんたんな家のなかにかよわい女性が二人きりで、生命と財産の安全が保證されてゐることはたゞごとでないやうな氣がいたします、私たちが安らかに寝てゐるのはあなたが毎晩見まわつて下さるからです。こんなにかんがへてゐる矢先へ入口の戸もしめずに泥だらけの脚絆のなげられてゐるのを見ました、これまでは、だらしのないことと非難さへしかねない事實をみせつけられながら私はおれいを云ひたい氣分になりました、せめては泥をおとしてあげたい氣分になりました、しかし、それもあからさまに云つてしまふのはいやな氣がいたしました、わざと氣づかれないやうに五六遍も泥をおとしたのです、ほんとうに私からこそおれいを申さねばなりません、ありがたうございます。

隣のおかみさんはしづかにあたまをさげました、巡査もうつくしいあたゝかい人

のころもちにふれて涙のじむの覺えました、だまつて頭をさげました。

絶對價値の體認

御勿體ないといふことは、これもあたりまへとおもふころとは反對であつてめぐまれたるものの聖なるものの尊さを知るところからおこるのであります、めぐみに生きるものには、このころがけが自然にあらはれてくるのであります、あたへられ、めぐまれたものであるほど、大切にしなければなりません、尊重しなくてはなりません。

一枚の紙きれのおちてゐるのをみてごもつたいないことである、すべては佛法領のものである御冥加をわすれてはならぬといたゞかれた蓮如上人のおころもちは限りなくなつかしいものであります。

この御勿體ないといふころもちはものゝ値打をほんたうに知るころであります、そしてものゝ値打には相對的な見方もあれば絶對的な見方もあります、宗教的

なころもちは絶對價値の體認であります、この絶對價値がほんたうに知られてくると、すべてのものを粗末にされないころもちが自然にあらはれてきます。

一粒の米は須彌山よりもおもしろ、釋尊は仰せられました、之は一粒の米の絶對價値を示された仰せに外なりません、こんなことをおもふと、一椀の飯も押戴かねばならないのであります。

たゞ飯をたべてゐることは許されない、況んやいろ／＼の不足がましいことをいつて飯をたべるのはあさましいことでもあります。

「一日作さずんば一日食はず」とまうされた百丈禪師のころがけは自然なことではなくてはなりません、更に、一日はたらいたから、飯を食ふ資格でもあるやうに思ひあがるならやはり落つけないことでもあります、一日はたらきぬいたからとてそれが一椀の飯に値するといふことがどうして決定せられませう。

はたらくことは喰うてよいといふ權力を生ずるのでなくて、尊いものに養はれる

ことをおもへばちつとしてをられないで身になふだけ働くといふのが落ついた見方ではないでせうか。働くことはめぐみをいたゞくもの、自然な報謝のすがたでありませう。

どんなに働いたからとて、それだけで生きることはできないではないでせう、われらは働く以上にいつも大きなものをめぐまれてゐるのであります、だから働くことも全力をさゝげた奉仕でありたいとおもひます。

小諸の町のSさん

上にのべたやうに、ありがたいと感ずること、御勿體ないとおもうころは、それは聖なるもの、値打をありのまゝにうけとることでありましてかうした尊いころもちを内感して生きられること、そのことが何ものにも比べやうのないめぐみでなくてはなりません。

かうしたころもちがわれらの生活を内部から豊かなもの、うるほひのあるもの

にしてくれるのであります。

先年、浅間山のふもとの小諸といふ町に招かれて行つたことがあります、その町の人々はいづれもいづれも旅人の私になつかしい感じを與へてくれました、とりわけてSさんといふちひさい書店の主人がよい感じを與へてくれました、そのSさんの家に一晚とめていたゞきました。Sさんは家の柱にちひさな紙きれを貼りつけてゐる、そして瞑目合掌してそれを拜んでゐました、その紙きれには「ありがたいごもつたいない」とかいてありました、私はそれを見ないふりをして去りましたが、心のなかでこの人を拜みました、この人のころがけの床しさにおのづとあたまがさがりました。今更のやうにこの山の町のSさんのおもかげが髣髴として思ひうかべられます。

同愛界を築く礎

聖なものと自然にむすびつくころは、そのまゝ大地に生れ合はしたすべての人

人に仕ふるの道

子爵 澁澤 榮 一

上長の前に忠實和順なること、親兄弟知己朋友の間に處して孝悌忠信なること、是れが人間の至情自然性の發露でなければならぬ、是は決して作爲的に養成して而後に然るべきものではない、而して此道を盡すこそ、即ち人道の本義に適ひ人に奉仕する——今日のいはゆる相互扶助——社會道德の要諦が果たし得る譯であらう。元々社會奉仕と云ふのが、もと／＼人に仕へるの義であつて、さうした此奉仕の爲めに産れたのが、生物界總ての使命であらうが、中にも人類に取りては、是が最大役目であるは論を俟たぬ。此最大役目あり之を盡すことの多ければ多きほどに、人は人として貴ぶものがある、即ち天理に多く従ひ仕へる所に祝福が加はり、従つて功德も亦た大なる所以であらう、それ故に人に仕へることを、恰かも奴僕の賤業の

如く心得るが如きは、不見識の致す所不了見の甚しきものと云はねばならぬ。扱て仕へると云つても其道には色々の方面がある、第一我國に於ては臣節を竭して、天皇に仕へる道もあり、師長恩人に仕へる道もあり、又は父母妻子に仕へ兄弟姉妹友人知己に仕へ、果ては國家社會民人に仕ふるの道もある、一概には云へないが、併し之を要するに、忠信孝悌の道を守り、自己の都合を省みず、夫々の人に向つて、犠牲の行ひを爲してこそ、即是れ人に能く仕へるの道を盡せるものと謂つて差支はあるまい、忠義も孝行も義侠も、又同情愛憐の働きも、皆仕へるの義、仕へるの心あるに非ずんば、所謂不可能の行爲である。實に人に仕へるの精神は、此意味に於て其崇高さが、愈々明瞭になつてくる、更らに正直にいへば、仕へることは使ふことよりも貴い、故に仕へて人を使ふと云ふ諺もあり、又よく人に仕へることを知つて、始めて人を使ひ得るものとも云ふではないか、味うて見ると何れも旨ある言と謂はなければならぬ。

大なり小なり凡そ斯世の成功者と云ふ成功者を見よ、何れも皆其始め能く人に仕へた人であらざるはない、誰れ一人として始めから、人を使ふことばかり致して、其終りを完うしたものはあるまい、此處等は事實に照らして、宜しく深く鑑みる所あつて然るべきとだらう。之を是れ知らずして無暗に人の下に使はれるを嫌ひ、非常な不名譽の如く誤信し、頻りに人の長上たらんとを欲し、之が爲めに業を煮やすのである、何たる淺ましきであらうか、斯の如くにして何時平和の日が來らんか、恐らく終生藻掻いて憤死する外はあるまい。

君に仕へ親に仕へ、又朋友知己に仕へると云つても、其中には何か爲めにする所あつて、忠義を切賣りしたり、孝悌の道を銜ふ者もないでもない、是等は即ち似而非なるもの其可なる所がないので、其結果は洵に憂ふべく悲しむべき、罪惡を産み世を乱すべきは、辯を俟たざる處である、忠義と云ひ孝悌と云ひ、決して打算的のものではない、若し少しでもそれがあつたら、美德も全くその光を失ひ泥土に委

せらるべきものとなる。

眞に身を以て君國に仕へ、又親兄弟朋友知己に仕へ、若くは社會公衆に仕へるの赤誠が、一人でも多く國民の間にあれば、それ丈世の中は安泰であり、國礎は愈々強固に文化は益々進むのであるが、如何にせん國家民人に仕へる心の、割合に各人に體驗されにくいとは深憂とせざるを得ない、然るにても如何にして、今日の社會にモット／＼此犠牲心の發露たる『仕へる』と云ふ心の、眞義と眞價とを、會得せしめ得べきか、是は各人各自の働として、其責を分つべきものかと思ふ、兎に角等閑す可からざる喫緊の問題である。

人に仕へよ、其言葉は平凡である、平凡であるが其効用は前來述ぶるが如く決して平凡ではない、殊に對應の適藥として、今日何人にも必要の持藥たらずと云ふことは、尤も吾々が斯く申しては、人に仕へしめんが爲めの手前味噌のやうに、思はれるかも知れぬ、それは迷惑千萬のこと、更々そんな了見は無、無のみか

此老いの身と雖、日々仕へるの心を以て寸時も忠誠の志を緩めろことをせない、實を申せば此濫澤の老骨、何の役にも立つまいが、自分としては何等私用の爲めに之を用ひず、全身を捧げて今は只公の爲めにのみ、使用しつゝ、國家社會の爲めに仕へてゐる譯で、云ふ迄もなく君の馬前に打死すると云ふばかりが、御奉公でない各人各々の業務又は立場から、其分に應じて罷勉努力、以て國力を増し國威を揚げ、是こそ眞の御奉公眞の忠義に非ずして何であるか、斯くして又他人に迷惑をかけず、獨立の生活を忠實に保ち得ば、取りも直ほさず是れ世と人どに、よく仕へるものと云はねばならぬ。

自分は今に記憶して、終生の銘としてゐることがある。今より六十年前、自分が二十四歳の時四方の志を起し、家郷を出んとするに當り、父上が申渡さるゝよう、お前は惻愾であり親の望み通りになる子だと、思ひの外親の考と違ひ百姓になれさうもない、強ひて親の望む如くすれば、不孝の子となるゆゑ、お前の意に任

かすと、此許を得、深く親の有難さに感激して爾來倍倍親恩に酬ひねばならぬと、勵まさして貰つた譯である。其處で親孝行は自分があるのでなく、さして貰ふのだと深く誨へられた、老いては子に従ふとも云ふ、即ち親から仕へて貰うて子も亦之に仕へざるを得なくなる、孝行させて貰ふ程に感じてこそ、眞の孝行もできる、要は互に仕ふる美德の接觸點から、總て圓滿なる福德の生れ来るものなるを知らねばならぬ。

思想の徹底

近 角 常 観

信仰の問題は甚だたやすいことであるが徹底と云ふことを忘れてはならぬ、即ち徹底しないでは信仰は得られないのである。

現今所謂『思想問題』について世上様々の意見があるけれども、私の信ずるところによれば『信仰の徹底』を以て思想問題を解決するより外に道はないと考へる、よつてこゝに『信仰の徹底』と云ふものについて極く卑近な譬喩を以て述べて見たいと思ふ。私が九歳のときに親から聞かされた信仰に關する道話がある、私五十餘歳の今日に至るまでいろ／＼と實驗をして見たが、要するに此の一つの道話に示された事實以外にはないことを確信してゐる。その道話と云ふのは古來お伽話として傳へられてゐるかの姨捨山の話である、我々は先づ第一に親に孝行せよ、親の訓を守れ

と訓戒するのが當然であるのにこれはまた喩にも事缺いて「親を捨てる」と云ふのは随分思切つた、否むしろ慘酷非道などではないか。しかし靜かに反省して見れば人々は外形に於てこそ從順にして隨分孝養を盡してゐるやうに見えるけれども、實際吾らの内心に立入つて嚴密なる道德的反省をしてみれば、何人も實に親を捨てる「姨捨山」の子供と同じ立場に置かれるのである。

況んや親に心配をかけ通し親は子供のころから安心することなくむなしく老いて遂に果てゆく有様は恰も「姨捨山」の子供が年老いた親を駕に乗せて深山の奥へ捨てに行つたと云ふ話と内容に於て同じことになりはしないか、實に他人ごとならず感ぜられる。然るに茲に考へねばならぬとは人間と云ふ者はかうした事實があるに拘らずそこに何とか口實を設けて自らを辯護せんとするものである。かの「姨捨山」へ捨てられにゆく親が現在生みの子によつてさうした悲惨事を負はされてゐるにも拘らず逃げかくれもせず、涙ながらに駕の窓より手を出して、路傍の草を曲げ

枝を折つて道しるべをする有様を見て、子供は私かに考へるには「親はやさしいものだ、自分がこんな仕わざ——親を捨てるやうな行ひをしてゐるのに、怒りもせず逃げもせず子を責めないのは何と云ふやさしい親心であらう。親なればこそ子の悪業をゆるして呉れる、進んで云へば悪いには違ひないが、老いたるものは先に送らるゝ運命と諦めるより致方がない、さう思つてゐて呉れるのだらう」とこんな風に自分勝手な思ひを廻してゐる。こゝが信仰上に於ても實に注意すべき點である。即ち佛はわれら衆生の造惡不善をすべてお許し下さるのだ。罪惡生死の汚れたまゝでいゝのだ。と自分の罪惡非行に對して何等の反省もせず、改めもせずあたりまへのやうに老へる、かうした考に陥る時は實に危険でもあり又實に不徹底極まるものであつて、かゝる者は遂に放縱になつてしまふのが落ちである。凡そ何事も徹底しないでは、本物にはなれないものであるが、殊に思想の問題が不徹底なところにさ迷つてゐるやうではそれがその人の生活にあらはれ來るのであ

るから十分に注意しなければならぬ。佛の救濟が極惡深重の人々の上に殊に注がれてゐることはもとよりであるが、それだからと云つて吾々の生活が悪に充ちてゐて差支ない、不道德のまゝでもよいと云ふ理由はなりたゝぬ、否かくも佛の大慈悲が救はるべき資格のないわれわれに注がれることを思へば尙更生活を肅正して少しでも聖人の道に近づくことを心掛けねばならぬ筈である。「姨捨山」の子供は親の心中のやさしいことを知りながらも自分の都合のいゝやうに想像するのはまだしも、或はこの子は親が枝を折つてゐるのを見てあんなことをして歸つて來やうと思つても畢竟無駄だと冷やかな眼で親のするのを見てゐる。親や先生が子供に訓戒を加へると、それは古い頭の人のお談義である、つまりあの人々の意見であつて、自分達新しい時代に生きてゐるものにとつては、如何に親や先生の云ふとでもそのまゝには聞くことは出來ぬと、すなほに對者として受け容れずに、自分を第三者の地位において批評的に見る、これは或は今日の子弟間に

見らるゝ現象かは知らぬが、何うも餘り感心したことはない。親を捨てるべく「娼捨山」の奥深く分け入つた時、親は子の袖にすがつて最後の別れに涙ながらに云ふ語は實に子供に取つては意外であつた。「いよゝゝ之れでお前と別れねばならぬが、おそらくこれが最後のわかれになるであらうと思ふからこゝに最後の言葉を残したい。わしが来る道々で道しるべをして来たのは、實はお前が歸りの途に迷はないやうにとお前のために枝を折つて来たのだ、平日様々の訓戒をした時も、お前は親が自分の好みにまかせて入らざる世話を焼いたやうに思うてゐたかしらぬが、決してさうではない。何うか我がなきあとは平日の訓戒を思出してあやまりなきやう渡世をして呉れ、わしは草葉の蔭からお前を正しく導き守るであらう……」このまごゝろ込めた親心の有難さに子供は感動せずにはゐられなかつた。「あゝさう云ふ親心とは知らず、何と云ふすまぬことをしたことであらう」子供は両手をつき涙を流し、今日まで子のためには何事も許すと云ふ親心に甘へて、横着な心を出したが、

今かくも親を捨てやうとさへしてゐる惡逆無道な自分に對して、後のことまで心配し歸りの道を氣遣つて下さるとは、何と云ふ親心の底知れぬ深さよと、暫時は悔悟と感激の言葉も出なかつたが、やがて「願くば再びこの駕に乗つて下され、これより後は心を改め、何時の日までも孝養をつくしたい」と悲願したと云ふ話である。これは即ち親の誠意が徹底して遂に子供の悪心を打ち滅したものと云はねばならぬ。それにつけても大慈大悲の佛の願力の眞實によつて吾ら罪惡の衆生が驕慢愚痴のはしたなから覺めて遂に救濟の手に抱かれ新しき人生の生活を辿る信仰生活の光景が偲ばれるではないか。

奥山に枝折枝折はたがためぞ

親の身すてゝ歸る子のため

私はこの道歌を今もなほ忘れずに味うてゐる (完)

大國の學入る二編

外國に學ぶべき二點

司法次官 小 原 直

海外視察談の一節

吾々が外國に行つて先づ第一に感ずるのは物質文明の進歩であります。次には外國人の肉體上、精神上の健全と云ふことであります。日本に來て居る外國人を見ても、其体格の偉大と如何にも健康らしく見える點に於て我々日本人は大に劣つて居る感があるのであります。彼地に行つて見ると、益々此感が深くなる。彼等は非常に身軀が丈夫で、随つて精神が亦強健に出來て居ることが目に付くのであります。今日の如く列國競争の世の中に於ては、結局今申したやうに物質的に優る所があることが必要であると同時に物質的に優るものは亦一面に健康が非常に優ると云ふことでなければならぬ。然るに我々が外國人に比較すると云ふと、肉軀的に於ても

亦精神的の強健さに於ても彼等に劣つて居る點があることは頗る遺憾であることでもありますので、どうしても我々日本人が今後對外的に發展をする爲めには、我々の健康の増進と云ふことを勉めなければならぬ。是は日本に居りますとそれ程強くも感ぜぬのであります。外國に行つて彼等の体格の偉大と其強健さを見るに及んでは、どうしても日本人は健康と云ふ問題に付て餘程考へなければならぬと云ふ感

を深くするのであります。尙あちらに行つて特に注意を惹きますとは歐米諸國に於ける法律秩序の非常に尊重せらるゝと云ふ點であります。日本人としては兎角法規等に拘束せらるゝことを窮屈がる、さう云ふ放縱の念が強い結果として法令に遵據すると云ふとを極めて窮屈のやうに感ずるのであります。歐米等に於きましては其點は頗る異なるものがある。一旦法律として出た以上には之を尊重することが國民の義務であり、又之を尊重しなければ社會の秩序は保てないと云ふ觀念が餘程強いので、一朝法律が出

ると云ふこと之に對して遵守の念が頗る強い、又總て秩序を重んずると云ふ風が我々日本人より遙に強いと云ふことが非常に目に付くのであります。是には色々例を擧げれば澤山ありますが、

極く手近な所で申上げますと、倫敦邊りに於て最も目に付きますことは交通機關の混雜する際に其間に能く秩序が保たれて日本の如くゴタ／＼せぬと云ふことであります。御承知の通り日本の電車の狀況は實に何と云つて宜いか、御話にならぬ有様であります。是が外國に致しますと交通機關の發達整備して居る結果として日本の如く混雜することは少いのであります。それでも尙ほ朝の出勤時間とか、或は退出時間には、乗合自動車、地下鐵道或は電車等の乗客はなか／＼混雜する、此混雜の際にあつて乗客は日本のやうな押し合ひへし合ひして我先に乗ると云ふやうな不様のやり方は殆ど見られない、殊に此風は英國に於て最も目に付くのであります。如何に混雜しても先から行つた人の順序で一列を造る、そして自動車が

来れば先に来た人から順序に列を作つて乗ります。車掌があとはもういかぬと云ふと、あとの人は無理をせずして止めて仕舞ふ。是は見えて居ると寔に氣持が良く、實に感心だと思ふのであります。甚しきに至ると外ど一丁も列を造る、さうして其順番の來るのを二十分でも三十分でも待つて居る。斯う云ふ風は多年の訓練、共同心の養成等から來るものでありませうけれども、結局法律を貴び、秩序を尊重すること云ふ念が強いから斯様な立派な習慣を養成して來たものではなからうかと思ふ。其他汽車や或は地下鐵道に乗る時なども、切符賣場の混雜する時には矢張り直ぐ列を造る。或は銀行に金を取りに行く時にも大勢集つて居る所では直に列を造つて前後を争はぬ。」

斯様な風は英國に於て最も著しいのであります。が其他の諸國に行つても之に類似した整然たる秩序を示して居ります。昇等の法律を貴び秩序を重んずる點は日本人に於ては最も缺乏して居るのであります。此點は我々は大に考慮して公德心の養成

と申しまするか社會上の秩序の維持に、最も斯様な風習を養成することが必要であらうと思ふ。

花

春になつた、そろ／＼さくらも咲かう、いやさくらばかりではない、名もない野末の草にも花は咲くであらう。花はさくらに限つたのではない、ほんたうはみんな美しいのだ。

「花は櫻木人は武士」——これは昔の封建時代の思想である。士農工商などと階級的に並べてゐた時代に、人なら武士と云ふ思想が出たのであらう。しかし今日では武士など、云ふものは無論ない、農

は農として、工は工として、否そんな職業的な云ひ方でなしに、甲は甲乙は乙としての天分のまゝにそのいゝ個性を何處までも成長させて花を咲かせるところに自然の繁榮がある、花はさくらに限つたのではない、各々の草木がその個性のまゝにそれ／＼の美しさに咲き出でるところに、いづれ劣らぬながめがあるのだ、個性の花園に人間王國の園遊會が催されるのだ。

博覽會の出品

A 一この頃世界大博覽會が開かれ

てゐるが知つてゐるか
B 「知らないよ」
A 「何んでも大きなものといふから日本から奈良の大佛さまを出品し、英國からは大鯨を出したと云ふんだ」
B 「へーえ、そりや面白いね」
A 「でいよ／＼審査といふことになつてと／＼大佛さまは鯨にまけてしまつた」
B 「そりや又どう云ふ譯で」
A 「だつてかねよりは鯨が二寸長いの」

名利の念に囚はるゝ勿れ

皆川治廣

人の相集まる所必衝突軋轢の無いといふことはない、大きく申せば團體と團體、國家と國家、若くは民族と民族との間にも常に是がある。一體是は天性自らさうであるべきが當然かも知れない、何せなれば此事無くんば其處に發達進歩が行はれず、即ち進化の理法としては是等の作用が必要だからであらう、だが其れも質に由りけりて所謂君子の争ひとも云ふべきものなればよいが、醜惡見るに堪へない私心満腹排他獨利の根性に出づるものであつては、大なる人生の呪詛を生むのみであつて決して進化の理法が要求する作用にはなりさうでもない。

仰も人は何故君子の争ひが出来ないのであらうか、何時も小我なる私心私慾に左右せられて、ツマラナイ値打のない害あつて益のない、空しい事に引懸つては大馬

鹿を見るのが常である、そして其位の事は大抵の人は判つてゐるに違いないのに、どういふものかエテシテ此事を繰り返すのである、つまり人は小我に執着して増遇の奴隸から解放せらるゝとは、仲々以て容易でないものと見える、紳士と云ふ程の人でも此事は至難とする所であつて、夫れが爲めに見苦しき争ひは隨所に絶えないのである、思ふに君子の争ひに止まるゝの能きない所以は、畢竟するに世々の名利心を捨てるゝの能きないためであるまいか、人は淡泊のやうであつても、人に重んぜられない偉らがられたい褒められたい、そして威張りたいと云ふ情念が心中の何處かに潜んでゐて、折に觸れ時に臨んで頭を擡げては人を惱ます憤慨とはなるのである。

人の首にならう權を握らうのと、其野心を捨てる事が能きないから、色々な難題にも出會するだらうし、若し其野心さへ全く捨てる事が能き、いはゞ人に使はれる爲めに此世にあるのだと覺悟を極めるとが能きたら樂なもの、到處何の故障も

なく坦々たる道路を行く如く、安き心をもつて浮世の旅路が歩けるのである。即ち衝突、軋轢など云ふとは相互野心の産物と云ふ外はないので一口にいへば總ての紛争は元々皆個人又は仲間の勢力争ひからである、其處でこの俗的名利の心に迷はされると無きやうに注意し、克く境遇に超越して其奴隸とならねば、終局の勝利者たることは勿論である。

元來自我を通す人に幸多き人は尠ない、小我を殺して大我を活かせとは即ち此邊の事を戒めたものに違ひないだらうが、吾人は宜しく如何なる場合でもツマラヌ事には負けて譲つて置かねばならぬ、それが全く大局の勝者となる所以の途である其大度量のある所尤も見上ぐべきであつて、其處に徳力の深みがあり、嚴さがあり従つて「徳孤ならず」で自然と福徳の加はり來るのは言ふ迄もないのである、自我と利己的の變名である。利己即ち他の利益を計らざるのみならず、自分の爲めには他を倒してでも其利益を奪はんとするのである、夫れでは如何なる場所に於ても

反感軋轢の起らぬ譯に行かぬ、工場でも事務所でも其他如何なる勤務の場所でも平和を保ち相親み相樂み以て共同の福祉を進めるとは能きない、それには誰れでも先づ犠牲の心を以て人に仕へるゝである、人には謙り人を宥し而して眞に人を愛してやることは、遂に仁者無敵と云ふ眞個勝利者の榮冠を贏ち得る唯一の途たることを忘れてはならぬ。

私は曾て英國に遊んでゐた時、狩獵者の心得に就ての書物を見たことがある別段のとでもないが若し獲物があつた場合之を分つには、決して自分だけが其中のよきものを取らんとする心を出してならぬ。先づ尤もよきものを他人に取らせ、己は其残りにて満足し人も氣持よければ我も氣持よい所の綺麗な分配方をせなければならぬとあつた、是が所謂紳士的であつて獨り英國の流義に止まらず、我國武士道の貴ぶ所も其處にあるのだが、是等の事をよく考へ來れば、大局の勝利を得るものは此の如く目前の小名利を捨てるものに限るのである、何と云つても小名利を捨てる

とは六ヶしいが併し之を捨てねば世の敗者たるを免がれない、而して世の大成功者と云ふのは必ず小名利の觀念を捨てた人、自我を通さない人、言換ふれば之に注意して迷はされない人である。

「人」ごしでの生存

荊屋哲公

自分を善くしたいと思ふに不思議はないわけであるが、無闇に自分といふものに執着すると、反つて善くする事が出来なくて、不幸な目を見るものである、凡夫は自我が小さい、五尺の身体一つを以て私であると考へて、一にも二にも此我を善くしたいくで苦勞する、犯罪などするもの、考も、さうしたところから出発するのが多い、今少し自我を大きくせねば駄目である、不平とか不満とか、争闘とかいふものも、結局は自我が小さいからの事に外ならぬ、古人のいうた如く、『我といふ小さなものをすて、見よ、三千世界に在るものなし』である。

佛といふ悟も、凡夫と云ふ迷も、自我の大小によるのであつて小我に執着すれば迷となり、大我を達観すれば悟となる、佛は慈悲の結晶であるといふのは、大我である。

あるから自然慈悲心が發動する事になるので、此點が小我の凡夫と異なるところである。

小我を捨て、大我の精神に入らねばならぬ道理には、色々あるが、色々の道理の中から今その一つ丈を取出して話す事とする。元來我々は獨立して世に立つ事は出来ぬ、親の恩、君の恩、社會の恩、その外色々な恩寵の中に包まれて、始めて自分といふもの、存在を認める事が出来る。

殊に社會以衆の相互に助け合ふ恩恵、天地自然の我等に與ふる恩恵實に莫大なものである、小さい恩は反つて感謝するけれども大なる恩恵は忘却し易い、闇路を照す提灯の恩は知つても、日々照す太陽の恩は何とも思はぬ、三度の食事の恩は知つても晝夜我を養うて呉れる空氣の恩は氣が付かぬ、人間同士でも吏農工商皆それぞれ助合うて居る恩恵があればこそ生活が出来る、政府といふ機關商工業の團體、教育の機關、宗教の宣傳、皆悉く我等に多大の恩恵を與へるもので、是ある爲にこ

そ我等は此世に生存して行くことが出来る。旅館に泊つて色々の待遇を受けた以上宿泊料は申すに及ばず、相當の茶代を置いて去るのは當然の事である、人生の旅館は吾人を厚遇して呉れる、若し此厚遇に對して何等酬ゆるところなくして、知らぬ顔で出立するものがあるならば喰逃げである、無錢飲食は詐欺として刑法上の制裁を受ける、人生といふものは恩寵の生活であつて、自力のみで暮らさるゝものでないといふ事が分別出来れば、此人生に對する各人の義務といふのが果されねばならぬといふ事が了解せられねばなるまい。

近來多くの人が我利々々主義に陥つて、他人を思はず社會を顧みず、自分が金を利益して自分が贅澤をして、それで差引勘定は濟んだやうに考へるものが多い、自分が金を利益したと思つても、實は自分のみの力で利益の出来るものではない、多くの人が自分に金を利益せしめてくれるのであると思へば、自分丈贅澤すればそれでよいとは決して考へられるものではない、假令、多くの金は利するところな

くとも、他力の恩寵の世に存在する以上は、社會に對する恩返しを行爲がなくてはなるまい、之を感恩生活、奉仕生活といふのである。且又、社會の一員として生存する以上は、その社會の立派にして、自分自身もその立派な社會から幸福を受けるといふことにならねばならぬ、社會の爲めに自分を犠牲にするといふ事はやがて自分の幸福を計るといふ事にもなるのである、彼の他人の事は少しも顧みずに唯自我の満足にのみ熱中して居る人達は結局我身知らずの愚者たるを免れぬのである。社會の爲に自我の利益や名譽を犠牲に努力する事を社會奉仕の精神といふ。此精神が發達すれば大我の生活に入るのである。利他の精神が今少し發達して佛陀の行を行ずる世の中になる事を我等は理想として希望するのである。

我々は口には立派な事を言ひ得る、社會の爲めとか公共の爲めとか、仲々立派な事を言ひながら、名譽や利益、自我を飾るための名譽、自我を大きくするための利益、之を得るに汲々として維れ日も足らぬ有様は、誠に恥かしい次第である。社會

奉仕の精神眞に『人』としての意義ある生存を心懸けねばなるまい。

淺緑すみわたたりたる大空のひろきをおのが心こもかな (明治大帝御製)

此天空開豁の精神は大我の修養に多大の力を與へる様に思はれる。此御製を三唱すれば、嫉妬、怨恨、愚痴、不平、憎悪の如き恥しい心が自然に消え失せて人としての生存は自己一人の爲ではなくして、社會の幸福を増進し、社會の恩恵に感謝する爲に意義があるのであるといふ事が、ひし／＼と考へさせられるに至るのである。

此の幸福を博するの爲に、社會の幸福を増進し、社會の恩恵に感謝する爲に意義があるのであるといふ事が、ひし／＼と考へさせられるに至るのである。

威 有 一 德

武 田 慧 宏

『威有一德』とは支那最古の書物といはるゝ書經の中にある語で、支那の商といふ時代に、第二世の王を輔佐した賢臣伊尹といふ人が其王に政を復へし辭職して歸る時、其王の爲に残した教訓に次の意味の言がある。

御先代の湯王も、私も威一德を有つて居りましたから、天も佑けられ人民も歸服したのであります。

と。こゝに一徳とさしたは純粹で、雜り物のない、又中折れのない道徳といふ意味である。野心や慾望の雜る道徳は偽善である。永續しない善、美事は一時の氣粉れに過ぎない。それは一徳とは曰はぬ。かゝる汚點のない一徳を具へられるやうと、臣下の伊尹が君王に勧めたのである。

然るに、明治天皇は此古語を轉用遊ばして、教育勅語の最終に、
朕爾臣民と俱に拳々服膺して、咸其德を一にせんことを庶幾ふ。

と仰せられた。此時の德を一にするとは、忠孝を始め、勅語に擧げさせられた諸德を、畏くも御躬に守らせられて、一般臣民も同じく守るやうとの思召である。茲に君民一德、上下同心、最も麗しい、最も眞なる意味のデモクラシーが實現せらるゝのである。而して尊き大御心を下臣民へ推及さるゝ所が、全く我國体の特色である。支那は勿論、西洋各國でも、デモクラシーは下の心が上を動かすことで、我國と方向が反對である。此點は我國民たるもの深く明に記憶して居らねばならぬ。

夫について曾て故高崎正風氏の話として傳へられたのを聞いたことを思ひ出す。明治天皇が大演習の爲に行幸の供奉として御召車に近侍して居ると、天皇は今まで御覽になつた新聞を御側に置かせられしばし何事か御考へ遊ばされる模様を伺つて、高崎氏は恐懼の餘、申し上げらるゝには『近來世上には色々の考の者が生じまし

て、一枚の新聞を御覽遊ばしても御宸襟を惱ます記事が御目に止まることも御座りませうと、誠に恐入ります』と。すると、天皇には『甚だ残念に思ふよ』と仰せられ、高崎氏が仰ぎ伺へば御眼には涙の露を宿させられてあつた。そこで高崎氏は此供奉から歸つた後直ちに同志の人々と共に、一德會の組織を思ひ立つたさうである。實に有難い話である。我々日本國民は日常生活の末節に於ては個々別々の思想や自由を持つにしても、根本道徳たる忠孝の精神に於ては何人も何時でも一致する事にありたい。それでなくば國運の榮える筈もなく、人として幸福を味ふことはできない。

新日本の使命に就て

伯爵 二荒芳徳

文化の意義

今日文化といふ語程、廣く用ひられてゐて、而も意味のかくの如く漠然としてゐる語は甚だ少ないと思ふ、故にまづ「文化」の語を定義する必要を認めるのである。「文化」とは、人類がその發生の初めより時代々々を通じてその天賦の靈智靈能を傾注して、得たる累積の全體である」といふのが當てゐると思ふ。即ち「文化」なるものは決して一時代のみに孤在するものではなく或時代に人間が智能を絞つて考へ盡して得たものを、更に次の時代の人間がこれを土臺にしてその智能を加へ、更により高い文化を作つてゆくのである。

約言すれば「文化」といふものは、人智の結晶である。この文化ある故に人は獨り他の動物に比して尊いのであり、靈長たり得るのである。併し一面に於ては人は何處までも人であり、動物の中の靈長である以上を出ない事を忘れてはならぬ。

吾人は吾人の上には「神」が存在する事を忘れてはならぬ。「文化」の進歩が無限である事は「神」の至大至重の性質と離ては存在し得ぬ、又考ふる事もなし得ぬのである。今の「文化」を神の目から見たなれば恐らく人間が一時代を劃して、孜孜努力して、僅に小さい進歩を爲した痕跡を認め得るに過ぎない事は、恰も蟻が僅に寸土を開いて、彼等の穴を作り得た様を、人間が見るが如くに彷彿たるものがある。「文化」の無限の發展性の本体は、これを吾人の云ふ「神」の絶對性に歸着せしめなければならぬと思ふ。

東西の二大文化

今徐ろに現代の思想界を視てゆくと、我々が住む日本國程、思想の混亂してゐる國は、古今東西決してその例をみないと斷じ得る。何となれば二十世紀の當初に

於てこそ始めて東西の二大文化は地球の一點で相合したからである、「始めて」と云ふ語に、私は千鈞の重みをかけて云ふのである。

夫れはどういふわけかと云へば、これには聊か文化史上からその考察を進めなければならぬ。一體「文化」の發生は人類の發生とその起點を一つにしてゐる事は、文化の定義によりても明かである。而も東西の二大文化がわかれて地球なる渾球上を東西に回りだしたのは、今より五六千年前である。東に向つて進んだものが所謂東洋文化であつて、印度、波斯、支那の文化の跡はその東漸を語るものである、西に向つて進んだものは所謂ギリシヤ、ローマから西へ西へと進み、スペイン、フランス等の文化を作つてやがて歐洲を辭して、森漫たる大西洋を渡り、アメリカ大陸に榮え、夫れが五六十年前日本に渡つて來たのである。

祖國日本の地位

人間の發生は少くとも五、六萬年前であるといふ説がある、その人間が寸時も休

まずに考へては創作し、考へては創作して積み上げて來た「文化」といふものが、相當形式を備へて來たのが、今より五六千年の昔である。その文化が西と東とに別れて、各々二大文化を作りながら、地球を東西に回りて、何處に於てか會ふ運命を持つてゐた處、時か命か、將た天意か、我が住む祖國に於て相會したといふ事は、何といふ奇縁であらう。

文化を説く多くの學者は、この根本の事實に氣附かぬか、又は雲烟過眼視してゐる、しかし後世の文化歴史を研究するものから見れば、この日本國の地位といふものは、耶蘇の誕生地よりも佛陀の入寂の地よりも尊いのである、何となれば、人類の發生の當時より積み上げられた、その「文化」人類が萬物の靈長として意義を有するこの「文化」がこの二十世紀に於て、初めて日本といふ地球の一點點、而も國には、萬世一系の天皇を戴き、國は攻落の辱を知らぬこの日本で會したといふ事は、實に偉大なる事實、壯嚴な事實である。思想の系統を考ふる前に、吾人は先づ日本

の、文化史上の特異の地位を深く念頭に刻み込んでおく必要がある。

今、吾々が日本人として、靜かに日本が何せに東西文化の接會點になつたかと思ふ事を深く考へる時には、これが決して偶然ではない、時の回り合せでもないことが肯かれる。何となれば東西二大明の進路は決して二つの地點を結びつけた坦々たる一條の大路でなくして、東西を相つなぐ幾多の進路があるのである。夫れにも拘はらず、二大文化が、この日本を選んで相會したと云ふことの根本原因は、これを接合せしめ給うた明治天皇及明治初年の我々の先輩の決斷の賜物である事を決して忘れてはならぬ。

明治の開國の大業、上に英明に互らせらるゝ、明治天皇のいますあり下に忠純な維新の功臣があつてその當時の日本帝國は、その岸に押し寄せて來る西の文化の波濤の咆哮を非常な決心の下に傾聽した。幾多の難關を突破しても、この西洋文化は、取り入れなければならぬと決心して明治天皇を中心とし奉つて勅命一下、維新の

大業は完成せられ、今まで堰かれてゐた西洋文化の大濤は、日本の國內に流れ込んて來た。爾來憲法發布あり、日清戦争あり、日露戦争あり、世界戦争に参加するあり、皆これ明治開國の結果より當然踏み行く可き若き日本の道程であつたのだ。

今思想界の混亂を冷靜に見る時は、實に一大壯觀を極めてゐる、けれどもこれも亦明治開國の當然の結果であり、聰明な先覺者は之を豫期したであらう、思想界は一度混亂さるべきか、若き日本の運命づけられた道程だと私は思つてゐる。さうして、恰も熟練なる船子は、黒雲と暴風との襲來に對して沈着にその帆網を引き締めて行く様に若き日本の船子は、この澎湃たる思想の怒濤を乗切るべき決死の覺悟をするのが、神より與へられた運命であると思ふ。

右の如く解すとは云へ、私は、決してこの思想の大波を、私々民族が易々と乗り切るものとは思はない、何となればこの二大文化の相衝突する勢ひは、曾て何れの民族と雖ども經驗しない所であるからである。即ち卒直に云へば日本民族は、實に

生還を期し得るや否やの、世海大暴風の真只中に棲みつゝあるといふ事が出来る。果して然らばこの大難關を、突破するの方策如何と云ふなれば、私は疑もなく又逡巡する事なく、我々は長い間鍛へられた民族的信條を唯一の指南車とすべきであると斷言し得る。若き日本は、西洋思想に従ふものでもなく、東洋思想に従ふものもなく、東西二文化の接合地點たる以上、この東西二潮に對して、更により高い光明を與へて神の啓示した全人類の文化を創作するの立場に在るのである。明治維新に於て、民族的大創作を出して、世界の文明國を驚倒させた日本は、今日——現代の吾人の双肩に更に他の日本民族の創作を出すべく運命づけられてゐるのだ。國民は此の重大な神意——自然の默示に耳を敬てつゝ聞かねばならぬ。卑近な西洋の思想の崇拜者、及固陋な東洋思想の崇拜者は、共に若い日本の道程に活眼を開いて大觀せねばならぬ。

怒りは身を亡ぼすの因

『強恕而行』へ

法學博士 泉 二 新 熊

一寸した事で腹を立てゝは大過をおこし大損を招くことが多い。色々な大罪も多く之からおこるのである。一寸悪口を言はれ立腹したのが殺傷になつたり、放火をして怨みをはらすといふやうになつた例は多くある。論語に強恕而行と云ふ言葉がある。他人の言行に對しては勉めて思ひ遣りと同情を以て臨み、假令悪いことがあつても之を勘辨して許すやうにせよといふ意である。人間は立腹すると忽ち理性を失ひ脱線的な行動に出易い。立腹が大損であるとは、少し考へればすぐに自覺の出来ることである、が、さて實際上容易には出来ないことで、之には餘程精神の修養が必要である。

第一に心がけねばならぬことは、推己而及人といふことである。何事も我身に思ひくらべて、若し自分が彼の人のやうな境遇に在つたら如何であらうと熟考したならば、強く咎め立てをせず人の過を恕してやらうといふ考へがおこつてくる。

第二には「自己反省」が必要である。人から批難をうけるとか人が自分の希望を容れてくれない場合に、能く自己を反省したなれば彼に道理があつて自分に責があることを自覚しうる場合が少くない。家庭の風波の起るのも夫婦が相互に思ひ遣りが少く、我まゝを逞うして終に妻はヒステリックになる、夫は一層家庭から遠ざかるといふことがくるのが頗る多い。

第三には自分が一段と高くどまつて相手になるのを恥とするといふ考へを以て、人の悪口に介意せぬことが怒りをおさへる秘訣である。

第四には他人の言行を出來うる限り善意に解釋することが必要である。徒に邪推猜疑を逞うする程不利益はないのである。

以上の外にも尙感情の興奮を抑制するに就ての用心方法は色々あるけれ共、要するに「怒は身を亡ぼすの因」と云ふことを肝銘することは處世上頗る大切なことである。之は高尚な理論でなく極めて卑近なことで何人も知つて居る事柄であるが近來責任感の薄弱となつた世の中では特に注意しなければならぬことと思ふ。

誘 發

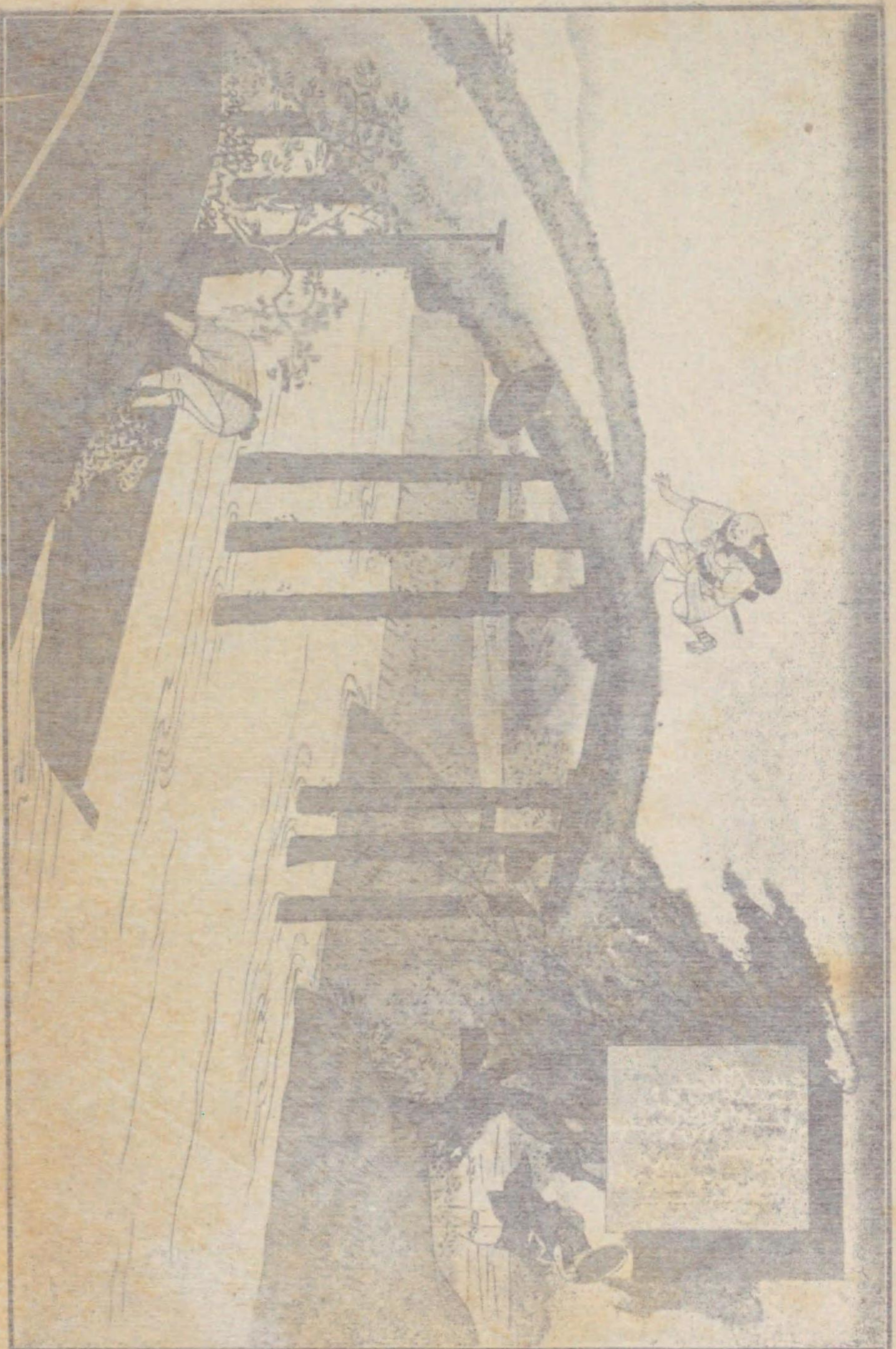
家も村も生々しい縁に包まれ、川邊の蘆も生ひ伸びて雄々しい氣分が満ちて來た。こうした自然に接するとき、吾々の心は、その力に誘發されて自然と伸びくして來る。

つともつと努めねばならぬ」といつた寸時もじつとしてゐられない心持になる。「教育は、自然の力にまつ」とはルツソオの言葉であるが、寔に自然の力といふものは至大なものである。然し、何時もかも縁したる初夏の頃ではない。萬物は凋落し滅入りさうになる秋もある。従つて

うちから發する力が強く働かなくてはならない。蓋し教を受くるといふのは、押し据へられる又は與へられるの意味ではなく、作り出す發するの意味でいくら教へられてもそこに誘發しうるところがなければ嫌に釘の類であらう。所詮一切は個我の態様によりて惑ともなり悟ともなるのである。

綱要手
五十三大

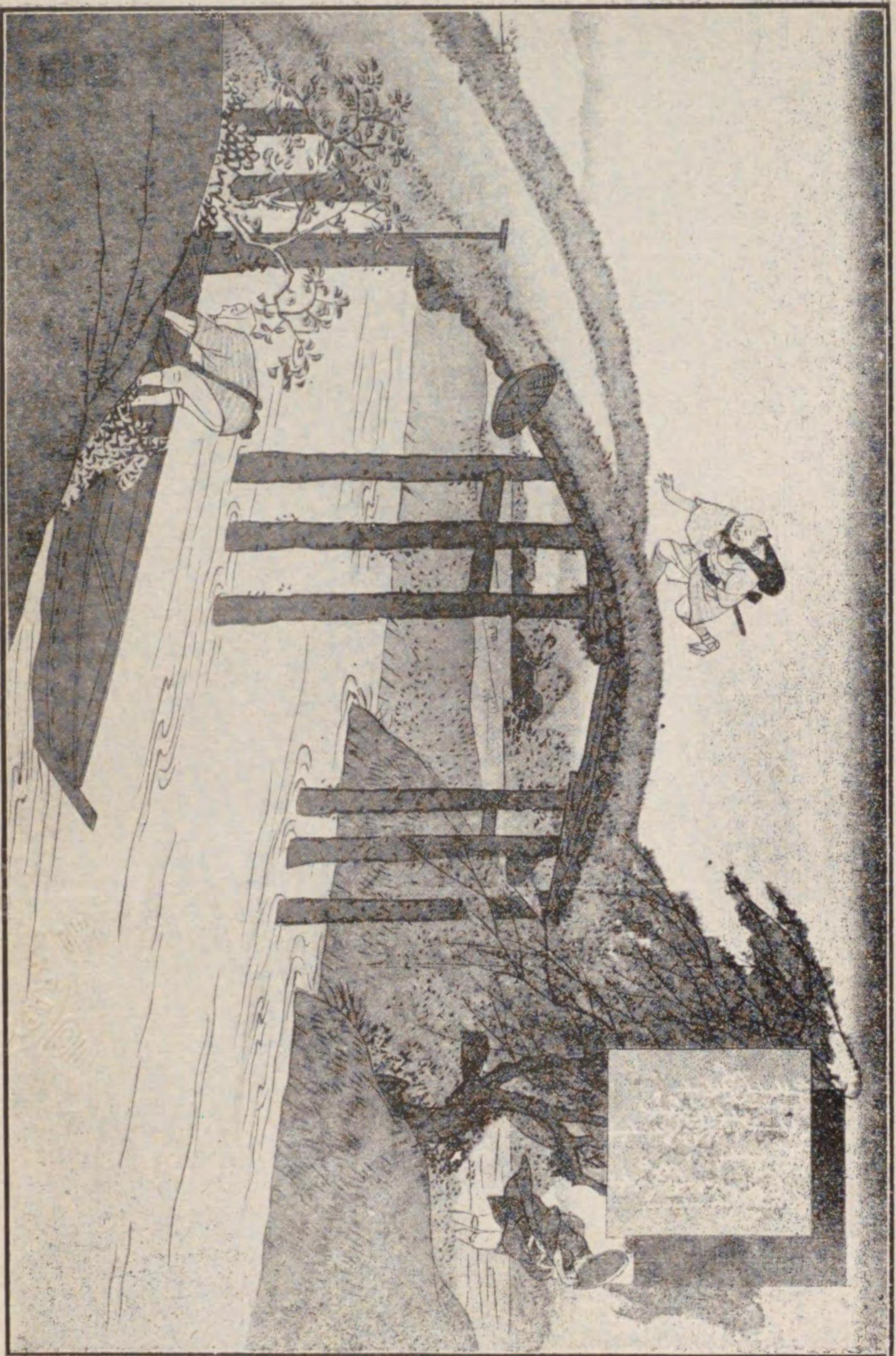
東遊散行脚



筆墨圖

— 風 江 —

東新鼓音調



筆重廣

—尻江—

龍 潭 洞

一 景 一



龍潭洞
 龍潭洞の入り口
 龍潭洞の入り口
 龍潭洞の入り口



龍潭洞
 龍潭洞の入り口
 龍潭洞の入り口

一 部 一 岡

筆 重 廣 幸
 幸 廣 重 筆



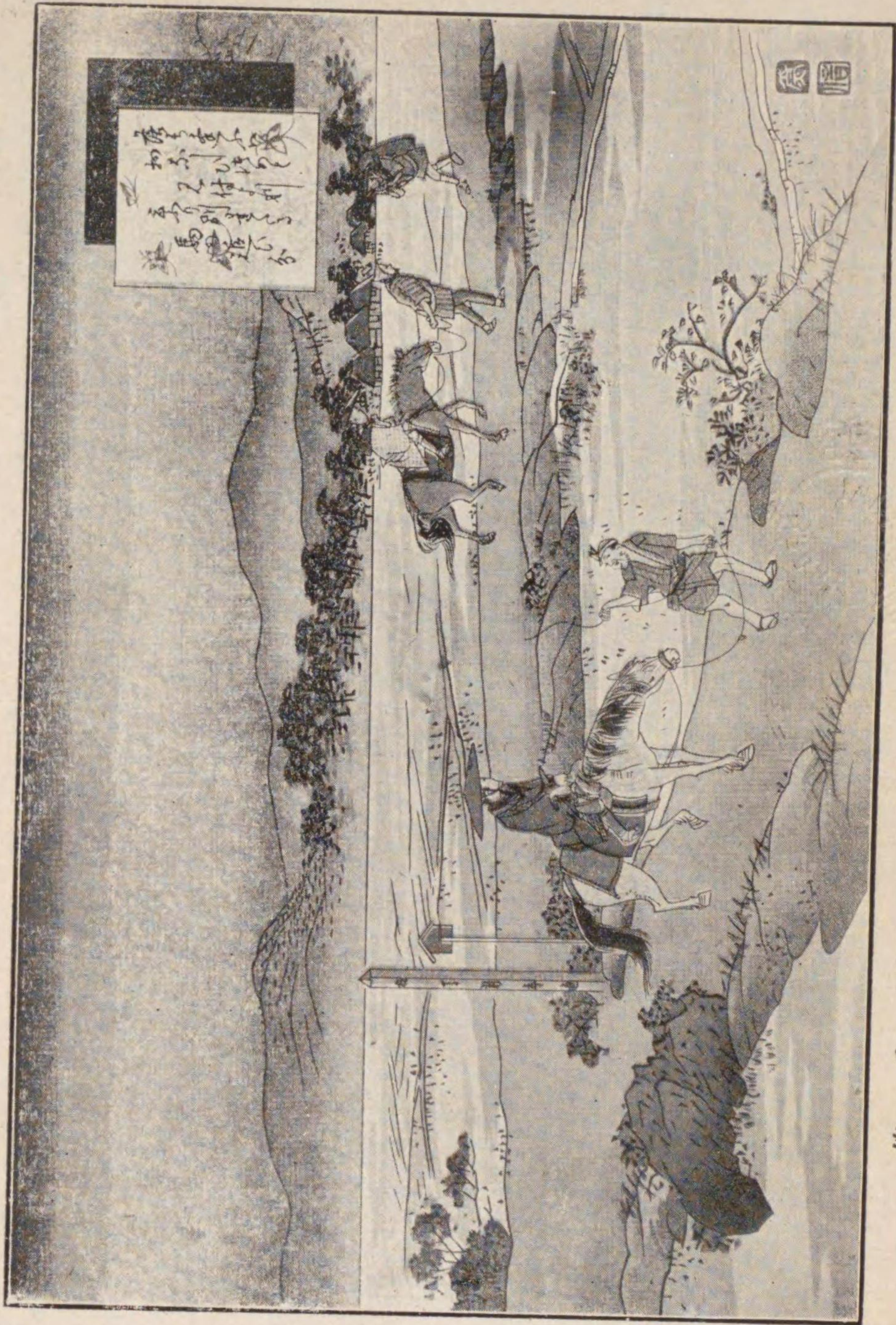
筆重廣

—枝藤—



筆重廣

—部岡—



東海道行脚

日本橋から品川まで

お江戸日本橋——云ふ言葉さへ甲にひびく江戸の兄弟のほこりであつたと、云はれて見ても、今のやうなせい／＼十間にも足らぬ川幅に震災でキズだらけの橋を見ては、さて、どこがお江戸日本橋でござると云ひたくなるが、江戸名所圖會によれば、「長さ凡二十間南の橋詰西の方に御高札を建てたる。欄干慈寶珠の銘に萬治元年戊戌九月造立と鐫す。此橋を日本橋と云ふは旭日東海を出るを親しく見る故に、しか號ると云へり、この地は江戸の中央にして諸方への行程も此所より定めしむ、橋上の往來は貴となく賤となく、絡驛として間斷なし、又橋下を漕つたふ魚船の出入、且より暮に至る迄賑々として聳し」とあるから、まるで今とは感じが違つたであらう。今では梅幸がよくやる「お江戸日本橋」の舞臺でおなじみの高札には、

定

- 一 親兄弟夫婦を始め諸親類に親しく下人等に至る迄之をあはれむべし
- 一 主人あるともがらは各其奉公に精出すべき事

一 家事を専らにして懈る事なく、萬事其分に不可過事
一 偽りをなし又は無理をいひ惣じて人の害になる事をなすべからざる事

をはじめとして、お奉行から道徳上又は法律上、心得べき數々を告示したもの、今で云ふなら「宣傳ポスター」これが長長十年から建つてゐると云ふからおそれ入る。

さて此の邊が御高札でもあつたのかと昔を夢見る今様彌次さんハツとたまげて飛びのけば市營の圓太郎がゆき過ぎてゆく。

驚いたね林子平が橋の欄干にもたれて何か云つてるやうですね。

「この橋下の水は英國のテームス河の水に通ずる」

へんな顔して子平の様子を見てゐた町人二人

「どうもありや氣狂らしう御座りますね」

これが當時の有様だが代議士高木益太郎が魚河岸の兄弟を相手に植民政策を論ずる程に今は誰も不思議に思はぬ。

「さア出かけやうぢやないか」

Bさん、Cさんにうながされて、歩くのも面倒だと、そこはお手輕に圓タグを呼びとめる。ヒラリト乗れば、すぐに白木屋、京橋を渡れば、松屋、近來めきくと人氣が出て「三越」の包紙より巾が利くと云ふ

見え坊もある位、この大きな百貨店が借家すまひで、家主の徴兵生命保險會社に年に十六萬圓とかを拂ふと云ふ話、日本一の大店子だ。

この邊りは例の銀ブラ黨の本場で、日本に生れて日本を忘れたやうな摩登ボーイだの摩登ガールだのと云ふ河童の親類見たいな手合がうろくしてゐる。大方上海の居留地邊りの出店であらう。

親しらず子しらずの銀座尾張町の交叉點を横切れば左には百萬圓の大殿堂歌舞伎座が聳えて、お上りさんの赤毛布をして築地の本願寺とまちがへさせてゐるし、右には朝日新聞の山のやうな新社屋が見える。

とすぐに松坂屋、名古屋の伊藤が銀座へのり出してお商賣、新橋を渡れば芝口、これからは昔は濱づたひであつたと云ふ札の辻の停留場のすぐそばに、さては京都の金閣寺が引越したかと目をそば立たせるのは、その昔は飛ぶ鳥をも落した船成金の淺野總一郎が外人を接待するための迎賓館のしやちを門につけ、張作霖が館かとも思はれる。

今の泉岳寺の停留場の一寸手前に、昔ながらに大木戸の跡が残つてゐる。こゝまで来ると海邊も近く「芝濱の皮財布」で圓朝の昔を偲び、貞山のお商賣もの義士傳でも一席と云ふ處だが、何しろ圓タグの道中、泉岳寺は失敬して、東禪寺前から品川驛、京濱電車もよそに見て、八ツ山下品川宿についたが、いくら何でも三哩一圓ではすまず、割増請求、しかしさすがに旦那酒手とは云はなかつた。

品川もこの頃はすっかり變り、京濱間十二間幅の國道が完成したので、車はみな品川の町を通らぬ、狭

い通りをおわい屋の後をくつつくのもと、お臺場そばに漁場をもつ殿様漁師の奥平子の話をしながら、道のい、大通りを真直ぐに急ぐ。

品川より神奈川迄

品川より川崎へ二里半、これは困つたナ、國にみたときは隣迄行くにも豆腐一丁買ふのにも自轉車だつたが、江戸つ兒の仲間入してからは新宿の終點から角管の間でも電車に乗りなければ氣が済まないといふ私ぢや、そこで豆をふみ出さないやうにソロ／＼出掛けよう。

品川の町外れには堀割がある。御殿山の一部で昔は大した花の名所であつたとか、そうそう江戸名所圖會にこんなことを吹き居つた。

「彌生の花盛には雲とまがひ雪と亂れて、花の香は遠く浦風に吹送りにて磯菜摘む海人の袂を襲ふ」

えらいことぢや、お天氣の變らぬ内にと、こんな古跡には目も呉れず大井町に入る。

格別に目に入るものはないが、有難いことには坦々たる大道が開けて昭和の膝栗毛は骨が折れぬ、盲目でも杖なしで行けさうぢや、併し待つた、この町を離れて左傾とか左折とかすると音に名高い鈴が森ぢやさうな險呑險呑、芝居で「お若えのお待ちなせえ」と云ふ件だけは面白いがその外は禁物ばかり、先づ／＼安全な人の道を真直ぐに大森へ。

まだ東京が江戸というた時代、彌次郎兵衛と喜多八が通つたときの大森は麥藁細工が名物で

「飲にたく麥藁細工買ひ給へこれは子供をすかし屁の爲め」

といふめい歌を残してあるが、近頃は全國土産物組合とかいふ大同團結を作つて信濃の善光寺さんにも貝細工を賣れば、江の島の辨天さんには組木細工を商ふ様ぢやからトント名物に興味も湧き申さぬが、是非もない次第である。

ここは池上の本門寺に近く、毎年十月十二日の御會式には萬燈の林、群衆の波、團扇太鼓のドンドコで一大不夜城を現出するけれども、それを除くと泰平無事の町というてよいだらう。

六郷川原へさしかゝる。廣重の版畫に

「六郷(合)は名のみ川水まさりては、留りの人のはかり知られず」

と慥にあつた、六合が一升になつたか一斗になつたか、兎に角随分と宿屋の腹を肥したことであらうが、御氣の毒乍ら當分は川留めは思ひも寄らず、マサカ違へば汽車や電車の鐵橋を四つん這ひに渡つてでも越される。

川を越すと川崎、いかさま甘いこと名付たものと感心する、小學時代に鐵道唱歌で「大師河原も程近く」と習つたので川崎大師位は知つて居る、一寸よつて見ようかしらと立どまつて、そこら見廻して居る處へ婆さんがやつて來た。

「あなた何をお探ねになりますか」

「ハア、川崎大師さんは何方へ行けばいいでせうか」

「ア、大師さんへお参りなさいますか、それならツイこの向ふから曲るとよろしう御座いますが、厄除大師さんでそれはくあらたかなので御座いますよ、私はあちらへ行きますから御一緒に参りませう」と歩き出す、私もついて歩きつゝそのあらたかな譯をたづねる。婆さんは

「お寺は金剛山平間寺金乗密院と申しましてね、本尊のお像は弘法大師の御自作とか品川の沖合から上つたもので、貝殻がついて居るのぢやさうで御座います」

「さうですか、海中から出現したものに、貝殻の附着したのは當然で、それが狼に喰はれて破傷風になつて居たとでもいふなら奇体ですがね」

「滅相な、そんなことおつしやるとお罰が當りますよ、南無阿彌陀佛」

「婆さん、それは違ふ、南無阿彌陀佛は阿彌陀様に申すことで、南無大師遍照金剛といふか、オンアボキヤベイロシヤノ……」

婆さんブン／＼憤つてサツサと行つて仕舞つた、私も厄除か此旅行に氣に喰はぬ。一路平安で「はや住の江に着きにけり」では書く種がなくなるので、神奈川へ足を早める、神奈川へ二里半。

爰は片側に茶屋軒をならべ、いづれも座敷二階造、欄干つきの廊下かけはしなど渡して、浪打ぎはの景色

いたつてよし、茶屋の女、かどに立つて、

「お休みなさいやアせ、あつたかな冷飯もございやアす、煮たての肴の冷めたいのもございやアす……」

この聲に彌欠さんと喜多八は這入つていつたと十返舎一九は書いてゐる。まだ一漁村に過ぎなかつた横濱が今は浦賀の砲聲に目をさましてムリ／＼と頭を持ち上げ、街道一のこの驛も大横濱の一部に編入され、まるで主客顛倒の姿となつたも時世の勢で致方もない。

名物龜の子煎餅(東海驛路狂歌双六)

「せんべいの龜の甲せん焼上げて日和と雨のうら方となる」

神様も胸忿な、科學萬能をふり廻す人間には氣象臺といふものを作らせて當にもならぬ天氣豫報を待遠がらせる、そのズント昔にこのやうな重寶な晴雨計を賣らせて居た、ハテ文明開化が怪しうなつて來たぞ。

今の神奈川はバラツク建のケバ／＼しい色彩、宿場の時代が何となく戀しい氣がする、ヤレ／＼草臥れたこれでお次の番へ廻して置く。

神奈川より戸塚迄

口や筆では、えらい達者のことを云つてゐるが、AさんCさんは、實のところ歩くことについては、初心者で、もう神奈川邊でへと／＼になつて終つた。

「そんなことでは、とてもこの旅はむづかしゆみますぞ、元氣をお出しなはれ……」
「うん」

苦笑する顔も丕んでゐる、歩き方がまア驚鳥そのまゝですな——

この姿をみると、友を哀れむ仁慈の心が卒然と私の心に湧出しました。

「そんなら、横濱で泊ることにいたしませうか……初日のことやし、×町の簡宿（簡易宿泊所）にでも」
處が、口だけは相も變らず達者で答へ給ふには

「ははア、Bさん弱つてみえるな」

「じよ……冗談ぢやない。あんた方を憫んでこそ、横濱なんて言ひ出したのですけれど……へん……」
これでも生れは山家のそだち、てくるにかけては十里や廿里が何のその……」

「沽券にかゝはりますがな、どうです。宿らず休まず五十三次をぶつ通しまひようか？」

「オーライ、それでほつと安心をした……」

「何を——その足で」

私は、すつかりあきれかへつた。

「早う、歩かさつしやい」

「うん、富士の眺は、すてきぢやな——」

やつこのことで、よろめくと、——あるくのではない、よろめくのです——

「戸塚まではどうでもかうでもけふつきますぞいな」

「元氣だけは買つてあげまひようかな」

「何の……いまはこれ、つかれたときの足の練習や……」

ところがどうです、私が編笠、杖や草鞋などの旅装束をと、のへて、まち合せてゐる筈の横濱驛に歸つてくると、二人とも、姿が見えない。私は

「はつ」と

途端、氣がつかまりました。買物に出かけるときのニヤ／＼と笑つてゐる態度からが何だか變だつたのです。

「いま／＼しいだしぬかれた」

二人が腰かけてゐた前の掲示板に曰く

「文明機關により程ヶ谷を觀察せんため、二人はやむなく突如乗車す、B氏は、古街を徒歩にて來らるべし、戸塚驛前向つて右二軒目の宿に泊す」

「どうしてくれやう。俺も汽車でいつてやらうか？ それともこゝで泊つて困らせてやらうか？」

暫く「深甚の考慮」をめぐらしてゐたが、ふいと浮んだ、一の名案……「よし来た」と笠三つに杖三本、草鞋を肩にひつけて急いだのは友五の店。ところが南無三五は留守だ。

「厄除」を忌避したのは、私でなく、Cさん。それが私に天罰があたり運がわるくなるとは聞えない。聞えないが耳がゐないのは事實だ。

「畜生、天罰よ來れ、厄よ御參なれ、えゝくそ、かうなりや歩いてやれ、親ゆづりの自動足は、こんなときにつかひがひがあるといふものだ」

私はそこで、すっかり旅の姿となり、不要なものはあづけとぼくと上れば、東海道の程ヶ谷の宿——本音をはきますと、私の足にも、もう「豆」が出来てゐるのです。それに空模様はあやしくなるし、日はかたむいてくる。ことにお金はすっかりCさんがもつてゐる。私のポケットには先にかつたの残りはずつ金、……自轉車をかりて悠々突破する計畫が友の不在でこの始末、空元氣は出してゐるもの、實際なき出しさうなのです。

「苦を苦と知つたとき詩がうまれる」

「草枕」にこんなことがあつたが、私の旅は、道樂ではない。ことに詩人ならざる無骨な頭をいかんせんだ。たゞ昔の飛脚は、赤い小石をよつてふんで行つたといふことを思ひ出して、なるべく石をめがけてそれを學んだが、せくものは心ばかり、足の方が遠慮をしてゐる。峡谷の程ヶ谷をやつとすぎ、權太坂までくると、とうとう足はどうにもかうにもお辭儀をして終つて云ふことをきかない、をりふしぱらりぼろりと雪が降り出して來ました。

「まアお休みなさいませ」

「休まないでどうするもんぜ」

名物の餅店に懇ふ。

「ひどい坂をつくつたもんやな」

「昔から旅する方の難所の一つでムいます」

「それによつて通せばいゝものを、ぐるぐる曲つて面倒くさくて仕様があらへん」

「でも物好きですよ、汽車があるのにわざわざ歩くなど」

私は、仕様がなしに笑つたが、すぐこの武相兩州の境木のたつてゐる下を、ゴウと一聲で汽車の奴が走つてゐるかと思ふと、うらめしいやらなさないやらで、今更乍ら、AさんCさんのしうちが憎くなつたのもあたりまへでせう。

「夜道にひがくれるものか」

と、どつかと坐つてゐるものゝ、さすがに心はいそぐ。

「もう奴等は、お湯にでも這つて、くつろいでゐるだらう」

「ラムネ」で、やつと元氣をつけて二番坂にさしかゝる。老樹のしげれる間より翠黛濃かに見ゆるはくれゆく鎌倉の海、芙蓉の白峰は、玉をけづれるが如くに雲上に聳え……など、この奇觀を述べたいが、いまは

そんな元氣もござらぬ。とある石に膝かけて、たゞくれゆく空を氣にのみする。

「こゝでかうしてゐたら、戸塚からだれか迎ひをよこすだらう」

終ひには、そんな氣にもなつてゐたところへ、天は我れに與し給ふか、天は自ら助くるものを助く、……カラリコロリと、車の響き、「よし来た」私は思はず手を拍ちました。

「あゝもうしゝたのみませ」

云ふが早いかとびのる、馬方の兄哥、變な私の風に、じろ／＼と氣味わるさうな眸をなげたが

「どこまでおいでかな」

「その戸塚まで」

「ふん、まアようがす」

がたりごとりとゆれるたびにいやといふほどからだを叩かれるが、歩くよりはよつほどましだとあきらめる。

親方はいろんな話を聞かしてくれましたが、とぎれ／＼にうたふ美しい音聲の追分が闇にかすかに消えてゆく――それがことに私の耳にいつまでも残つてゐました。戸塚の入口で、馬車をすて、うさんばらしに自動車、「えゝ、二軒目の宿、こゝでムいますか」「さうかもしれん」「いらつしやい。」「來てゐるか」「えゝお待兼ね」

と云ふ女中相好をくづして笑ふ、そこへどや／＼とAさんCさん宿の人達みんな、クス／＼。やがて大笑ひ。「何だい――」云ひつゝふと店の鏡に姿をうつせば、

私の服も頭も石灰で眞白。

「ひやっ」

勿論云ふ迄もなくこれは石灰をつんだ馬車につてねころんでゐた祟り、道中が暴露して自動車横付の計畫がこれで、おちやん。

戸塚から鎌倉へ

湯からあがつてくると、Aさんは眼鏡ごしに地圖をひろげ旅行案内と首引にして、しきりにダイヤグラム（豫定表）を作成されてゐる。この人、企畫にかけては、好きでもありな／＼名案を絞り出すことに妙である。この昭和の春旅なども、もと／＼この人の發願である。だがいらぬこんな功德にもならぬ旅を一念發起するから吾々同行も苦勞せねばならぬ。

「可愛い子には旅をさせ」といふこともあるし、暢氣な旅ならきらいな方ではないが、かうして何だか人様のために、かくも苦勞するのかと思へば、そゞろ、旅はういものつらいもの、發願者を恨みたくなる。それに初日から、あゝだからこれからさきの長い道中の行末が心細くなる。

「お安いところで願ひますぞな」

さう云つて火鉢の前に、どつかと坐り覗き見れば、氣味わるう流し目で、ニヤ／＼と笑つてゐる。

Cさんは本来の姿にかへり茶人めいて……おつと俳人めいて……きちんと机に向ひ筆をもつてしきりと捻出に餘念がない。さすが斯道の宗匠だ。形からがすつかり出来てゐる。

二個とも立派な漫畫の好題だ。うらむらくは畫才のなき身を。それでも畫人の心が、畫中の人か……何か知らんが梅湯をのみ乍ら二個の畫心の像にしばし悦にふけつてゐると、Cさん變な阿波なまりで、

「一句ありましえんか」

「うーん、一句？ 一句どころか萬句ありでさ、とう／＼としてつきずでがアすが……」

「ほんならひとつ願ひまひようか」

さし出されたのは、嚴とし肅たる勿體ぶつた句帳とござる。Aさんが生々しく達筆をふるうてゐる。

「Aさんも、句をおやりでがアすか」

「やるもやらぬも、今更そんなことに回答の要なしでさ」

高く括つてすましたもの、やがてC宗匠うやくしく筆に墨をふくませて捧持し來り、

「さアどうぞ」

「何しますのえ——」

「さア早い處で一句を……」

「何に一句でげすつて—— 阿呆かいな。句がちがひますがな、頭のわるい。わたしの苦はクヤが苦樂の

クヤ。その無念骨髓に達するほどの苦が念々不捨でがアすのや」

「何や洒落かこいつかつがれた」

Cさん微笑をするのをとつつかまへて

「何やこやもあるものか。そんな駄句の暇がありや、足もんでおくれなはれ。功德善根によつほどなりま

すぞな」と足をさしのばせば

「そのうち按摩を習つておきませうね……」

鎌倉ある記

早朝戸塚の宿を出て大船から乗車に即決可決で煙を吐かない電氣機關車に引つづつて貫つて鎌倉驛につくと、不思議にも五郎と十郎が迎へに來てゐた。五郎十郎と云つても曾我廼家とは違ふ。あの時宗祐成だ。芝居に出ると同じ扮装で五郎はやつぱり紅の隈どりをしてゐる。どうも連立つて歩くとじろ／＼見られるやうでこちらがきまりが悪いやうだ。でも何せ物語の都である鎌倉のことだ、知事が出迎へて呉れるよりは嬉しいに違ひない。

「どれ、少し案内してやらう」

と二人の兄弟は親切に云つて呉れるが、先刻大船で食つたハムサンドウイツチ位ではこの先引張り廻され
ては足下が覺束ない。と云つていくら名物でもこの上鎌倉公のサラダも食ひたくない。エま、よとついで
ゆく。

驛から眞直に八幡宮前の若宮大路に出る、この大路は由比が濱に通じた大通りで、昔のメインストリート
(本通)、その松並木に添うて、八幡宮に参詣する、地震で拜殿も倒れてしまひ一寸以前とは趣が變つて
ゐるが今では保護建造物になつてゐるのが多い。

「この拜殿で、義貞が高時の首實験をしたのだし。これから左右に廻廊があつたが、その廻廊で頼朝と政
子が例の白拍子静御前の舞曲を見たのだ」と十郎祐成が教へて呉れる。

「いやその時の静の藝術には、みんなが涙ぐましい感激に打たれざるを得なかつた、いくどもいくどもア
ンコールされたよ」と五郎が妙なことを云ふ。一寸頭が變になる。

こゝには仁徳帝を祀る若宮があり、その右に自旗神社がある。祭神頼朝の像と對坐して秀吉が「天下の
英雄吾と君とのみ」と木像の肩を叩いて共鳴したと云ふ話もある。いや鎌倉には、至る所にローマンスがこ
ろがつてゐる。

石段を昇れば例の大銀杏、

「白のペールをかぶつた公曉が……」

「一寸まつて呉れペールぢや話にならないよ」と注意するとそゝつかしやの五郎の奴、昔者に思はれまい
として、

「でその瞬間にだね」だとか「そこに運命づけられた死が彼を待つてゐた」とか氣味の悪い口を利く。
どうも昔者が新しがらうとするといや味になる。

八幡宮を出て東へゆくと師範學校がある。それが三浦り邸址だ。

「ハ、ア鎌倉三代記だな、若宮口の戰場よりと云ふ地があるから、義盛と義時の戦争だらう」とC記者
が例の考證ぶりを出す。と十郎が、

「この邊には島山もあれば、頼朝の屋敷もあり、まあ今の永田町と云ふところだ」と今昔物語をする。

それから僕たちは、頼朝と並んでゐる大江廣元、鳥津久元の墓に詣で、鎌倉宮に額いて裏山の土牢に護良
親王の御心事を偲び奉つたり、太平記にある青砥藤網の滑川、北條氏没落の前後の悲劇にそつと涙して、更
に南へ二三丁のところにある日蓮上人辻説法の址を訪ねる。坪内逍遙の「法難」でその場面は生きて
来る。松葉ヶ谷の庵室から「街に出て、」の大獅子吼であつたのだが、その松葉ヶ谷はこの辻から四五丁の
ところ、そこに安國論寺がある。「立正安國論」草稿の處だ。

「一體鎌倉には支那の五大山に倣つて五山ある。圓覺寺、建長寺は今でも有名だ、あの時代の文化の中心で

新しい思想はそこから生れ、文明の批判はそこで行はれたのだ。」若くても兄だけに祐成は、雑誌でも読んで覚えてゐたかこんなことを教へて呉れる。

「謠曲もその坊さん達の筆のすさびだと云ふね」と僕が突ついて見ると時宗がまげぬ氣になつて、

「あの頃の坊さんは、あの謠曲を通して時代を諷刺したのさ」と知つたかふりをする。謠曲と云はゞ鐵道踏切から右に折れて二町ばかりのところ、明月院と云ふのがあるが。この邊が最明寺の址で「鉢の木」の時頼の墓がある。

ゆつくり調べて歩けば随分と面白からうが。史蹟調査委員でない悲しさに同行三人、案内の五郎十郎、少しはくたびれたのでそこはいゝか風に

夏なら濱に出て、海濱ホテルでも休憩するんだが……」とお愛想を云はれて、長谷へ行くべく電車の方へ歩いてゆくと、その松林に大へんな人だかりがあるから覗いて見ると、久米正雄がボテトウプロダクション(資本金がないので俳優たちは、おさつを食つて働いてゐるところから名づく)の連中を指揮してロケーションをやつてゐるのであつた。

「おや君たちの姿が見えないので、矢さがししてゐるのさ、勝手に飛び出しちゃ困る」と五郎十郎を見つけ、久米監督がブリー／＼きめつけてゐる。

「して見ると、五郎十郎は映畫俳優が扮装のまゝで來てゐたのか」

「いや、道理で現代のことをよく知つてると思つた」と一同口あんぐり。

鎌倉より江の島

人も疲れて來ると纏りが早い。一讀會も二讀會もなく。無論三讀會は省略して確定議となつたのは今晚の泊りが江の島といふ件であつた。そこでさう事がきまると先を急ぐ、これも異議なく電車の切符を求めて乗り込んだ、スルト妙なもので元氣が出て來た。

「由比ヶ濱を見て行かうか」これはAさん。「由比ヶ濱ならよくわかつてゐる」これはBさん、これは可笑しいぞ、Bさんは此地はなるこ參りの管だ。

「名高いとこだ、見て置くもよいね」と私が探りを入れるとBさん之を受けて、

「濱は陸の方に松があつて海の方から浪が寄せて來る、何度も同じぢや」

あぶない、エライ太刀風ぢや、即座に「念彼觀音力刀刃段々壞」と普門品の偈を應用してこの難を避けた。

爲めに本案は審議未了の内に會期満了して長谷寺が近づく、車窓から大佛さんのお顔が拜まれる、今度はBさんへの敵討に下車しようとも言はず、電車の車掌も氣を利かせて「動きまゐーす」

發車を見定めてから説明にかゝる。

「Bさん、この本尊は大和長谷寺のと同木同作で長さ二丈六尺の十一面觀世音、あの大きな廬舎那佛は

三丈八寸、形相端嚴、先年、與謝野晶子女史が、

「鎌倉や御佛なれど大佛は美男におはす夏木立かな」と讃仰した程です、

トンネルを出て左に見えるのが稻村ヶ崎の鼻で新田義貞が黄金作りの太刀を龍神に奉つた處、七里ヶ濱にかゝると大島も見える富士も見える、その續きが腰越、辨慶が腰越狀を書いた土地で、その先が片瀬、先づ龍口寺へ參つて日蓮上人法難の龍ノ口遺蹟を探るも結構だが、日蓮上人に逢へるでなし、只寺があるばかり、何處も同じことぢやから止ませうね」

と、まくしかけると、Bさんもさすがにうんざりして御座つた。

片瀬で途中下車、これから江の島へ渡る、道の兩側は宿屋と土産物とで版木摺の言葉で都の客？を呼

て立ゝゐる、又お組末な草履五六足並べて「足許がお危なう御座います、之を召してお越しなさいませ」と

親切な商賣人がうるさい程ゐる、ナル程、島へ架けた假橋は長い、ゆらくするだらう。島も小さいが巖石

は巍峨と聳立つてゐるのが目につく、デモ遊覽地を靴で踏めぬ事もあるまいと厚意を無にして通り抜けた。

型の如く參拜を遂げる。柳も辨財天は……Aさんが笑つてゐるので縁起はよさう……辨財天のけると外

は片輪なり、七福神の内て圓滿具足のお方はこの御一人だけと川柳子が嘗て持上げたので、ごきりようを鼻

にかけて嫉妬心が強い、夫婦が一緒に參詣すると、どちらか先へ三年の内に死ぬといふ、幸ひAさんBさ

ん、皆男だとお自分におつしやるから先づ安心、御利益で筆端からは龍が躍つて昇天致しませうとからか

つて島を廻る。「旦那貝を探りませう」と例の海女が云ふが豫て隠して置いたものを金の數に合せて持出して来るのは必定、それも面白くなし、龍窟の窟辨天も這入る程の信心家でもないから口から覗いて引返し、宿を求めぬ。

江の島より大磯へ

Bさんに起されて澁々床を離れる。常に宵寝早起の私が人に起されるといふのは珍らしいのです。それは昨夜隣室の団体旅行の連中に午前二時過ぎでも騒がれて、疲れた神経は益々興奮して眠れはせず。

世の中にかほどうのさき物はなし隣の客の馬鹿騒ぎする
こんな事も考へて、やつと眠れたのが四時頃であつたのだから實際今朝は起きづらひ。

顔を洗つて上つて来ると、昨夜の連中は早や二階の廊下に押合うて「アレ富士が見える」と子供が風揚げでもしてるやうに嬉しがつてゐる。そして私等に昨夜は御迷惑をかけたと言つた一言の挨拶もない。私はその傍へ行つて、

「ここから富士は特にいいのです。古い話ですが、かしく坊といふのは朝に晝に夕に眺め暮して自分の年の寄ることも忘れてゐたものです、晩年臨終に及んで、

富士の雪とけて硯の墨衣かしくは筆の終りなりけり

と詠んだといふ程に相州の富士とかしく坊は有名なのですよ」と説明してやると皆が私の方へ注目して敬意を表してゐるので、一寸溜飲を下けたつもりで部屋に引下つた。片瀬から又電車で藤澤まで行く。片瀬の海岸は明治時代にはよく小説の種になつたものぢやが、民衆化したかして、近頃の文壇には一向名があらぬ。

「東海道は日本の大廊下」藤澤へ出る。交通機關の發達もよいが五十三次の汽車イヤ記者が鎌倉まで脱線するとはチト陽氣の加減であつた。この地には遊行寺がある。遊行四世の僧呑海上人が開山で藤澤道場として名高い。参詣したのであるが今日は三島迄やつ付けるとお二人がおつしやるから、道しるべの建つた辻で遙拜して進む。尤も昨日は車中ばかりで足がすくんだから少し歩くことにしたのである。

そこで運歩の講習を始めた。初日にBさんが赤石を踏まずに歩くと勞れずに疾いと云ふ事を云つて居たが迷信臭くて近代の科學的説明でない。嘗て新納武藏守は山坂達者の一條を設けて健脚のことを説いた。健脚は健康による、此健康は國民精氣の元素である。健脚それ貴い哉。運歩の方に三種ある。

第一眞の歩驟といつて右左の足を五分五分に運歩する。第二行の歩驟とて四分六分に運歩する。第三草の歩驟之は普通の運歩である。此法をよく會得して歩くと何百里踏破しても疲勞のくることはない。それから正裝時の運歩。上り坂、又下り坂及平地運歩の法があるが平地運歩法で三種の歩驟の用ゐる方を述べる。平地を歩くときは、初は眞の歩驟を用ゐる五歩五歩に一町歩き、次に行の歩驟で左六分右四分で一町行き、

次に右六分左四分で一町歩き、次に草の歩驟即ち普通の運歩で一町歩き、これを順次變換して行けばよい。今日は速成講習であるから一足飛びに次は千里善走法といふ奥傳を公開するといふて何も本を賣り付けはしないから安心して讀みなさい。口傳に

「人々急ぐときは緩ふせよ。遠くに至らば必ず近きに至るが如くせよ」

これには七体の秘術がある。一、頭を以て運歩する。即ち頭上に心をおき頭が前に進む心である。二、胸を以て運歩する。即ち頭を控へて胸を突出して進む。三、眞の歩驟で腰をすゑて運ぶ。四、右足六分左足四分で行く、五、左足六分右足四分で行く。六、右の手を以て歩く、即ち右手を重にあげて歩く。七、左の手を以て歩く。この七体を順次變へてあるくと、歩に従て自然と速くなりまた足の痛みもなく輕快に歩行が出来る。

「草臥たやつが見付ける一里塚」運歩の法談で、茅が崎は知らずに通過したが、實習に草臥れて馬入川を越すと足が前へ出なくなつた。で馬入は埴生の訛傳だの、川はあら川で出水で早いのだと、道中案内を振廻した位では利目がない。漸く平塚驛に這付て尻を押してAさんBさんを汽車にのせる。

大磯へは二哩半とか。

大磯より小田原へ

俳人といふものは、變な處に趣味をもつものだ。何も西行がたつた一句、「心なき身にも哀はしられけり鳴立澤の秋の夕暮」とよんだからとてそんなにありがたがる必要もなければ、その風雅を慕うて元祿の頃大湊三千風が庵を結んだ——さうしてその鳴立庵には今でも庵守の俳人がをるからと云つて隨喜する必要があるまい。ことに世はかはり時は移て來た今日なのに「さんわざ」鳴立澤に「よらんなん」と駄々をこねるので大磯でをりる。こゝは立派な今は別荘地、成功とは、富をつくることだと云へてゐる人は、努力してこゝらに別荘もたて、富貴のお仲間入をなさるといふ。

むかしは、遊樂の地で繁榮を極めた處だつた。曾我兄弟に關連する虎御前の宿もこゝらあたりだつたらう。延臺寺に虎子石といふのが残つてゐる。十郎が虎の家に泊つた夜祐經の間者が十郎を射るため矢を放つた。其がこの石にあたつて彼は恙なきことを得たといふので身代石とも云はれ、石面に鏃の跡がある、尙虎御前の忌日には必ず雨がふるさうだ。これを大磯の虎の雨と稱し名物(?)の一になつてゐる。明治の代に海水浴場を拵へてめき／＼この町も復活して來た。而て之が我國の海水浴場の元祖であるといふ。これから國府津までは三里。だが景色がいゝ。西行がみたからでもなく昔の詩人が歌に残したからでもなく、たしかに俺の眸にもよいところとうつる。それに西行の生活論や、この大磯で春政こと伊藤公が滄浪閣をつ

くりこゝで天下の政治を支配したころのAさんの逸談漫語で花がさいたので、旅のつらさもそんなに感じなかつた。

途中でくつた密柑は腐りかけてゐたがその味はまだ舌にこびりついてゐる。

國府津は、東京から凡四十九哩、熱海線の駈れる處である。ずつと昔こゝに關門を置いてその征錢で鶴岡八幡の修繕をしたことがある。北條時代は舟主で魚を献上して免税になつた。眞樂寺は勸堂とも云つて親鸞の遺跡、本願寺の門跡が下向するときには寺主は黍稗米の三品でつくつた團子と砂蕎麥を饗應する慣ひになつてゐたと。

「あいつを越えるのだ」と箱根連山を眺める間もしばし小田原で電車をおりる。八棟造りの虎屋がすぐ目につく。名高い外郎屋だ。どうして「ういらう」とよむのかCさんにたづねても分らぬが、唐人陳外郎の裔孫宇野某が、京洛より來り北條氏綱に謁し宅を賜り靈藥をうつたのが初まりである。今でも透頂香をうつてゐる。城趾は御用邸になつてゐる。北條氏綱氏康のとき東國の府城となつたが豊臣氏に亡ぼされた。近くに二宮神社、その北に小峯の梅林寺がある、今や馥郁たる清香をはなつてゐるがこゝの名物梅漬はさうありがたくない。

三浦三崎あたりから上陸する唐人はこの町にて唐物を商うた。「交易賣買の利潤は四條五條にすぎたり」といふからその繁榮の過去が繪のやうにうつる。この風光なつかしくて去るにしのびず遂にこの町の住人と

なつた唐人も多くあつたらしい。つまり今でいふ外國人の居留地ともなつてゐたのだ。風土記には、洪水が出て道がぬかるみにならんやうに窪んだ所へは石土をもちかけ結構にしておけといふ風な訓示がのつてゐる。

小田原提灯は享保の頃から諸國にうられ今では、全國にわたつてゐる。又昔から石工や鑄物師の名匠が多くこの地から出た。永祿時代の鐵砲もこゝでつくられたものだ。「小田原評定」は其昔の北條家の手ぬるい評定から出たさうだが、これだけ宣傳のきいたものは外に一寸あるまい。

外郎を餅かとうまくだまされてこは薬ぢやと苦いかほする。

これは彌次さんのうただが、同行はいそぐ箱根越を。のんきな與太もとばして居れず、大急ぎで電車の人とはなる。

|| 箱根越え 沼津迄 ||

「箱根の山は天下の險」と子供の時分に教へて貰つたお蔭で、おそろしくをつかない氣持に囚はれてゐる自分は、三人連れの氣丈さに安心はしてゐながらも、箱根の關所は無事に越せるか實は心配した。

が文明の世の有難さで小田原電鐵の御厄介になつて、古來の險山を超えられたにした。此場合小田原評定などは吾人の關せざるところである。がさて乗つて見ると此電車すこぶる不安全で生命保險をかけてからでな

いと、先年も大遭難があつた次第だから、どなたかは知らぬが、カーブにさしかゝる度に、ブル／＼ものでゐた人がありましたつけ。

さて馬子うたに鈴の音のかかりに、キーツと云ふ非音樂的なきしりを立て、電車は上つてゆく、無論われ／＼も山へ山へと上つてゆく、東海道を下るのだから、一體なら本道をゆくのが本筋であるが、いづれ關所さへ破らねばおしをきにもなるまいと、チョイト勝手をして横道にそれるダイヤゲラム。湯本の手前の三枚橋から須雲川の溪間を通つて箱根町へ出るのがあたり前の道中、それを電車ですうつとゆくとにする。何でも箱根には湯本、塔の澤、宮の下、底倉、堂ヶ島、木賀、強羅、小涌谷、蘆の湯、仙石、姥子、湯の花澤をはじめ今は十二湯もあり、温泉にも酸性あり、硫黄あり、鹽類あり、單性あり、まるで温泉の博覽會みたいだ。それに青葉の頃にも、紅葉の頃にも山中の眺めは盡きぬと云ふ名所、これで人が來なければどうかしてゐる筈。ところがこの頃は熱海伊東方面に都會の足が向いて箱根は舊道の廢止と共にさびれてゐる。塔の澤附近には例の箱根靈驗燈仇討で有名な初花が「此處らあたりは山家ゆる紅葉のあるのに雪が降る」と云つたあの阿彌陀寺もあるし、こゝから宮下底倉と上にしたがつて九十九折の山溪、脚底遙に水聲を聞くのも冒險的快味がある。底倉には秀吉が小田原城征伐の折石風呂を築いて將卒の戰勞を休め創傷を癒させたと云ふ舊跡もある。

それから小涌谷、いはゆる小地獄の噴氣孔から熱氣を噴いてゐる。この近くに讀本にある新羅三郎義光が

豊原時秋に笙の秘曲を授けた箱塚山がある。次は強羅だ。強羅は電車の終點、會社經營の強羅遊園地に強羅ホテルがある。設備の完全と大浴場と手輕なので客を呼んでゐたが、震災後はさつぱりさびれてしまつた。こゝからケーブルカーで上強羅にゆき、それから徒歩で湖尻へ、途中に大湧谷あり、罪障あるものは墮獄の浮目をみればならぬ。幸ひ無事で盧湖畔につく。この湖は太古の噴火口に水が溜つたのがもとで、底なしの湖と云ふとあなおそろしや。

しかしそこを大膽にもモーターボートで波を切つて箱根町へ、いやとても素敵な眺めだ、氣分滿點、箱根離宮あり、箱根神社あり、曾我兄弟、多田滿仲の墓あり、町はづれにある關所にかゝる。

「まづ貴殿よりお先へ」

Bさんが柄にもなく遠慮する。

「いざ御兩所より……」

拙者もゆづる、彼方には挿畫の通りの大支關、ズラリ並んだ警固の面々、しかしこちらは名だたる關東の大名ぞろひとあべこべに平身低頭「公儀御用」のバスボード（旅券）のきゝめは大したものだ。

關所を過ぎると何となく氣がぐつたりしたのが三人ともに疲れが出て來た。

「どうだ飛ばさうか」と衆議一決すぐに乗合を利用して三島へ、が今の三島はつまらぬもので、も一息出て沼津泊とする。

「あすは興津詣でもするかな」とBさんが政黨の領袖になつたつもりで云ふから、
「誰が……」と聞けば、
「いや、爾公は京都の方でなかつたかな」
とCさんが考證する。で結局止めにして、波の音を子守唄と聞いて——そんな柄でもないが——まづ床にをさまる。

記者の出動

C君に故障が起つたから豫備出動で明早朝沼津へ来い——といふ意味の電報が「春旅」の先から來たのが夜更けた十時過ぎである。日本橋を出立するときにお愛想上手にうっかり口をすべらして

「旅は道づれ世は情、心亂御無用、困つた時には電報がある……」

なんて大きなことを云つて置いたものだからその手前反古にも出來ないし、それがといつて彌次喜多八どの補選に打つて出る程の野心も無かつたのに：まあいゝ「身から出た旅」だとしやれてあきらめて出動と決めた！ 家中を一騒がせやつて東京驛へ着いたのが發車三分前、切符を買ふにも氣が氣でない、やうやつと乗り込んだところで十一時半の終列車は除ろにホームを離れた。乗つてさへ仕舞へば占めたもので、二つ三つ深呼吸をやつて見て胸の調節をとつてゐるうちにどうやら動悸も鎮まつて來た。眼には底力が湧いて來

る。車中様々の光景がゆつくりと拜觀出來得る氣持にまで落ついて來た。

生れつき乗り物には負けない性分しやうぶんで此頃では何か書きものでもして思ふ様に筆の進まないときなどにはさつさと市内電車しないでんしゃで一巡りやつて來る。さうすると妙に氣分が引立つて構想がうまくなる……といった癖がある。今もいゝ心もちになつて色んな事を考へ出してゐる。

一しきり賑かたつた車中も十二時過ると申合せたやうに静かになる。信玄しんげん袋ぶくろを擔いで先を争つたらうお婆さんもおとなしく居眠つてゐる。どうやら睡氣がさして來たやうだ……沼津！沼津！はいいものでもう沼津へ來た。午前三時半だ。恐らくこんな早起はなからうなんて考へてゐると新聞屋がさかんに活動を始めてゐる。「やア御苦勞！」

B君が元氣よく迎へて呉れた。後をついて驛前のN旅館に入る。A君が寝呆け眼をこすつてしきりに豆火を擴大してゐる。どんな容子ようすだかと内心實は案じてゐたC君もニコ／＼と床とこの中で笑つてゐる。此の分なら何も心配しんぱいに及ばぬ事で、名物あさりをやつて消化機關せうかきかんを害ねたやうな御病人なら四五日ひびしにして置けば全快請合だなんて傍からB君が憎まれ口を利くもんだからC君が心もち顔を赤らめる。さうするとA君が助け船を出した氣持でC君をかばふ……なんののかんのと時の一時間も興に乗つてはしやくものだから案の定隣室のお客から抗議かうぎが出た。冷ッと來たがもう遅い。斯うなるからには寝るに如くは無し……といふところで今度は眼と眼であいさつ、出かけた咳せきへ忍び耐えてこつそりと布ふとんにくるまつて仕舞ふ。眼を隠し耳をか

くし頭までかくして危険豫防……とは案外氣の弱い御連中ではある。

沼津から興津

沼津と云へば御用邸……とすぐ對句に出るやうにそれ程沼津は御用邸の名で響いてゐる。惜い哉、舊臘祝融さいやくの災厄を蒙つて其大半を灰にしてしまつたのだが、かうして旅舎りよしゃの二階から見渡した所マザ／＼と其慘狀が偲おもばれる。幸ひ御用邸は川をはさんで程遠く離れて在り事無きを待たのは何よりの喜びである。

「さア出發！」

A君が支配格しはいかくでさいはいを振る。C君はうらめしさうに休養きやうやう、さし代つて吾輩わがはいが罷り越して相も變らず同行三人、浮世うきよを七分三分で通りぬけやうといふ連中の事だからイヤハヤ口喧しい事、どや／＼とタクシイに乗り込んで一氣に東海の本道を蕩進する。

「え、景色けしきだなア……どうだい駿河灣すまがわんの風光のいゝ事……江戸かほづ(井)の蛙大海かほづを知らずでんで此邊へ來て見ると全く東京の泥海でいかいがいやんなつち舞ふ」なんて偉えらさうな事を仰せある。其癖くせ人一倍都を戀しがる癖に東京こそいゝ迷惑だ。

千本松原まつばやしの松林を左に愛鷹山を右に見て、鐵道線路てつどうせんろをそつて原、鈴川を通過し富士驛ふじえきに到着する。此處が有名な身延詣みんえんげいでの關門である。名古屋なごやから又は東京から日歸りの參詣さんげいが出来るのは全く身延鐵道のお蔭様

々だ。お題目の行者に限らない。少くとも日蓮上人が最も日本的な宗教的偉人であつたといふ事を知る程の者は必ず一度拜禮を遂げる義務がある。あんまり讃仰が過ると鐵道の重役の息子かな？なんぞ疑ぐられては片腹痛い譯だからやめるが、老婆親切に一つ身延山を紹介して置かう……。身延山は古への養夫の里で文永波木井六郎實長が日蓮上人に歸依して今の西谷といふ所に庵を營み住はしめた。是れが久遠寺の權輿で現今法華宗の總本山として海内無双の靈地とされてゐる。山水明媚、俗塵を超越して風光清く、詣づる者をしてひとしく靈威を感じしめないで措かない。汽車で二時間半、富士川畔の終點身延驛に下車して身延町まで一里道路平坦で乗物の交通が自由である。先づ波木井の村に出づれば村はづれに日蓮上人が此地に來りこゝに始めて草鞋を解いたといふ舊蹟がある。身延町の入口へかゝると總門が嚴めしく立て日蓮上人の筆になつた開會關の扁額が高くかゝつてある。左に數十級の石段があつて上に一小堂が置かれてある。文永十一年の夏、日蓮此山に入らんれして波木井氏と會見した趾ださうだ。逢島ともいひ別に發心堂とも名づけてゐる。堂の前に上人の腰掛石がある……。

説明に一生懸命になつてゐるころをB君がしきりに下山を勧める。「奥の院まで登つた日には脚が棒になる……いゝ加減によして呉れヨ……」だと。佛信心にいゝ加減つていふことがあるか不信心な先生だなアとちよいと爪つてやりたかつたが、待て〜ものは考へやうだ。うっかり中仙道まで迷ひこむところを本道へ引戻して呉れた恩人だと思へば腹も立たない、ヨソノ諾々と

引返す事にした。その代り名物の富士川を觀賞する事に話がまとまつた。

往昔、甲斐盆地は悉く湖であつたが景行天皇の御宇に、鹽土翁なるもの湖水疏鑿の工を起し後養老年間に僧行基が更に壁開して富士川に導くとは國史の記するところであつて、上流の鐵澤から水路十八里、東海道に岩淵に至る間は甲州の活路であつて貨物の運送は偏にこれによつたものである。世が文明になつて最近富士川にも飛行艇が走りつねに往復してゐるがそれは身延に至る上流のみで身延から下流はまんまとお客も貨物も鐵道に吸取られたかたちで、有名な富士川下りの船子たちは飯の食ひあげになつたといふ氣の毒な話も此邊では度々聞かされる。しかし音に聞えた富士川である。兩岸山吹の花咲く頃より夏の青葉、秋の紅葉に至る迄その折々の眺めがとて素敵なので、水量豊かな急流を熟練した舟子の操縦に任せて下る爽快味は得も云はれぬと見えて、見てゐる間に二三艘の客舟がは、やてのやうに迂つてゆく。

富士驛前で再び車上の人となつたのがそれから可なり經つてからの事であつた。百人一首でおなじみの田子の浦を眺めて一齊に富士の高嶺を仰ぎ見る。今まで忘れてゐた譯ではないんだが殊更に富士との對照がもつともらしく歌つてあるものだからつひ釣り込まれた……といふ事ほど石様に歌一首でもお組末には出来ない。東海道を通るほどのものは馬や車で無い限り

田子の浦うち出で見れば白たへの
富士の高嶺に雪は降りつゝ

を口吟むに違ひ無い。偉なる哉偉なる哉、和歌萬歳！

富士川を越した自動車は勢よく蒲原を通過して興津めがけて飛ぶ、可なり空腹をうつつたへて来た。鯛は興津鯛で名が賣れてゐる。それにさくらえび岡からは密柑がとれるいちごが出る、茶は一番の輸出品、興津へ着いたときにそんな盛澤山に埋もつて一寝入り寝込んだと考へると、西園寺さんのお隣りへ別荘でもつくつたときのやうな心持になつていゝ氣になる。

興津から大井川へ

「血氣にはやる乾分をしづめて容易に動ぜぬ次郎長も、可愛がつてゐた石松のやられた時だけは、おのれ都鳥の奴めと本氣に怒つたさうだ。全く次郎長としてめづらしいとだ」と新來のD君が伯山そのので「次郎長傳」を語る。ところは清水の梅隠寺境内次郎長以下大政小政などの墓の前だ。

「その次郎長はじめ乾分たちが、ふぐを食つた話をしつてゐるかい」と物知り顔に云ひ出したのはかく申す拙者。

「この梅隠寺には身内のものがよく寄つた、ある時何かのとでこの座敷をかり、開けた和尚のとりなしでふぐの御馳走になつたが、それに中毒してみんなやられた、と寺男がふぐにあたれば土に埋めるともどるときいてゐたのでやつてみたところ、うまく親分だけはおどつたが、大政小政などはとう／＼もどらなかつた。

腕ぶしの強い先生たちの最後としてはあはれであつたよ」と見てゐたやうなことをしやべつたが、尻こそばゆくて。

「だがどうせ講談じこみだから眞偽のほどはわからぬよ」と逃げを張る。

清水港と云はゞ静岡茶の輸出港だ。横濱の大谷嘉兵衛を大金持にした所で、關東大震災のときには、こゝまでやつとこさで東下りをし、こゝから軍艦で關西方面へ運んでゐたところとして江尻の名と共におぼえてゐる。

この邊次郎長でおなじみの山岡鐵舟が庵をむすんだ鐵舟寺、大蘇鐵とともに明治の文豪樗牛の「吾人は須く現代を超越せざるべからず」の碑文のある龍華寺、権現さまを祀つた久能山、府中又の名は駿府、徳川三百年の發祥地たる静岡、今では新聞記者が入京する名士を待ちうけて何々氏談をとるべく乗込むところのお土産のわさび漬位の有名さではあるが昔は駿府ときけばすつくと直立不動の姿勢をとつた旗本もあつたと云ふほどの重要地。

江尻から清水へ廻つた同行三人は、徒に次郎長傳にきゝとれてゐる譯にもゆかず、申譯ないとながら、そこは天領の威厳をもつて久能山も駿府も素通りして——と云つて徳川の天下をくつがへさんとした由井正雪にかぶれた譯ではなく——先を急ぐ。

草薙は日本武尊が東北征伐の砌、焼津で野火の難に逢ひ給ひ、草薙の劍の靈威によつて難をのがれ給

うたところから地名にのこり草薙神社が祀られてゐる。また静岡の市街に接して賤機山には海の神様である浅間神社がある。海外發展を本領とする我國民には御朱印船の昔から忘れてはならぬ神様である。こゝに又安部川が流れてゐる。街道筋の一つの難所であつたがその東川端にあるみろく茶屋の安部川もちの方が早わかりする。

「みろく茶屋で休んで見るかな」甘黨のD君が云ひ出す。

「いや、あんなものを食ふとまた電報を打つて誰か呼ばねばならぬからよせよ」とB君がお父さんぶりを發揮する。實は賛成でないかららしい。

藤枝、島田あたりは昔はかなりの宿場であつたかも知れぬが、今は大したことはない。それよりも大井川だけは海道一の難所として今も人々の胸にのこる。

名に高き街道一の大井川、篠を乱して降る雨に打交り、鳴るはたゞ神みなぎり落る水音は物凄くも又すさまじき夫を戀ふ念力に道の難所も見えぬ目も厭はぬ深雪がこけつまるびつ、漸々こゝに……

来て見れば、年月たづぬる胸澤治郎左衛門は先に渡つてしまひ、川は止まつたときいた深雪の狂乱が三人の頭に舞臺そのまゝにうつつて見れば好奇心は大井川へ向つて走る。

大井川より濱松へ

大井川の難嶮とは、これ名のみ、三千數百尺の橋は、文明の賜にせよ、川底あさく水はかれて、今のお江戸のまん中を、雨のふる日に一調羅の洋服きこんで歩く方が、どれほど辛苦であるやら知れぬ。

きけば、風雨となると、逆巻怒濤滔々として狂ひ、實にこれ天下の壯觀にあらずんばあるべからずといふことださうだが、お互、顔を見合せて微笑笑。

橋の袖のとある店で憩ふと、お婆さん種々ほこらしげに大井川の説明をしてくれる。それによると橋がかゝらないと云ふわけでもなかつたが、天嶮を利用して、徳川さんが攻防のため、橋も船も禁じたのださうな。序に「雲助さんはもうをりませんか」と、ふいとたづねたら、婆さん口をつぐんでしまつた。もとこゝらあたりには七百余人もゐて、この大井川でくつてゐたのだから豪氣なものだ。これはひよつとしたら縁故の人であつたかも知れない。わるいことをたづねたとすまなく思つた。だが、拙者の心は敢てさげすんで云うたのではない。大体、俺は人が人を差別することは大嫌だ。否それは不當だと思ふ。職業の差はあれ、地位の高低はあれ、人間は人間として本来が平等であるべきだ。業によつて之を差別するが如きは之れ外道の教、あさましい根性である。現在の水平社の同人の聲をきけ、何といふ悲惨な人的悲劇だ。明治の開放よりこゝに六十年を過ぎつゝ、何といふ過去に灰滅し去るべき因習妄見が残存してゐることだ。

吾人は先づこの人達の前に懺悔し、合掌し、ひれふして許しを乞はねばならぬ。人々よ、手をさしのべよ。そこには同じ同行どうぎやうがあり同胞どうぼうがあるのだ。——いまの場合たゞ俺のたづね方がわるかつたのだ。俺は若しもあたらその老人らうじんにあつて、その様子をききたいと思つたのだつた。

下は永い隧道とんねる、上は勝頼と家康の古戦場こせんぢやう、牧野ヶ原をすぎると、今はさびれてゐるが鎌倉時代かまくらじだいには繁榮はんえいを來したこのある菊川の宿しゆくである。

前中納言ぜんちゆうなごん宗行むねゆき卿きやうが鎌倉に護送ごそうされる途中

昔南陽縣之菊水 汲下流而延齡 今東海道之菊川 宿西岸而亡命

と旅宿りよしゆくの柱にかきのこしてはて、更に後醍醐天皇ごたいごてんわうの時、俊基朝臣あそんが同じ運命いたづらの弄戯いたづらをかなしみつゝ、奇しくもその宿しゆくにめぐり泊り、

「いにしへもかゝるためしをきく川の同じ流れに身をば沈めむ」

とのうたを残してこの野の露と消えたといふ哀れな物語とを刻んだ所、そゞろ同行自らあいるみ哀涙あいるみを催さるゝのであつた。

次が、詩人俳人しじんはいじんが有名にした「小夜の中山」、名からちよつと詩的に響く。芭蕉はせうはこゝで「馬にねて殘夢月遠し茶のけむり」「いのちなりわづかの笠の下涼み」とよんだ。西行さいぎやうは「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」と。しかし、これ位の嶮路けんろは朝飯前のこと。今夏はアルプスでも踏破たふはしようとして

ある氣意いきの前には、あるもなきに等しい。

夜啼石よなきいしに因縁いんねんある子育觀音こいくくわんおん、久延寺もこゝにある。

賊ぞくに害がいせられた小夜姫さよひめは——あへなく、こゝで恨みを残し、永く眸まゆをとぢたが胎内たいないに居た兒は、不思議に

石の上いしの上にうみおとされた。兒は乳を求めて夜毎よごとないてゐた。附近ふきんの村人は之を知り我子の様にそだてた。

いみじき素性すじやうであつたのであらう。智慧ちゐさがしく十三のとき出家して佛道ぶつだうに余念よねんぶなかつた。然るに或る

時母ときははの横死わうしを人からき、子供心にいたく悲しんだ。彼はとう／＼身を換へ遂つひに復仇ふくちゆうの素志そしを遂げた。

といふ因縁いんねんがある。名残太郎邦時の鐘塚かねづかもこゝの山中にあるさうだ。

こゝをだん／＼と下れば日阪ひさか、それから掛川かけがはにさしかゝると遠江平野とほえひらが展開し、さすがは茶所茶畑ちやそちやばたが多

い。この町のうしろに無間山むげんざん觀音寺くわんおんじがある。膝栗毛ひざぐりけでも「この寺にむげんの鐘もつきなくし今は晦日みそかにう

そやつくらん」と示してゐるが、あの「梅ヶ枝の手水鉢てうづはち」の趣好しゆかうを織り出した「無間の鐘」はこの寺にあつ

たのださうだ。さきのことはどうでもいと眼前がんぜんの利りのみに眩くらんでゐる現代に、この鐘があつたらさだめて

たいした問題もんだいをおこすだらうが、幸さいが不幸ふこうがなくなつてゐる。龍宮りゆうぐうあたりをさがしたらひよつとしたらある

かもしれぬ。叩たたけば無量の功德財寶くどくさいほうを得、大ばん小ばんがぞく／＼と出るといふからえらい魔法まほうの鐘もあつ

たものだ。しかし未來みらいは無間地獄むげんぢごくに必定ひつぢやうおちるといふ因縁いんねんづくだから、はてな……、ふぐはくひたし死ぬの

はいやだし……が、然し怨おんの深い向ふ見ずの連中れんぢゆうのことは知らぬ。

袋井はみるべきものもなく、關祭と富士が初めてみえるとかで名のある見付もさして香ばしからず、掛川より軍中の人となり、中泉でむりに一同を引きづつて下車、自動車で池田村は熊野の墓に詣で、熊野一番を供し、次で天龍の景に追憶をあらたにし、江戸へ六十里京都へ六十里の中の町で松之木を手植、それからの分は何もおぼえず、目をさまされたは濱松驛前のT館の前「ようッ」と出て来たは、驚いた元氣に返つたじさんの先着、「ようう」「ようう」でよろこびのうちに一同階上へとは消える。

濱松より新居へ

この春旅の記が興味があるものかないものが、そんな人の心は知らないが、記者として見ると同じ旅の記事をかゝねばならぬなら、もう少し紙面が欲しい。この位では何もかけぬ。かけといふ方がむりだ。「天龍川」だつて「熊野」だつて打角、頭で構想をつくりながらかくことが出来ない。自分の興味がわいてさらさらとかけるところはみんな削除せねばならぬ。——この旅の記がおもしろくなければ、それは筆者の勢でなくて紙面狭少のためだ——處が、又編輯子としてながめると、どうも記事が長すぎる。これがせいといつげいだ。のり出した船だ。何んとか鼻をつけねばならぬが、早くとんで都入してくれ、ばい。こゝにデレンマに陥る。まアこの點は察して下さい。——さて濱松は茶と樂器の名所。試に驛の茶をかつてのみ給へ。價の割によくのめますで——樂器はグアイオリン、マンドリンの和製は多くこゝで出来る。だから昔の俚諺に

は「遠州濱松ア廣いやうで狭い、横に車が二丁たゝぬ」と云はれてゐるが、今では工業の都市として人口五万、そんなにせゝかしい處ではない。古をたづねれば、徳川の江戸移封まではこゝがその中心地だつた。家康が三千騎をもつて信玄四百の兵にあたり大敗地にまみれ命からがら逃げたといふ三方ヶ原はこゝにある。今は茶園となつてゐるが、武田の侵畧のうまさ、三河武士の意氣を充分に發揮した著名のところである。家康が譽山和尚から、汝は豪賊なりと大喝され切腹をすゝめられたのもこのときだ。それが徳川三百年をつくる基礎ともなつた。命からがら逃げ乍ら湯濱三杯を立てつゞけにくひ、鼯聲雷の如く寝ておどろかしたといふのも其時だ。尚こゝでわすれるとの出来ぬのは國學の泰斗賀茂眞淵である。彼はその頃の岡部村、今の浅田村に生れた。旅屋の養子となつたが、のち笈を負うて上洛、荷田春滿の弟子となり、學を得て江戸に出て、古學を主張した。母を想ふの念あつく、母の死期に逢はなかつたのを悔ひ、「野邊の露消えせぬほどにはざりしわが身の罪ぞおき所なき」「泣くくも別れし時をわかれにて、わかるゝ親のなきぞ悲しき」と、涙ながらに詠じた彼の孝心は人のよく知る所である。

舞坂から辨天島——新居、この邊は南に太平洋、北に濱名湖をひかへ、「立ちわたる濱名の橋の朝露、見て過ぎがたし春のけしきは」と時朝はよんだが、春夏秋冬いつも景色はすてられぬ。

辨天島は、湖の東岸にある。海水浴場として知られてゐる。湖に海水浴場はおかしいが實はこの濱名湖は淡海でなく、ずつと古はいはゆる「遠つ淡海」で鹽水ではなかつたが、後土門天皇の御代に大地震があつ

て海と續いて終つた。「今切」といふ所がその切れ口である。

この湖のかなたにつゞく禿山の中腹に樹木鬱蒼たる溪谷がある。これが天狗で有名な奥山の半僧坊方廣寺で、後醍醐帝の皇子満良親王聖鑑國師の開創せられたもので、天狗を得度させられた縁起である。

湖の西岸が新居だ。

徳川時代には關所があつた。

昔はこゝの間の渡しなにかうが難航で「舞坂一里、船にのるも馬鹿、乗らぬも馬鹿」といふ俗諺ぞくえんさへあつて「荒井」ともかゝれてゐたが、のち切口くひに杭をうち蛇籠じやかごをうづめ波が靜かになつたので、

「鳶とびも舞坂、天氣もしづか、名のみあらひの船渡し」

と洒落しゃれが云へる様になつた。次の鷺津わしづから濱名湖の巡航じゆんかうせん船が出て清遊には適するが、言ひ出さうものなら「おい行かう」となつて讀者に迷惑めいわく、ウナギ井ひとつで欺かして次の宿へと足を急がせる。

新居から吉田へ

濱名の風光ふうくわうにいゝ加減チャームされて仕舞つたところで、いかにも名残なごりの盡きぬ様にして新居の宿を立つ。

「……なんでも新居あらみといふところは今切の關所とかいつて東海道とうかいどうでは名の賣れた關所せきしよの一つであつたらし

い……」とA君が説明を加へて呉れる。鐵道てつどうより外れて海邊傳うみべつたひに走つてゐる本道を白須賀に至り汐見坂にさしかゝる。

「エイ……それ〱汐見坂しほみざかの由來を聞けば、西の方から旅たびする人はこゝで初めて海を見る……東海を一望ぼうに收をさむる名所であります……」〇君が元氣げんき恢復くわいふくはこの時ぞとばかりに大聲を張りあげる。同行申し合せたやうに振り返つて洋々たる遠江灘を眺め、汐見觀音しほみくわんのんに一禮して國境を越える。

三河名物空ツ風めいぶつからかぜ——行基ぎやうき作手觀音せんじゆくわんのんで名のある窟觀音を右に拜はいして四顧眺望しごつぱうぼうの佳い高所をスケートして二川宿に入る。此邊一帶は高師ヶ原で見渡す限りが小松原、どうにもかうにも風が強くて松まつさへロクに育たないといふところを眼つけものにして天然を應用したのが「三河松」の縁起えんぎで、お江戸で珍重ちんちゆうされる「盆裁松」の殆んどが此所から生れるとは大したものだ。それにおまけに鑛物くわうぶつまでがおもしろい形して飛び出して來るので住民せみんは喜ぶまい事か、口を揃へて高師小僧さまア!

一氣に吉田よしだへ着く。明治になつて今の豊橋、その前には今橋ともいつたさうだ。吉田古白きつぱくが築き、池田輝政きくわくちやうの擴張くわくちやうした吉田城趾はお定りのやうに兵營へいえいになつてゐる。宿場としての吉田は誰も知る俗諺ぞくえんで聞えてゐるが、今の豊橋には何の風情ふぜいも無い。近くの豊川とよかはや長篠ながしのの古城趾へ遊ぶことゝなつた。

電車でんしゃで十四分、乗つたかと思ふと降ろされて豊川稻荷とよかわいなりに參詣する。

「これは大したお稻荷さんだと思つたら、こりや禪寺ぜんてら……」意外の感に打たれて縁起を聞くと、曹洞宗そうとうしゆうに

屬する禪刹で御本尊は陀根尼天、その昔牛久保の西島稻荷が御盛んであつたのが、其處の平八狐から婿を迎へてからすつかり人氣が移動して豊川様が彌増しに御繁昌になつたとは嘘のやうな事實で、同行中のもの識りて通つてゐるA君も之には參つたものと見えて流石に愕然たるやうだつた。

再び車中の人となつて長篠古城趾へ下車して史蹟を探る。長篠城は奥平信昌の造營するところで、信玄没後徳川の麾下に參じたのを憤り、天正三年五月武田勝頼之を包圍して落城せしめんとしたが、織田徳川の援兵來りて大激戦となり、遂に武田勢敗れて、後に勝頼天目山の悲劇となつたほどの思ひ出深い土地である。そのとき圍みの中より使した鳥居強右門の話などは世間に流布されてゐるところで著名である。武田勢の首級を納めた千人塚やその他の遺跡に思はずも涙ぐんで往時を追想する事しきり、誰となく清水を汲んでさげ、靈華を供へて合掌に時を費した。

近くの鷹の巢山は大久保彦左衛門が十六歳初陣の舞臺として知られ、風來寺山は畏くも推古帝の勅願所として名刹の名を擅にしてゐる。その他、近所近邊には、織田徳川武田の三勢が渦巻いたところだけあつて古蹟が少なくないが、B君から下山の勸告が出ない前にと思つて吉田へ引返す。

吉田より岡崎へ

人間は一朝不幸に出會すと、つまらぬことを信用するやうになる。沼津の宿でフトした風邪が遂に東京か

ら態々Dさんの出馬を請はねばならぬことになつた。蒲團の中でツクム考へて見ると、川崎大師さんを嘲弄つたお罰かとも思ひ、又三人旅といふものがいかぬ、寫眞を寫すにも三人はとらぬ。その内の一人に必度凶事が来る。家の中でも三人家内はいかぬ。そこで私の内も去年の夏から猫の子を貰つて四人の家内になつて居る。それから見ても最初三人で出立したのが悪かつたのだなどと頭の中で裁きを付ける。すると濱松迄先着の手筈も何だか一人旅は心細くなつて来る、というてここで居残つては倍々不安が加はる。さうじや寝てゐるからつまらぬ事を考へもする。行くべしと宿の者に見送られて車中の人となり、濱松に着いてお茶一杯すつた處へ三人が到着した。元氣な三つの貌を見ると、ケロリと病も忘れて今朝わかれた人達とは思へない懐かしさ、晚餐は打揃つて甘く食べられた。

今日からは四人であるから御幣を昇ぐこともない。豊橋で途中下車、見物をすませると私が輪番に當つた。徒歩はモウ懲り／＼とプラットホームへ這入つて來た汽車を見付けると、早速飛乗る。すぐ發車する。豊橋の市街がおさらばを告げる。するとAさんが變だぞと連發する。Bさんが車窓から首を突出す。Dさんが地圖を擴げる。なる程變な筈だ。長篠行の豊川鐵道に乗つて居るのだつた。あきらめる外はない。豊川の稻荷さんもお參りして行くさとAさんが打衝する。流々賛成する形は陣笠議員よろしくの体である。

豊川稻荷は陀吉尼天を祀り佛式での日本中の稻荷さんの總本家といへる。寶曆の頃、つい近くの牛久保町で隆盛を極めて居た西島稻荷が此所へ婿入りしてから俄かに人氣が立つたと乗合せた隣席の人の話で案内料

は先づ儲けた。有難いと豊川で下りて参拜をすませ、黄色の財布を四人分記念に買つて豊橋へ逆戻り。
吉田より御油へ二里半と四丁、汽車は豊川の鐵橋を越すと左へ海岸に出るが御油は右へ行かねばならぬ。
御油驛から二十町も北に當ると教へられて否でも應でも徒歩と決定。

豊川は矢雉川、太平川と共に三河國の三大河の一つだと案内記を見てBさんがいふから「何だ私の國には日本三大河の末ッ兒四國三郎(吉野川)があつて、それで尻を洗つたものだ」と意張つてやると、Dさんがお江戸の水で産湯を使ったといふなら聞えて居るが、尻を洗つたとは可笑しいと腹を抱へる。しかし實際だから致方がない。お上の金で吉野川大改修工事が完成した。ツイ數年前迄は秋の出水期になると上流土佐國のお谷水——から土地で云ふ——が來てそれが氾濫すると中央山脈と北方山脈の間がすべて吉野川になる。そこで床上が床下の侵水は免かれない、尻を洗ふ所以で御座いますと辨明相立てた所が御油の町であつた。赤坂く十六丁緩手道、狐が出たさうだが、當分は尾の無い狐位なもの。でも巢鴨刑務所のお引越先の府中では今でも狐に化される者があると、東京を立つ前に耳にしたから、此あたりでも居ないにも限るまいと謹嚴なDさん申されることが矢張お堅い。

赤坂から藤川へ二里九丁、藤川の手前山中の里へかゝると大分疲れが出た。すれ違ふ人を促へて「この土地に名物はありませんか」と尋ねると「はア、麻の編袋と早繩がありますよ」ヤレく食ふことを聞くと下に當るからと遠廻しに尋ねたであらうに、これは手厳しい答へ、尋ねた人はこゝで云ふまい。

藤川から一里半と七丁で岡崎の町、今は市になつて居る。岡崎驛は一里も南で電車で繋いで居る。徳川家康誕生地で三河武士根據地であり、名物は八丁味噌、これも一寸つまんで食へないのでお生憎さま。城趾は公園になり、東照宮を奉祀し、家康産湯の井も残存する。眺望絶佳疲勞立所に癒ゆ。市外を流れる矢矧川は矢作村落と岡崎との境を成して千五百尺の鐵橋の上を汽車が走る。其の矢作村落では腕白小僧の日吉丸が蜂須賀小六をとつつかまへて氣焔をあげた。矢作の村落は矢作の長者淨瑠璃姫の物語と共に、後年の淨瑠璃の發祥地である。岡崎驛を出た處の松林中には犬頭神社があつて、犬頭殺大蛇、犬頭得蚕絲の二傳説があるといふが目も届かず、筆も届かぬ。

岡崎から熱田へ

「折角のことやでなも、名古屋からなも、自動車を呼んであげやうに」と親切な人は云つて呉れる。岡崎から宮まで街道筋をトバすなんかは彌次喜多の昔にはたしかなかつたこと、この岡崎の知人と云ふのは名古屋に店を持つて可なりの商人で岡崎に本家のある人、そこで長距離電話ですぐに自動車が飛んで來て呉れた。

「たしかこの前私がお邪魔をした時には、こゝの師團がなくなるので騒いでみましたつけね」

「はあ、さうキヤーなも」

そんな會話をしながら、四人がドヤム／＼乗り込む、出發の時に圓タクで品川まで飛ばした時と違ひ、これはまた大分高級車と見えて、お尻の下が工合がよいわい。しかし街道とはい、狀、大して廣くもないのでこの邊から名古屋へくり込む荷馬車のために道をふさがれて速力が出ない。

「しかしこの街道筋の松並木は馬鹿に趣きのあるものだね」と僕がいふと、

「いや、これを植ゑた先生はたしかにユライよ、第一旅行者の心を慰め、街道の目標となり、日影を作り殖林となり、防備となり、防風林となり、農作物に益するところ多く、利益はあげて數ふ可からずさ」とB君が參謀將校見たいな口をきく。

知立に入る手前に八橋といふ村がある。昔八橋のか、つてゐたところだと云ふ。例のかきつばたの八橋で橋板をたがひ違ひに合せた橋だ。伊勢物語に「三河國八橋と云ふ所にいたりぬ。そこをやつはしといひけるは水行く河のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける、其澤にかきつばたいと面白く咲たり云々」とある。

そこで八橋は京都の聖護院が本家ではなく、三河の八橋が家元であると云ふことに院議を決定して、知立に入る。

知立は昔池鯉鮒と書いてあるから大方この邊りに池があつて鯉や鮒がゐたらうと想像する。

果せるかな海道圖會には「御手洗池は驛の東の入口にあり、魚鱗多く殺生を禁ぜらる、旱魃には郷民

雨を此に祈り、神寶蛙の面を出して池水に浸せば忽現應ありとぞ」なんて書いてあるから。矢張り池鯉鮒はそんなところから出た名前であらう。

「三河武士の産地なんだが、このごろはどうだらう」と正八位の在郷軍人であるD記者が質問を發する。

「槍一筋は大久保彦左の時代で、末代の今日ちやどうか」と僕がいふ。

「誰もゐない大平原を走つてゐても油斷がならぬぞ、桶狭間は近づけり」

全く見るものもない街道筋を走るのは苦痛だ、

つひ口が利きたくなる。

桶狭間と云は、落合雙石の、慘雪漢々寒峽路 俱門寒鴨叫老樹 行人劍戟讀殘碑 多少悲慨滿詩賦 なんて詩が旅行記に書いてあつたよ。

桶狭間の戦争は戰國史劇の重要な一幕、あれから信長記が出て大岡記が出て徳川の御治世にもなる。

有松、鳴海、いづれもしぼりの名所、さう云へば軒並に絞を干す家が見える。うっかりすると絞られるおそれがあるのでとん／＼飛ばして大名古屋市に入る、その入口が宮、今の熱田である。煙突が林立してゐる港をひかへて海陸の要地だが、昔でも四日市への船出でかなり繁昌した。

伊勢大廟と共に最高の神宮であることは誰でも承知のこと、神劍を祀りて御神體としてゐる。

笛のねに神の心やたよるらむ森の木風も吹きまさらなり

赤染衛門の歌がある。

さーいま一時のことだ、中村公園まで飛ばして、一世の英雄秀吉が、人並におぎアと生れた中村郷をたづねる、たいしたものではないが、中村を記念するための公園である。丁度さくらのやうに花やかにそして果敢く散つた豊秀の盛衰を偲んで妙に涙ぐましくなつた、「看はなやまし」そんな氣がした。

——名古屋より桑名まで——

「名古屋の人は名古屋のことを自慢して中京と云ふ」と僕が云ふとC君が「支那人は自分の國を誇り顔に中國と云ふ」と口を出す。とB君が抜からず「僕の友人は自分の病氣を尊重して中氣と云ふ」でみんな噴き出してしまふ。

しかし事實名古屋は中京で、こゝから東は東京の新井、これから西は大阪の新聞とちやんと分界されてゐる。そればかりではない。文化的に云つて見てもこゝが關東文化と關西文化の接合點になつてゐる。東でもなく西でもなく接合された中京文化が生れてゐる。藝術的方面でもさうだ。名古屋の實業家は何と云つても福澤桃介、伊藤松坂屋、前者は大同電力を根城として帝劇にまで手を出さうと云ふ企業界の怪物、松坂屋は東京まで出張つて來た呉服屋の大物。

「天正慶長の頃歌舞伎道樂名古屋山三郎ありて京に出でて舞臺をつとめたのは遠い昔のことだが、今でも舞

踊では西川流の淵源地として覇をなしてゐる。

と受うりの物知り顔を見ると、すぐに彌次が飛ぶ。

「ようよう、一夜づくりの速成京通」さて名古屋に來て「尾張名古屋は城でもつ」と云はれた名古屋城を見ないではをさまらぬ。だが此の城は御宮でもあり、第三師團も鎮臺してゐるので無暗と乗込むわけには參らぬ、縣廳のお役人の力でやつとお許が出る。城門で何某とおしらべを受けて城内大手門より參入。さてもこの城はと案内の役人の云ふところによれば、

「この城は家康が前田加藤以下二十六の大小名に命じて築かせたもので、その子義直を城主としてから御三家の隨一となつたが、今の彫像は虎狩熊狩と植物學者で有名な義親侯……」

天守閣に上ると濃尾平原は手にとる如く、机上に置かれたる木板の見取圖には征手防備の筋口を示したものが今でもある。薄暗い櫓の角から怪しげな古武者でも出て來て、

「その時味方の軍勢は破竹の勢をもつてせめ立つればたちまちに敵は亂軍……」
なんて物語を始めれば映畫じみるがあいにくそんなものは出て來ない。明治天皇、照憲皇太后陛下は御西下の砌りよく御滞在あらせられたが、その御座所なども拜觀出來たが、實に御手せまなものである。城内の地域は今は大して廣くもない、石垣に加藤肥後守清正などと刻したものなどが珍しく見える。

木遣節いさましく大岩に突立つて小さい配を振つた勇ましい清正の棟梁ぶりが今更ながら幻影に浮ぶ。

城を辭すれば雲表高く高さ八尺五寸、胴廻七尺三寸、一千九百四十枚の金鱗を輝かしたる双鯨が望まれる。さてこれから本道に立ち返り、宮から桑名へ七里の海上船渡りと云ふ段になるのだが、彌次喜多でさへ行つた同じ道を、まさか昭和の旅にも想つたがまよ熱田の濱へ出で、見よ、また思案もなるものと四人の同勢熱田の港へと急ぐ。右往左往に走るハシケ、曳船黒船、帆船、港は動いてゐる。

「すばらしい蒸氣船ぢやねえか」Bさんが云ふ。さんばしに立つて感心する同行の前を船長らしい男がマドラスパイプをくわへて通る。

「あゝもし髪なことを申しますが」と素性をあかして海上七里の件を申請に及ぶと、

「ぢや丁度い、午後一時の解纜で大阪に向ふところだ、桑名で積荷があるから乗つけてあげやせう、しかし荷物船だからそのつもりで」事は案外うまく行つて、船長の厚意でうま／＼と海上舟渡りが成功した。

船長室におさまつた四人は、船長の紹介で高級船員の事務長、機関長、無電技師に挨拶をする。記者根性の抜けないDさんはすぐ、無電技師をつかまへて聞いてゐる。

「近海航海はそんなでもないでせうが、荷物船の長航海は随分荒涼たるものださうですね」

「え、そりや同情に價しますよ、さうした時、たゞ吾々は耳だけが働くのです、眼に見ゆるものは青海原と黒い煤煙の外ないので、口のはたらきがなくなりラヂオを通して耳に感電のすべてが注がれます。話はなか／＼はづんだ。この海上は蜀山人も「荒井の船には似もつかず唯席上に坐せるが如し……」

桑名の城見ゆと云ふに嬉しく、幕の間より窺ひ見るに四方の海原霞み渡りて景色云はん方なし(改元紀行)と云つてるやうにおだやかな海上を約一時半、やがて桑名につく、深く船長の注意を謝して上陸。

桑名には城もある、焼蛤もある。土産にしくれ者を買つてこゝから乗車、勢州の要路四日市をさしてゆく。

|| 桑名より山田へ ||

まだ元氣ざかりのころだつた。突差に話が煮へて夕暮から伊勢參詣徒歩旅行をおもひたつた同僚四人は、江州の多賀神社に参拜した足を、田舎道を辿つて禪宗の巨刹永源寺に運ばせた。さうして、そこで露いぬれ乍ら野宿をして翌朝星空を仰いで、八風峠の嶮を越え、やつとのことで菰野に辿りついたのはとつぷりと日が暮れてからだつた。糧食も川意せず地圖も持たないで無謀にもその舉を企てたので、路を迷ひ込み、その村に辿りついたときにはもう息がほとんどたえてゐた。何でも私は、運よく通りかけた炭焼さんの脊架にのせられて來たのだつたさうだ。

「君あのみ、眠つて終つてゐたら、死んでゐたのだよ」

隣者がそんなことを云つてゐた。

聞けば、腹のすいたとき眠つたらそれきりださうだ。

「君の頭をぐん／＼となぐるのは痛快だつたよ」と元氣になつた友がいふ、私はだまつて笑つてゐた。

「お禮をいへよ」

なぐられてお禮を云はねばならぬのも變なものだが仕方がない。

その菰野——是非立寄つてみたい。あの宿の主人にもずるぶんお世話になつたからもう一度あつて見たい。「湯々山温泉」につかつて來ようぢやないか、といふことをだしにして四日市で下車する。そこから今は汽車がある。俗化してゐないのはうれしかつたが、私達がとまつた宿の主人も婆さんも、みんななくなつてゐた。小さい娘がゐた——それが、いま當主となつてゐる。そんな事件はもとより御存知ある筈がない。然し室はもとのまゝのやうだつた。もう遠い過去のこと、全ては夢のやうだが、そこに過ぎゆく人生の相がさびしくもゆらいで思はず沈想する。

「こゝから龜山へあるかう。俺は道を知つてゐる」

といったが、否決された。さうだこの道では俺はあのととき氷水五十二杯を一身田までにのんだのだつた——。今思へば思ふだけで腹がいたくなる。

温泉気分はしかしみんなに氣にいつたらしい。こんな處が東京附近にあつたらな——ふりがへり乍らAさんが愛着戀々。しかし急ぐ旅でもないが、いそがぬ旅でもない。再び引きかへして一身田高田の馬修寺に詣でる。

松の並木の奥に、蕭々として聳える大伽藍は、自ら敬虔な念をそゝられる。本尊は慈覺大師の作、天拜一

光三尊佛である。

「伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ」

と俗語で言ひふらされてゐる津市はもとは安濃津で日本三津の一であつた。今は四日市港に奪はれて商港としての價値は乏しいが、この邊の海岸漕ヶ浦の風光は、忘れ難い。阿漕焼、津緞子がこゝの特産。しかし夏になると蚊がかなり多く田舎の人々は家の灯をけし外で焚火をして夜遅くまで雑談にふける。日本で一番短い驛名をもこの「ッ」だ。

阿漕驛に出る途中に阿漕塚がある。

月の夜の何を阿古木に啼く千鳥

芭蕉の句碑がたつてゐる。謡曲や院本で名高い。

昔このあたりは、伊勢大廟の神饌に供する御贄の漁場で殺生が禁斷されてゐた。ところが平次といふ漁夫、その老いた母の難病にはこゝに住む矢幹魚といふのが無二の良薬であることをきき、母者人のいとほしさの余り或る夜網をうつてアガラを捕獲した。それが知られてとう／＼簀巻の罪に處せられた。簀巻は簀で体を巻いて海水に投ずるのである。それからといふものは毎年その日の夕は海上に人の影のないのに網の音がする。

といふいづらか詩的な神秘的な傳説の跡である。川崎でたつたCさん、ぶる／＼ふるへてゐる。Dさんの

顔色もさつと變る。

「月夜だつたらそんな變になるかも知れんな」とAさんまで心細さう。

序に歩をのばして結城神社に詣でる。吉野朝の忠臣結城宗廣を祀る。北畠顯信と共に義良親王を奉りて伊勢の大港から出航したが遠州灘で颶風にあひ海上で漂ふこと七日、人々は別れくになり彼はこゝにいたがのち病死した地。

鳥羽までの豫定を遂行するため阿漕から乗車、みんなつかれて思ひくゞの夢路を辿り、おりの處は、神風神々しい宇治山田――

|| 宇治から鳥羽へ ||

宇治から二見へ電車で直行し、潮湯に浸つて大いに遊覽気分を發揮してやらうと考へてゐたのも、無惑やBさんの説の御熊山登りに破られて、跂曳きくお伴をして二見町へ入つたときには身體筋の如し、だが人間は意地張りなもので瘦我慢を奮發し四人が町を練つて二見浦へ出た、何事にも後へはつかぬじさんは夫婦岩はどれだくと騒ぐ、一向見當らぬらしい。諺に曰く燈臺元暗しとはこの事、岩を見越して遙かの沖を眺めて居るのだ。

「Cさんこれですよ」

「なアんだこれが、ちつぽけなものぢやないか」

お説の通りツイ鼻先の陸續きのものである、Cさんならずとも凡百の人間が目の前のものを尋ねて後で失敗するのである。これでは岩の間から旭が昇るなど云ふのは聞いてあきれれる。

「Cさん夫婦岩の眞景をお目にかげやう」

私はかう云つて程遠からぬ小舟を一艇さし招いて四人が乗込む、沖へ出るも一町二町、あれ御覽なさい

「いかさま、これは良い」

とAさんとBさん「むゝ」とじさんは讚嘆久しくする。夫婦岩は波の上から波の上に浮んだものを見る處に趣がある、繪に然り、寫眞に然り、一つも陸續きものは賣つて居ないと私の鼻が伸びること猿田彦の弟位二人口を揃へて、

「なる程なア」

私はこゝぞと調子に乗つて俗人は二見の日出を云ふけれど、名家は何れも月を詠んで居る。曰く、

ますか、み二見の浦にみががれて和風きよき夏の夜の月 定家

夏の夜は玉ゆらもなし玉くしげ二見の沖にあくる月かげ 家隆

等々。芭蕉は蛤の二見に秋別れたが私等が「蛤を二見で食はず行く春ぞ」汽車で鳥羽へ走つた。

鳥羽は東海道漕上の要津で、紀州熊野浦を發した船は、この港に入り、日和を見定めて更に波濤七十里豆

州下田港へ渡る。この陰晴險易を卜するに眺望絶佳なる日和山がある。山の名はこれから生れたことは申す迄もない、今は氣象臺が責任を以て山上更に竿頭高く信號旗を掲げて居る。

此日和山も樋の山遊園が近年に設けられてから人足が減つた。遊覧客は熊々遊覧料を拂つて樋の山に上るのが多い。私達も御多分に洩れず海拔三百尺の中腹迄登ると灣内無數の島嶼は指呼の間に迫つて、躍るが如く、走るが如く、伏すが如く、飛ぶが如く、笑ふが如く、泣くが如く——チト形容が變だ——遙かに芙蓉峰を望み、佳絶快絶を叫ばざるを得ない。灣の北側にある答志島、南側にある菅島は基石の産地で答志島に白、菅島に黒ばかり、それで西行法師が、

菅島やたふしの基石わけかへて黒白まぜよ浦の濱かぜ

と詠んだ、鳥羽案内はいふ「鳥羽は伊勢灣の門戸を成し、軍防上海軍の要地となる。昔豊公征韓役に水軍として偉功を立てたる九鬼氏は此の地の城主たり、明治維新の頃藩士近藤眞琴、海軍振興を圖り、海人養成を企つ實に商船學校の創始なり云々」、日がくれか、つたので下山して待月樓の客となつた。

山田から二見へ

日本一のお伊勢さまだ！

流れも清い御裳濯川の上、瑞雲たなびく神路山の麓、今日はいかな彌次喜多氣どりの同行も心を清め身を

淨めて静々と神域に入る。例になく無頓着で聞えてゐる「君までがズボンのしわを伸してキチンと折目を入れてゐるところにお目通りを願ひ度い。

内宮は宇治、外宮は山田、先づ參拜の順序として外宮の表參道から直進する。夜の外宮老杉森々として闇深く、一穗の清燈夢の如く淡く道を照らす……なんて誰かの參宮日記で覺えてゐるが、なる程に古風床しい春日燈籠、昔ながらの紙障子と茶種油、それこそ卯の毛の先ほどもバタ臭くないところがお氣に召さないで何んとせう。少々丸ビル中毒状態に陥つてゐる脳髓へシーンと一脈の電氣が通つて来る。

外宮の祭神は豊受大御神初め、丹波の國に鎮座しましたのを雄略天皇の御時、大御神の神誨に依つて此地に遷座せられた、謂ゆる皇大御神の御饌都神で更に解り易く云へば大廟の大膳寮である。境内には御饌殿、御酒殿等があり、多賀宮は豊受神の荒御魂をお祀りしてある宮である。

歸りを裏參道にとつて内宮に向ふ。神域と宇治の町とを界して永遠に流れつきぬ五十鈴川の氷は寶石がとけて流れたやうに澄みきつて清らかである。宇治橋を渡つて一の鳥居を過ぎると手洗場、五十鈴の流れを掬うて手を洗ひ口を嗽ぐ、二の鳥居にかゝる頃から外宮のそれにも勝つて年經た大木が鬱蒼として茂つてゐる。

大自然の莊嚴美！

高い石の階段を登つて外玉垣御門の前に一列に揃つた同行は一生涯に一度の思出に清淨の宮居を拜して心ゆ

くまで神徳を憶ふ。

何事のおはしますかは知らねども

添けなきに涙こぼるゝ

上古、崇神天皇は神武天皇とともに御肇國天王と稱せられ給へるほどの聖子にましました。その御代に大和朝廷の勢威が四方に展びて、古事記や日本書紀に載せられるやうな多事な時代が現出したのであるが、天皇には敬神の御志厚くそれまで宮中に奉安し給うた三種の神器を、殿を同じくし床を共にするは神威を瀆す所以であると思召して、假りの神鏡と神劍とを殿内にとりぬき、皇孫付屬の神鏡と神劍は特に皇女豊鍬入姫命に託けて大和の笠縫邑に奉祭せしめられた。ついで人皇第十一代、仁天皇には御父天皇の御心を繼いで敬神尊崇「先帝の朝神祇を崇敬す是に由りて天下よく治まり民衆皆富む朕が世また祭祀を忽怠すべけんや」とまで詔らせ給へるほどで、豊鍬入姫命が老齡に及ばれて倭姫命が之に代り給ふと新たに大神の靈を奉じて大和より近江に入り美濃を廻つて伊勢の度會に至り其處で「此地に奉祀すべし」との神誨を蒙られて齋宮を五十鈴川上に造り、神鏡と神劍とを永久に鎮め祀つて仕へ給うたのが内宮の縁山である。仰いで二千年ゆるぎ無い鎮座を思ひ彌榮えゆく國家の前途に心からなる誠意をさげ、げて神前を退る。因に神劍は日本武尊の東征に當つて之を授け給ひ尊は之を尾張の熱田に奉祭された。

「これで安心！生れて三十年まだお伊勢参りがしてなかつた爲めどれ程か肩身がセマかつた、これから何

處へ行かうと誰れに聞かれやうと、堂々と伊勢参宮のお話が出来るわけだ、何だか相濟まないことが相濟んだ氣持がするヨ」とC君がしきりに喜ぶ、ズボンに折目を入れた殊勝人だけあつて、威銘の度が一しほ深刻であつたに違ひ無い。

附近の間山にある古市は一寸名の知れてゐるところ、名物の伊勢音頭は僅かに備前屋に残つてゐる……と説明の勞を取り出したのがこれでお伊勢へ三度といふ通のA君、

「さア朝熊山へ登らう」

朝熊山へは内宮から頂上まで一里と二十九町。二十九町がちいと餘計たとC君が滯い顔になる。なアに心配に及ばぬ蓋まで一里七町は俥で飛べえ！といふので一氣に山登り、山の途中に名高い豆腐屋旅館があり其處で二見道の通じてゐる。又も上ること十三四町で勢州一の景勝地と云はれる山頂の金剛證寺についた。伊勢淵を俯瞰してとても素的な眺めである。伊勢に参宮して此處に到らないものは無いと云はれてゐる。それで歸りを二見にとつた。

|| 入京會議を開く ||

新任大臣の向ふを張つた譯ではないが大廟参拜も無事に了へ鳥羽待月樓に止宿した同行四人、明日はいよいよ、五十三次も「上り」になるのだから、最後の總攻撃にうつることにしよう、といろ／＼コースを協

議したが、結局衆議一決、四人が四人自由のコースをとつて入京しよう、一時袂を分つて發足し、落ち合ふところは高山彦九郎ぢやないが京の三條の橋の上にしようと言ふことになる。

「お、もう寝るよ」と云ふ先生も實は奇抜なダイヤグラムを案じて、こゝしばらくは奉天會戰の前夜ほどの企劃戰を演じてゐた……。

熊野和歌の浦巡り

流石の彌次喜多も、お伊勢参りが事無く終へてからといふものは一時にと疲れがさして來たものと見えてしやれの一口もよう云はないで無愛想に京上りをやつて仕舞つてゐる。あまり呆氣ないザアエンド振りである。其處になると態々アメリカ三界から太平洋を股にかけてやつて來た特行家だけあつて、一名お札博士のスタール先生はこくめいに五十三次を辿つてゐる。何んせ世界一が好きな性分だからやる事が振つてゐる。ビール樽見たいな圖う體に絞付袴といふいでたち、それを御町嚙に俥につけて「エイヤア」といふ勇ましいかけ聲もろとも東海道を十八日間かゝつて突つ走つたといふんだから並大抵のメリケン子ぢやないんだ。それに歸國してからのいゝ草がいゝ、「ちよいと私は向ふ岸を散步して参りましたが……」だつてサ。どうです諸君聴取れませんか？！

だから今になつて草臥れて候のでは第一ラヂオのある世の中に聞えが悪い、といふので意地を張つて掉尾

の一人振、實をいふと胃袋も足の裏ももう御免蒙りたいんだが負けじ魂だけが強がつてゐる。到頭船に載せられて熊野巡りの玄關勝浦にあげられて仕舞つた。

紀州勝海は熊野三山詣での出發點である。同行の無い氣安さはまた格別で元氣も出て來たやうだ。新宮鐵道に乗つて次の驛郡智口で降りる。北へ一里半熊野夫須美神社の壯麗な宮を拜して北隣の青岸渡寺に詣でるこの寺は裸形上人といつて熊野灘で難船した天竺の僧が開基と傳へられる由緒がある寺で西國巡禮三十三番の第一番札所として著名である。

なほも北へ六七町、那智山の中腹に懸つて那智瀧がある。沖から遙かに白布を晒したやうに見えるのは此の瀧で、高さ八十四丈幅十八間日本一の大瀑布として名高いが水量は至つて貧弱で文覺上人の荒行も井戸水をかぶつたほどにも無かつたらうと口の悪いのがいふ位だから以つて知る可しだ。ついで濱宮には濱宮神社があつて、舊濱宮の別當であつた同處で古刹補陀落山寺は本堂の楹間に「日本一補陀落山寺」と銘打つるだけあつて本尊觀世音は天下無双の靈像とあがめられてゐる。

那智山から熊野本宮へ六里半、例の大雲所小雲所を越えてゆくのであるが今は新宮町から熊野川の水路九里をプロペラ船で僅々四時間で溯航するといふんだから文明の利器もあり難いわけだ。新宮は熊野速玉神社、本宮は熊野坐神社、思へば古い歴史が喚び起されて一しほ敬虔な氣持に酔はされる。殊に本宮は古來長加邊りの御尊崇厚くおはして、後日河法皇は三十四回後鳥羽上皇は二十余回に及んで御參詣あらせられたと

いふのだから靈験のほどが僂ばれてひとりでに頭がさがる。本宮から西の方へ二十五町、大日山の西麓の溪間には湯ノ峰といふ温泉があつて熊野参詣者の慰女地になつてゐる。小栗判官の妻照手姫が、毒酒に申つた良人兼氏を車にのせて遙々この山中に曳き来り、こゝで病を平癒せしめたといふので「小栗湯」の別名がある。

歸りをプロペラ船で二里ばかり熊野川を下り左岸に北山川を四里ほど上ると此頃大阪毎日と東京日々で暮つてゐる。新日本八景の仲間入りにも顔を出して来る有名な瀨八丁の勝がある。水源は和アルプス山中に發してゐる北山川は、處で奇巖怪石にもまれて流るゝともつかず流れずともつかず碧の深潭をなして居る。かつて木曾の松平の床に遊んだ印家がはつきり強められて眞に天下の絶景を叫ばずにはゐられなくなつて来る。

名残は盡きぬが耐して再び海上の入となり和歌の浦に向ふ。船の中でぐつすり寝込んだ勢で名所見物、さア斯うなると多忙過ぎて眼が廻る。そこで管々しい行列をやるよりも取らず淨瑠璃は三十三間堂木遣歌の應用一段と聲を吟味して……

「和歌の浦には名所がござる一に権現二に玉津島三に下り松四に鹽竈よ」丸で呂昇そつくりだ。うまい誰に褒めて貰はないでも結構人間にはひとり寝て慰む能力があるんだから大したものだ。

「和歌の浦潮みちくれば片男波蘆邊をさして田鶴啼きわたる」の古歌で知られてゐる片男波の風景や、西

國巡禮第二番の札所であるが三井寺の眺望など氣に入つたところを一わたり観賞して一路京へ上る。

津・草津・石山を経て

みやこ入りは四人が思ひくゞに道をとつて行かう。道が飽きれば天を翔るとも地を潜るともそこは御隨意たるべし、但し落付く先は九州相良——違ふ々々三條大橋の眞中「三つ指を突いた跡あり橋の霜」高山彦九郎が皇居を伏し拜んだ位置とAさんの申立、それよかんべえと裁判即決で伏床に引下つた。明日はどうかして呉れよう。直に目が合はぬ、隣りの寢床を覗くと鼾聲雷の如きものが右に左に寝返りを打つハ、アさては狸寝入りか御心中お察し申します。その内私はずひ眠つた、ホンの暫くでハット眼を開くと、三人とも出立して部屋の中は自分獨りだ。太陽は廊下の障子に射してゐる。失敗つたと刎ね起きて手水を遣ひ、部屋の隅へ押寄せてある膳を引付けて飯を掻込むとアタフタ宿を飛出した。驛では港町行の汽車が發車間際で乗込むとビュー——と汽笛と同時に動き出す、鶴山を過ぎ、奈良七重七堂伽藍八重櫻、花に遅い若葉の春日神社に参拜し、鹿に五錢の煎餅をはづんで又汽車、港町で下りると天王寺へ、鳩が澤山居る、二錢の豆を撒いてやる。人力車の梶棒下した處が天満橋際の京阪電車入口であつた、切符を買つた。桃山御陵や、伏見の稻荷さんは車中から拜んだ、電車から下りると三條大橋が目の前に横たはつて居る、橋の半ばに佇んだ大高源吾忠雄は暫く流るゝ水の面を眺め入り何をくよくよ川端柳……

「Cさん早う起きなはれ」

聲にふりむいたら、アラ／＼ホントにこの時目が覺めたのであつた。

「ナアんだまだ鳥羽に居るのか」

「Cさん夢見てゐたな」三人がクスリ／＼。面目次第も御座いませぬ。

各自作戦は胸に秘めて宿を立つた、私は考へがあるので應々反對の方角へ迂回して、でないといつて來られると面白くないから、損な道をとつて昨日見て置いた海岸の或る町——名は知らぬ——へ出て早速モーター短艇を交渉の上乗つた。これが最初の策戦で、これから海上を津迄乗切る内に、よい趣向を練り上げるつもりである。そこで乗るとすぐ横になつて、海上の風光には目をくれなかつた。しかし此の日天氣晴朗にして波なく、東海の天にかゝる不二の雄姿だけは仰がざるを得なかつた。

津に着く、伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ、持ちつ持たれつでやつて行けば勞働争議も起るまい、寝不足は舟の中で大分取返した、名案は期待を裏切つて、儘よと津驛から京都山田間直通汽車の上りを待つて乗つた。

阿漕が浦に曳く網の數も初度なればとつつかまへて言ふ程のこともなく關の地藏さんの話は小便臭く、筆捨山の物、語も万年筆の時代に古臭いと殊更に詮議立て致さず、草津の姥ヶ餅も名物に旨いものなしと、これも排斥、汽車は石山、いしやま此所で下車した。

石山寺に詣ると、ここは紫式部の古跡、源氏物語をもした源氏の間は薄暗い部屋である。藤の花の盛りに來合せたは何かの御縁と一錢投げて三井寺に向ふ、電車を途中石場で下りて義仲寺に往き、芭蕉堂の前では拓植で誕生地を訪ねなかつた無禮を詫び、義仲の墓では「木曾殿と脊合せの寒さ哉」の句を味はうた。

三井寺に上ると湖水が一目に見える、辨慶の引ずり鐘は麓の寺にある。一廻りして出た處が恰も疏水の口これ幸ひと約束して疏水を下つた。

京都は蹴上、インクラインは舟でおろしてくれるものと楽しんでゐたのに空頼みで追ひ上げられた。電車が待つて居る、三條大橋はと尋ねると、この下だと言つてくれたから時間もまだ早し、宇治川の先陣を争ふ譯でもないから、片道六錢の電車賃を節約してブラ／＼坂を下る、これが經世家の辣味憎汗といふのださうな。目出度三條大橋で四人邂逅、時に昭和二年さみだれ月の中流五日午後時▲▲

明野ヶ原 八日市 近江八幡
大津坂 本比 叡京 都

いくら抜けがけでも夜襲とまではゆかないので、ぐつすり寝込んだ四人は朝の膳を並べてニヤ／＼笑つてゐる、もうずつかり腹が出來てるらしい「ぢや一足お先へ」誰云ふとなしに出足を急ぐ、結局皆一しよに

宿を出た。京は東山、清水三寧阪のほとり新緑につままれた閑清な温泉旅館、東山温泉の一室、設けられた別府温泉に一風呂浴びた四人は浴衣がけでいゝ心持に話合つてゐる。「あれから出て、僕は山田から遠くない陸軍の明野ヶ原へ急いだのだ」とかく云ふ拙者は内心得意で経路を報告に及んだ。

「と云ふのは、あの飛行場へゆけば、うまく便があつて、乗れないこともあるまい、實は僕の友だちが、その明野の飛行隊にゐる。その男からいつも話に聞いてゐるので万が一にも乗れるとにでもなればとそんなとをあてにして商賈度胸でその男に面會を申込んだのさ」やあ、と云ふやうなことで友達甲斐のある對面の後で、君何とか一つとそれこそ田中さんが高橋さんを口説き落した傳でやつて見ると、先生何しる軍隊なんだから、やかましいがね、丁度うまいとは昨日八日市飛行隊から一臺來てゐるのがあるから、そいつに同乗出来ればな、かう云つて、八日市から來た飛行士にたのんで呉れた、だが君目を廻しやしないかいとおどかさされたが、こつちの誠意が通じたと見えて、ぢやまあ内しようで乗らしてやらうと云ふことで大願成就さ。待つことしばし、天候はありがたいことに良好、伊吹の觀測所でもよい報告があるから、今のうちに飛ばうと云ふことになる、で御誂へのはやしてブル／＼とやつて、滑走。フワツと浮く、この君フワツが大變なんだよ、何しろ娑婆と天界とのさかひだからね、昇天は、罪障多きわが輩如きの望み難いことではあるが、機械文明のおかげでフワツと來た氣持と言つたら一寸説明出來ないよ。いや實を云ふとね、滑走したのは知つてゐるが、それから夢中さ、變な氣持になつたと思つたらもう圓を描いてドン／＼雲の上の人さ、

そこでグツと唾を一のみにして一生懸命に目をあけて見ると下界が見える、右にはキラ／＼光る伊勢灣、首をめぐらせば模糊たる太平洋、上るにつれて銀鹿の山脈、大和の連山と廣くなつて來る、小さいとはわからぬが、哲學者の見る世界もかう云ふものかと思はれる程の大觀、しかし始めての僕には知覺に變調を來たして、時間の觀念や距離の測定やらがボンヤリした、ともう鈴鹿山が目の先にブツツかりさうになる。のぼり下りのおつゞら馬よ、さても見事な手網染かいな、馬士衆のくせか高聲で鈴をたよりに小諸節、坂はてるる鈴鹿は曇るあいの土山雨がふる……馬子うたでも歌ふぐらゐるの氣樂さで操縦士はゐるらしい。悠々たるさまが見える。そこで拙者もまげぬ氣になつて「さる程に……」と鈴鹿に傳へらるゝ田村磨の鬼退治を思出して亡國の音をうなる「さる程に山川を動かす鬼神の聲、天に響き地に満ちて萬木千山動搖せり」なんてね、嘘だと思つたらあの時傍を通つた鷹に聞いて見るがいゝよ、雲の間を過ぎ、鈴鹿をこえると、もう琵琶湖が見える。右に伊吹、飛彈の山岳、前方に比良比叡の峰つゞき、いや其氣持つたらなかつたよ。近江平原の沃野擴がり、今は麥に菜種の青々として馬鹿に美しい。鐵道線路がそれでもはつきりわかる。銀線のやうな河川、この邊まで來ると、大分機上にも慣れて來た。大體見當がつく、村落だらう、それらしい黒點が見える、湖中の島々、はゝああれが秀吉築城の觀音山に信長の安土城だな、俵藤太の三上山、段々大きくはつきりして來たと思ふと、眞下に廣いあき地が見える、はゝあもう來たのだなとグワツと目がまはつた……ずうつと上氣した、今から考へると逆もエレベ

ターで下る時ぐらゐのことではない、まあ氣を失つたやうな工合ひであると、寒氣がする、何だかいやなものだつた。つまり着陸なんだよ、幸不時着陸ぢやなくつてよかつたが、もうくたさる砂煙が立つと思ふとビタリ止まつた。はつと氣がつくともう操縦士は下りかけてゐた。まあく無事に八日市飛行場へ生れて始めての空の旅を了へ再び娑婆の風に當つてフラクする足を地上にふみしめた。

この飛行場は今では陸軍のものになつてゐるが、もとはこゝで生れた民間の萩田飛行士が開いたもので既に犠牲となつた因縁がある。が自分はまだ京都入りの約束があるのですぐに八日市から湖南鐵道で近江八幡にゆき、そこから東海道本線にのり換へて大津へ。八幡に能登川は、近江商人の本場で伴傳や、西川がこゝから出た位は誰も知つてゐる筈だ。

大津から江若鐵道で坂本までゆき坂本から比叡の山登り、すでに何度も上つてゐるので、何なく登れる、云ふまでもなく傳教開宗の靈山、桓武天皇勅願によつて、鎮護國家の道場となる、若葉の山中はとても爽快だつたよ、それから四明へ上るのはよして、根本中堂參詣の後すぐに例のケーブルカーに乗る、京の街が下に見える平將門ならずとも天下をとつた氣持にならうぢやないか、だが先刻の飛行機の經驗からこんなものはへのカッパさ。田中町の終點でカーを下りて西園寺さんの清風莊の前を通り、下鴨神社を右に、出町から市電で、三條大橋へ……報告終り、

東海道昭和の初旅を終へて

ペンの一としづく

或る偶然な出来事であつた。その偶然な出来事に私は偶然出あつた。その偶然な遭遇が私に豫想せざる偶然な機會を與へてくれた。かくて私は、偶然な運命を微笑しつゝ、安かに都入をした、以上で經路を結んで五十三驛のペンの雲を出たらめに記しておく。

東海道道の道しるべは、古いものでは「關東紀行」「海道記」があるが、江戸時代のもので、最初に出来たのは、淺井了意の「東海道名所記」で、萬治元年の作である。即ち徳川四代將軍家綱の時代で、委しく旅行の用心までとかれその時代の姿が如實に浮んでゐる。道中の名物と云へば、府中の安倍川餅、小夜の中山餠餅、日坂の蕨餅、鞠千のとろ汁、草津の姥ヶ餅、であるが、この「名所記」のころは、少しちがつてゐる、名物にも變遷のあとがあらはれてゐる、文化のこのころとなつてはもはや草津の姥ヶ餅位が、辛じて残つてゐるにしかすぎぬ。交通機關は駕籠、輕尻馬、蓮臺、肩車、渡舟。有名な「橋」は日本橋と三條大橋との間に程ヶ谷新町橋、戸塚の元町橋。藤澤の遊行寺橋、吉田の豊川橋、岡崎の矢矧橋、掛川の土橋、四日市三重川の板橋、土山の鈴鹿橋、渡は川崎の六郷、小田原の酒匂川、興津川、府中の安倍川、鳥田の大井川、見付の大龍川、荒井の渡し、桑名の七里渡、即ち橋が十ヶ所渡が九ヶ所である。

五十三次に關する 書籍圖畫は、實に多いが廣重の畫と一九の膝栗毛に止めを刺す。而て廣重の畫いたものは十數種あるが竹内保永堂板が傑作であるさうだ。十返舎一九の膝栗毛は享和二年であるが、この頃から東海道に關する知識と興味とは行き渡つて文政十二年伊勢大神宮正遷宮の折などは參詣者百十八萬餘人だつたといふ。拔參りも廣く流行して、初めは關西地方に限られてゐたが、その頃は關東にも流行して、洗濯した女がそのまゝ、伊勢參宮へ出かけたたり、商賣に出かけた八百屋が荷を得意先の前にほつたらかして出がけたりするなどが、やたらに流行してゐた。なかには六歳の子供が四國からひとりで參詣した——といふのもあつた。御祓を鷹や鳥にさらはせて、諸方にふらせ、それを奇瑞々々と囃したてた手品のやうな宣傳が、民衆にうまく信仰となつてきたのである。

驛路の最短は御油赤坂間の上六町最長は大磯小田原及箱根間の四里。膝栗毛は人生の旅をも浮いた浮いたでくらさうとする江戸全盛期の太平の享樂氣分、江戸兒の理想をそのままあらはしたもので、そこに靜かに自然や人生を味はうとする詩情も純心も見出すことは出來ぬ。又見出さうとすることがあやまりである。この「膝栗毛」に對し芭蕉や西行の詩情、さびた人生と自然の觀照を畫に描いたものが廣重のそれである。廣重は自然の描寫が巧みである。

人物を描いてもそれが、自然のうちの一點として浮き出されてゐるにしかすぎぬ、而て之は、いまままで佛畫や美人畫のみが盛んであつた畫界に對し新しいエポックをつくつたものであり、すばらしい好評を博した。彼の五十三次の畫を通してみると雨と雪と霧と夜景が多いのは、彼の自然に對する熱と鑄びた旅心の觀照の程が、あらはれてゐる。その雨なり霧なりが、その處々によつて個性をうまく描出してゐる。尙ほ、美人畫から山水畫を獨立させ、日本の山水畫を始めて作り、我繪畫史中に異彩を放つばかりでなく世界の藝術界を驚倒せしめたのはこの廣重と北齋であつた。ピニオンは「廣重は西洋畫に最も博き影響を與へた一人だ」と賞しフェノロサは「大氣現象に就ては、希臘及現代の歐洲藝術がかつて知らざりし結果の種々相を成就した」と詠嘆してゐる。たゞかれの畫が外國人の賞賛によつて初めて日本人に知られて來たといふことは、残念至極である。

東海道を五十三次と定たのは、黄山谷の「鬼門關外莫道遠五十三驛是皇州」といふ小詩から出たと云はれてゐる。黄山谷は蘇東坡の詩と共にこの頃文藝學術界等に飛躍してゐた五山の禪僧によつて受誦されてゐたものであるが、その根源は、華嚴經の善財童子が、佛をたづねて林をこえ、野を越えあらゆる國々をたどり終に文殊普賢にあひ道を領得した、この階程が五十一あり、之に二菩薩の引導によつて都についた——ことから來てゐるのではなからうか、因に華嚴經のこの十地品はバンヤンの天路歷程と同じやうにあらゆる國を遍歴するのであるが、到る處に到る機會に於て救ひをうる大乘の道が暗示されてゐる。五十三次は、近き將來、おそらく見る影もなくなるであらう。だが、藝術は長し、藝術は不斷の泉である。廣重の金剛不壞の藝術は、永遠にその光を未來に輝かすことであらう。人生——それは浮草の旅であ

るかも知れぬ。けれど、その人生——永遠から永劫に流れる生命を、念々に清浄に創造してゆくその眞實心の前には、おそらく不滅の光明はつねに輝いてゐよう。これをはなれて宗教はあるまい。而てそこに眞實の宗教の尊嚴と苦惱と不浄の淨化生活がある。

（以下は非常に小さい文字で書かれた、ほとんど読めない文章が続く。これは本文の下部に記された脚注や補記と思われる。）

使節松平石見守

八木齋樂山

談 叢 篇

（以下は非常に小さい文字で書かれた、ほとんど読めない文章が続く。これは本文の下部に記された脚注や補記と思われる。）

使節松平石見守

八 水 齋 樂 山

時節柄、對米問題、對露問題、對支問題等と、我國もなか／＼外交上重大な時局に際會致してをりますことでもあり、旁々明治以前のことでは御座りますが、當時の國情でありながら對外的に必死の奮闘をされた大人物の勞苦を追想し、當時を偲ぶのも意味あること、存じ、不束ながら松平石見守地圖面外交の一席を申し上げやうと存じます。

徳川三百年の太平も末期に及んでは何かと面倒が起り、内に外に事件が多くなつた。が何と云つても鎖國時代のことであるから外國との交渉はさまざま複雑とは云はれない。が領土の問題になると修好はいたしてなくとも境を接してゐる以上は當然起つて來る譯。丁度その頃問題になつたのはかの樺太の境界である。と云ふのは安政六年露國のムラビヨフ將軍が品川へ來て、宗谷海峡（北海道と樺太の間）を以て日露國境と致したいと幕府に向つて申入れた。これより先樺太には早くから露國人も渡つてをり日本人も渡つてをりましたが、何處の領土ともはつきり定まつてゐなかつた。尤も嘉永五年にプーチャチンと云ふ提督が長崎に來て千島樺太の境界につき談判を始めたが、纏まらずにそのまゝになつてゐたところであるから、日本とし

ても何とかしなければならぬ。ところがムラビエヨフは樺太は全土露領であるとの申入れであるから、幕府はそれは困る、北緯五十度が國境であると主張して相容れず、又も物別れになつてしまつた。しかし事柄が事柄であるから、さういつ迄も放任して置く譯にはゆかない。で文久元年十二月開港延期の要求もあり、旁々國境問題交渉の特使を派遣することになつた。すなはち今日で申すと特命全權委員である。正使には時の勘定奉行兼外國奉行竹内下野守保徳、副使として外國奉行兼神奈川奉行松平石見守康直、目附京極能登守隨員三十七名と云ふ一行、中でも松平石見守は當時の外務大臣で首席全權ではないが實際の中心人物。が何しろ我國から歐洲へ使節を遣す最初のことであるから、迎も滑稽百出、そのこともお話しれば面白いが、それは永くなるから省くとして、さて一行は先づ佛國から英國に渡り、再び大陸に歸つて和蘭を訪ひ、翌くる文久二年の七月十四日露京に到着した。

そのときすでに露國は歐洲に覇をなし大國でもあり、又時の外相イグナチーフは歐洲外交界に盛名を轟かした人であるから、丁番に大刀をたばさんだ異様な人々を見て内心には小ざかしや小日本の使節何するものぞ、一喝の下に追ひかへして呉れんと高をくゝつてゐた。

實にこの時の石見守の責任は大したもので、近頃の外交ならば一々本國政府の訓電を仰いでことを決するるのであるが、あの當時電信と云ふものもなし、すべて祖國の運命を一身に背負つて解決しなければならなかつたのである。

史記 卷之百一十五

石見守は國內の事情を述べて開港延期を求めた後先づ口を切つた。

「永らく兩國の間に解決を見なかつた樺太の國境について此度確たる決定を致したい所存でゐるが。」

ところが飽くまで倣岸に構へたイグナチーフは空とぼけて

「樺太は元來露領であつて、今更國境を決定する必要はない」そんな虫のいゝ要求で遙々來たとは驚き

入つたと云はぬばかり。始めから煙に巻かうとした。

こんな時若し凡骨の外交官ならば一堪りもなく云ひ巻くられて更に要領を得なかつたであらうが、肝に眞

劍味を藏し剛腹にかけてはイ外相に劣らぬ石見守である。お出でなすつたなとばかり冷かに笑みさへ浮べて

「これは貴下の言とも覚えぬ、云ふ迄もなく吾々は貴國と修交を結ぶ爲に遠路遠しとせず來たのであるに

聞きしにまさる貴國の卑劣さに驚き入つた。即ち貴國は廣漠たる領土を有しながら、小國たる我國が、樺

太境界五十度を主張するに對してまで、非理を構へて領土を蠶食せんとせらるゝはいかにも賤しむべき國

でムざる。」

と一本打ち込んだが、イ氏はさらぬ体で

「いや蠶食と云はれるが、元來樺太は露領である、だから蠶食と云ふことはない。露國は正當のことをし

てゐるまで、ある。」

が石見守は先方を怒らし追き込むのを待たん戦法であるのだから飽くまで強辯する。

「それは体のよい言譯である。樺太が露領だと云はせぬ。樺太は飽くまで北緯五十度を以て境界とすべきである。それを護魔化して全島露領なりと斷ぜらるゝは即ち蚕食と云ふ外はない。實に卑劣極まる沙汰ではないか。」

すると案の狀イグナチーフは顔を眞赤にして怒り出し聲を荒らげて

「それほどまでに北緯五十度を主張されるのは何か證據があつてのことか。」

石見守も敗けてはゐない。

「否それは當方より云ふべきことである。貴國が理不盡にも全島露領などと云はるゝまづその證據から出して貰はふ。」

「外でもない、樺太は元來露人によつて發見されたものである」とイ氏は當時の狀況を詳細に述べ立てる。それを皆まで云はせず石見守は、

「いや、そのことなら何の證據にもならぬ。貴下は露國人が發見したと云はるるが、日本からも間宮林藏と申すものが夙に全島を一周してゐる。發見呼ばりは貴國の獨占到にまかせない。それなら五分五分である。」

「しからば日本が五十度以南説を主張する證據は。」イ氏は今度はグの音も出まいと開き直つた。その時石見守は更に動ずる景色もなく懷中より數葉の地圖を取り出した。それは英語、佛語、和蘭語、獨語と云

ふ風に各國語を以て記されたものであつた。

「この地圖をご覽あれ。すべて五十度を以て境界としてゐるではないか。即ち五十度境界は各國の公認するところである」ときめつけたが、先方もさるもの、そんなことで閉口たれない。からりと大笑し、

「これは笑止千萬、いくら各國の地圖に左様に記してあつたと云つても、それは町で賣つてゐるもの。その様なものが何んで國際間の重大問題を定める證據になるものか。わが露國の地圖には決して左様な間違つたものはない。」

と一蹴してしまつた。しかしそれはもとより秘策の第一段、さう云はれた時の用意に地圖は更に今一枚残してあつた。取り出されたのはイ氏が間違のないと云ふ露國の地圖であつた。

「しからばこれは露國の地圖である。これにも歴然と五十度を以て日露の境界としてゐる。これでも證據にはならぬと云はるゝか。」

大抵なものならこゝらで行詰るべき筈だが百戰往來のイグナチーフは冷然として、

「同じくこれ利を射るもの、作圖である。何んで證據にならう。従つて貴下が幾度地圖を出されても何にもならぬ。我政府の確實な地圖には樺太全島が露領であることを明確に指示してゐる。御希望なら明日にも御覽に入れやう。」

その日はそれで打切り、翌日イ氏は地圖を携へて石見守の客舎を訪づれた。何處で何う都合して來たのか

持つて来た地圖は明かに全島を青色に染めてあつた。

「いかゞでゐる。政府の本圖にはこの通り、お疑ひは晴れたるや。」

どんなものだと云はぬばかりに石見守の顔をのぞき込む。石見守はさも感じ入りたるらしく、

「誠に立派な地圖、見る通り明記されてゐる以上最早何とも抗辯する餘地はありません。」

これがまた外交の秘術で、石見守の外交は實に後世の龜鑑とすべきものだけに、かうして一見敵に屈服したかの如く見せ、敵をしてまづ安んぜしめて、油斷したところを一舉本營を衝き總帥の首を掻き切らんの痛快無比なる籌策に出たのである。

地圖の正確なることを感歎してゐた石見守は話頭を轉じて雑談を試みた。

「實は貴國へ參る途中、英佛其他の國々を通過して来たが、いたるところで貴國の天文臺の立派なことを聞き是非視察するやうとの勸を受けて来たが、餘程完全なものと思ゆるが如何か。」

「いかにも仰せの通り世界無比のもの、従つてその天文臺の觀測はあやまりない。」

「なるほど、就ては只今からそれを視察いたしたいと思ふが。」

「天文臺など見てどうなされる。」

「いや別に、たゞ折角參つたことなれば、國への土産に是非拜見したいと思ふ。丁度今外に貴下の馬車が待つてゐる。御多忙中恐れ入るが御案内願はしう存ずる。」

「なにも今でなくともよろしいではないか。」

「いや思ひつきたるを幸ひ是非願はしう。」

「さては貴下は何か目的あつて左様に云はるゝであらう。何の目的か、それを聞いてから御案内ししう。」

「しからば申上げるが、その前に約束をして貰ひたい。たとひ拙者の目的が何んであらうとも必ず只今同道せらるゝや。」

「いかにも同行ししう」と約束してしまつた。そこで石見守は勵聲一番、

「實は拙者各國に於て證據の地圖を買求めて參つたが尙爲念露都到着早々天文臺を訪ねて……」

「なにッ、天文臺を。」

「天文臺を訪ねて第一に見たのはあの地球儀、しかも三つとも明に五十度を以て日露境界としてある、貴下は今同天文臺が世界無比の完全なものと云はれたがその天文臺の地球儀をも證據にはならぬと云はるか。」

敵の肺腑をつく名刀の切先、流石のイグナチーフも虚をつかれて返す言もなかつた。

「貴殿が政府の本圖などと稱して示されたものは確かに偽物、偽物を以て拙者を欺かんとせられたるや。」もうこゝまで来ると致命傷だ。イグナチーフは顔色蒼然先刻までの勢は何處へやら、悄然として形を改め、自己の不明を謝し、始めて石見守の外交に敬服し、偉大なる人物に感動して、それより後は態度一變

五十度説を承認した。かくて石見守の一行は條約を締結し、實地を踏査して無事歸朝されましたが、一國の運命を背負つて立つ廟堂の人々が、いかに身命を賭して國策の施行に當つてゐるかを知るお話として一席申上げた次第であります。

逸話二つ

明治四十年ブリス大將が來朝したとき、華麗を極めた大隈邸に招待されたが、その砌代議士藏原惟廓氏が「折角のことだから、序に邸内の庭園を御覽になつては如何です」と薦めたところ、大將は「否又出直して拜見することにでも致しませう。しかし、私の行く庭園は天國にあつて、到底此邸の比ではありますまい……」

と挨拶した相だ。然るに今回もブリス大將が、濫澤子爵邸に於て朝野の歡迎を受けた際にも、子爵自ら親しく庭園を案内して、一二庭樹の産地など説明したところ、大將は叮嚀に之に應じつ、最後に「此の庭園も結構では御座いますか、私の参ります庭園は、も一つ立派で御座いますぞ。貴公も是非これへ御出でなされるやうにして下さい」と答へた。

上原元帥は佛語の達人で、フランスから本をとりよせては頻によむ。文學、思想、經濟、なんでも讀破する。その又よみ方が面白。書齋で讀んでゐて、あきて來るとポイと本をほうり出して、他の本を引き出す……こんな讀書家だものだから、他の將軍連がへきえきする。といふのは、何かの會議なんかで話しが横道へそれると文學にはじめて、勞働問題までまくし立てられるので防禦法がないんだと。

世情深川夜話

八水齋樂山

徳川も今は末期、ある年の四月上旬の晝七つ頃、江戸深川靈岸寺門前に店を出して居る駄菓子屋の前で辰五郎親子はバツタリ出會つた。

「お、龜ぢやねえか。」

「お、お父つちやん。」

つまらないことから家出した後の辰五郎にとつて、一日も忘れることの出来なかつた愛兒龜松にしがみつかれて辰五郎は思はず咽び泣きに泣いた。

「然しまあいゝところで出合つたな龜、家は何處なんだ。お母あやお祖父ちやんは達者であるのかい。」

聞きたいと一杯の辰五郎は駄菓子屋の牀几を借りて、龜松の口からその後の様子を聞くのであつた。

龜松の話によると、深川へ移つてからはその本誓寺の裏に狭い家を借りて女房おすぎが女手一つで仕立物をしてやつと口すぎをしてゐること、もとは宮大工だつた氣丈な親父も此頃ではすっかり老衰して、生

計を立てることが出来なくなつたこと、夫のゐなくなつた後はおすぎは、その昔屋敷奉公をしただけあつて忙しい暇を見ては龜松に手習本讀を教へてやり、男親がゐないとそんなものだと思はれないやうに子供の教育までに氣を付けてゐること、顔つき合はせば辰五郎の話が出て、身の上を案じてゐること、又祖父の寢た時なんぞは寢物語に「あたしはともあれ龜までがそんなに憎いのか」とおすぎが泣くこと、又さすがの祖父も「酒さへ飲まなければ仕事は出来るし好い人間なんだけれど」と云つてゐること、又いつか表の坊ちゃんにおもちやを打つけられて額に傷をした時なんぞ「なんでもない家ならどなり込んでゆくのだけれど表のお家はいつもお仕事を呉れる大事な家だから」つてだまつて何にも云はなかつたことなど、問はるゝまゝに語るところは辰五郎の胸に一々釘を指した。そして「やくざな俺ゆるお前たちにとんだ苦勞をかけて濟まなかつた。」と子供にさへ心から謝るのであつた。

「お父ちゃんはお酒を飲むからいけないんだ。お酒なんかも飲まないでねえ、お父ちゃん。」

「あゝ飲まないとも、十にも足りねえお前に意見、誰の小言よりも骨身に浸みて忘れねえ。」

さうだ、あの時は……

二

辰五郎は今更ながら當時を追想するのであつた。

丁度地主の葬式で田圃へ行つた時、氣を利かした振舞の土瓶酒にしたゝか酔つた揚句の果、いつものよくない性分が出て、着てゐた羽織を質に入れ、ついウカ／＼と遊んでしまつたが、女房も子もある身、歸りにくさに思はず時を過して丁度三日目の暮六つ頃、氣まり悪さを酔にまぎらし、我家ながらも高い鬮をやつと蹴いで入つたが、入る早々女房の小言、意見のほども正氣で聞けば云ふがあたりまへ、しかし一つは酔ひも手傳つて、我にもあらず心情が曲る。「へん、何がそんなに不服なんだ、一晩や二晩、家をあげたが何で悪い。ガミ／＼と素人臭い強意見、屋敷奉公が聞てあきれらア。不服なものに小言は無用だ。とつと出て行くがいゝや」と果てはおすぎの髻をつかんで蹴飛ばす騒ぎに今まで仕事場にちつと様子を見てゐた親父の伊兵衛もたまりかねて出て來た。

「こりや何をしやがるんだ。龜と云ふ七つにもなる子がありながら、酒さへ食らやあ意氣地もねえ、其狀だ、七八年以來手前の酒には愛想もこそもつきてゐた。この親が今日と云ふ今日は改めて勘當する。手前こそ出て失せろ。」

伊兵衛は怒りと激情に震へながらうめくやうに叫んだ。

「今度こそ今度こそと思ひながら、おすぎの貞節と龜の可愛さに、今までは目を瞑つてゐたのだ。六十を越してもこの腕で嫁や孫位俺が立派に養ふことは出来るんだ。のんだくれの癖に大きなことを云やがつて

ぐずぐず云はずに出てゆけ。」

はら／＼しながら仲へ立つておすぎの止めるのも聞かばこそ、辰五郎も負けぬ氣になつて悪口雑言、未はおすぎに喰つてかゝり擲る倒すのあばれ方、風邪で寝てゐた龜松までが飛んで出て「お父つちゃん」とするのを突飛ばすを見ては伊兵衛は、もう何とも勘忍のしようがなかつた。

「今更となつて用はねえが、職人にとつての刀脇差、せめて親の情に道具箱だけ呉れてやら。」
格子戸開けて突出されながら「イヤこれでさば／＼した」と減らず口をたゝいてよろ／＼と彼は夜道を辿つたのだつた……

それから辰五郎は何處を何う歩いたか、道具箱を肩に千鳥足で主水河岸へさしかつて来た時には暮六つ半頃、まだ宵ながら月なき空はうす暗く河岸の家並の窓あかりがくつきりと見すかされる。丁度向ふから鼻唄交りにやつて来たのは二人連の荷船の船頭、出會頭にはつたり辰五郎と突當らうとする。

「氣をつける、間拔め。」

「なにを！」

「何が何うしたてんだ」

がもとでとぐ擱合の喧嘩になり、辰五郎は道具箱から手當次第投付ける。が何しても酔つてゐて身の自由にならない辰五郎は遂に其處に打据ゑられてしまつた。

程經て駕籠でやつて来たのは辰五郎の出入する小傳間町の木綿問屋駿河屋の女房おみさであつた。人が倒れてゐると聞いて、駕籠から出て見ると、思ひもかけぬそれは出入の大工辰五郎なのに驚いて、聞いて見ると、酒の上の喧嘩と知れ、酔ひもさめるまゝに出て来た始終を話して辰五郎はさすがに面目なく打しほれた。

と急に耳を驚かすは三半鐘、續いて近くから二半鐘。

「あ！ 火事だ空が眞赤だ。」

「駿河屋さんの方角ぢやねえか。」

「そりや大變、お出入先の近火と聞いちゃ、抜けた腰でも立たせずにや置かれねえ。」

辰五郎は半纏に鉢巻きつとしめ、宙を飛んで駆け出した。

三

時刻は丁度晝の七つ半頃、深川海邊橋際の鰻屋「紀の庄」の奥座敷、靈岸寺門で龜松に出會つたを幸に近所に住むと云ふ女房を呼び出して、長い苦勞の訛を云はうと思つて辰五郎は龜を連れて一足先に座敷へ通つてゐた。

膳は運ばれてゐるが銚子は載つてゐない。辰五郎は土瓶から茶をついで飲んでゐる。

「あの酒ゆゑで親や女房子供にまで泣きの涙を見せたんだもの、飲むんぢやねえ。」
辰五郎はちつと思ひに沈んでゐた。

やがて女房のおすぎはやつて来たが、きまり悪げに片隅に座をとつてゐる。

龜から話を聞いて親父さんに願つて見ると思ひの外機嫌よく出して呉れたので飛立つ思ひで来たど、もう女らしく泣いてしまふ。

「何から話してよいやら、駿河屋の近火からおかみさんの信用も出来、その口開きで詫を入れたが、父親の一徹から直には聞いて呉れず俺も忌々しさから、此深川森下の懇意な頭領の家にかけて込み、好きな酒もブツツり絶ち死んだ氣になり働いたお蔭で何うにか人間らしく、去年の暮から春頃には井に二朱や一步は切れねえ懐中、もうよからうと頭領をたのんで松下町の家へ行つて貰ふと、此頃中の郷へ越したと云ふ。又やつと其處を捜すと今度は深川へ越したとばかりで先はわからず、身から出た錆とは云へ、是やあ一生の生別れかと悔んでも追付かず、然し父親が江戸を離れる人でなし、而も深川と聞いたものをと思返して、二月から俺もこの先の六間堀に家を借りて男やもめ、毎日お前たちのことを思出さねえ日とはなく、さがし抜いてゐた所、圖らず今日この始末、木場へ材木を買入れの道でばつたり會た龜の口からお前たちのありかも知れこんな嬉しいことはねえ。」
長い話に嬉しいはおすぎも一つ。

お父つあんの一徹から夢見たやうに夫婦別れ、駿河屋さんへお父つあんが強情張つたもみんなお前の爲ゆへ……。それから云ふものは寄る年波にお父つあんも弱り出す、入ると云ふは高の知れた妾の稼ぎ。もう苦勞はさしてお呉れでないよ。」

「あ、今日が日までよく皆なの罰が當らなかつた。」

心から詫る夫、その夫のしほらしさにほろりと涙にしめる女房、淋しい片親ばかりとの生活から、好きなお父つあんを眼前に見た倅の龜松、かうした三人を圍ぐる座敷に嘸々たる雅樂の響が聞えて来た。海運寺の御開帳なのだ。

その日の松王丸

近江春彦

— そのあさ —

病苦と心の惱みのために昨夜はほとんど、一睡もしなかつた松王丸は床の上に起き上つて重い頭をおさえてゐる。

「世間のうわさ位にこれほどまでに悩む松王丸ではなかつたのに……」

松王丸は自分のこの頃の心理状態が、いちじるしい變化をして來たのに自分ながら驚いてゐた。

「世間が何と云はふとも、自分の信條とする「力」で何事をも押し切つて行く……太い筋を大地にグイグイと引くやうな生活それを目ざして自分は時平公の下に走つたのではなかつたか、恩家を裏切る不所存者？ 兄弟を賣つた背徳漢！ その非難をも甘受し強い心をもつて權力をふるうて來た。しかし自分は今となつては、その雄々しさうに見える過去の努力の影を引いた今の自分が寂しい」

松王丸がこんな弱い心を起すやうになつたのは病氣のせいばかりではない。

權力に降伏して、否そうではない、權力を信條として、何事をも力を以て、解決する、その爲にはちよう

ど茨を切つて道を開いてゆくやうに、自分の道をさへぎるものはすべて、撫で切つて行つた。「さうだ俺ははりつめた心のまゝに男らしくそれをやつて來た」と松王丸は述懐した「ただけど、どうしたことか今はもうそのはりきつた心にもゆるみが出てしまつた。」

松王丸はその隙にまざりと自らの過去の姿を見た、同時にうつろになつた今の心に見逃がすことの出來ない寂しさ——それはちよつと云ひ表はし難い心持ではあるが——を感じずにはゐられなかつた。

時平公よりの御使春藤玄番殿御入り——病氣静養の爲別荘へ來てゐた松王丸のもとへ突然玄番が訪れたのは昨日であつた。

「かねて詮議の菅秀才は建部源藏がかくまつてゐることがわかりました、よつて明日は源藏に出頭を命じ、有無を云はせず菅秀才の首打つて出させる手筈につき貴殿にその首實檢を申付くるとの御意で御座います」

この主命を受けた時

「いよゝその日が來た」

と日頃の松王丸に似合はずヒヤリと水を浴びせられる思ひがした。

「委細承知……」

口には反射的にさうは云つて玄番をかへしたが、それから後の彼の懊惱は、非常なものであつた。

悪の讚美とまで行かずとも、權勢を懂がれそこに最上の道德的基準をおくに躊躇しなかつた時代の松王丸ならば、主家の遺子菅秀才の首實檢などと云ふ場面は彼の最も得意とする壇場であつた。そんなことを平氣で、しかも得意然とやりかねない人間であつた。

あまたの従者を引具して乗込んでゆく自分の姿、自分の目き、一つで何うにも審きが出来る自分の地位、權威を背にした強者の雄々しい面影……それに松王丸は

「あゝ何と云ふ淺間しい姿であらう」と顔を覆はねばならぬほどマザ〜と自分の權勢ぶつた姿がそのまゝ、空虚な愚かなそして卑しいものに見えるのであつた。

裏切者！ 不所存者！ 背徳者！ さうした非難に對して可なり強い刺戟をうけたとは事實である。しかしほんとうはさうした世間の非難などによつてななくて、今は自分自身が今までの振舞をつゞけることを承知出来なくなつた。

「弱者の世迷言などに目をくれて、自らの信條を棄てるとは何と云ふ卑怯な奴ぢや」

「お前が菅家にそむいたのではないのだ、菅家自ら退いてしまつたのぢやないか、お前はたゞその善後を自ら處置したゞけぢやないか、又お前が肉身にそむいたのではない、お前の兄弟たちがお前から逃げて行つたのである。」

「ただ、何が後めたいことがあるものか、お前はやはりその男らしい信條に生きてゆくのがほんとうなんだ」

またそんな風に云ふ聲も聞えて来る。その度毎に

「いやそうだ、やつぱり俺には俺らしい道があつたのだ」と思ひ返しても見た。しかしそれでゐて、どうしても心が安立されない。

松王丸は自分の今まで進んで来た道以外に、もつと人間らしい平靜な落付ける道があるらしいことに氣付いたのである。

庭から梅が香がブーンと香つて来る。物思ひから覺めると靜かな奥山から藪鶯のなまな聲が聞えて来るやうだ。

そのひる

「梅が咲いてゐる。さうだ彼の方は梅を好かれてゐたな」

いつはり多き人の世に於て眞實に還り、眞實に生きる爲めには、よほどの努力を要する。志を有する人はあつても、それを實行する人の少ないのはこれが爲めである、人々は眞實に生きたいと願求し、それを行ふに可なりの努力のいるとも承知しながら、自らすなほな心になり切れなくて悶え、斷乎として眞實に還る道に進み得ないで苦しんでゐる。

ましてこの時代のやうな社會組織であり、また松王の境遇であつて見れば、その悶苦の甚しいのを想像出来るではないか。

理窟は何うつかうとも、辯明は如何様に出来やうとも、明かに自覺した現在の松王にとつては、深く眞實に還るのが何よりであつた、なまなか躊躇つてゐればゐるほど、悩みは重なるのみであつた。

權勢の犠牲——それは勢力争闘の境界に於ては免れ難いものである。ある勢力と勢力とが互にせめぎ合ふ時、いづれかが倒るゝ時が来る。その勢力争闘の間に幾多の犠牲が生ずる、そしてその犠牲は争闘のつゞく限り絶ゆることはない。

『自分はこの渦中に巻き込まれて、遂に眞實を失ひ、自らの生きる道に迷つた爲めにこの破綻を來たしてしまつたのだ』

と松王はつくづくさう思つた。

『梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に何とて松のつれなかるらん……主君菅丞相は自分のために、かう歌つて下されたのに、權勢に目のくれた自分は誘惑にかゝり、遂に術數の囚となつて操られて來た。』

それに今日の役目は何うだ。大恩をうけし菅家の遺子秀才を權勢の犠牲となし、その首實檢をなすべき命をうけてしまつた。もしこの時に自分が眞實に還らなければ、遂に救はるゝの時は來ないであらう。

松王は妻の千代を呼んで自分の苦衷を語り、進まねばならぬ道を明かさうと思つた。

『さあその驚きは尤もだが、これより外に道はないと自分は考へる。今日に迫つた秀才さまの首實檢、自分にこの大役を命ぜられたのを幸ひ、小太郎を身がはりに立て、この大難をのがるゝとともに、松王が眞實に還つたあかしを立てたいと思ふのだ』

松王はしみじみさう云つた。

『あなたのお心持はわかります、時平公の手先になつて主家に仇をなすやうな振舞をなされるのを妻の身として見てはゐられませんでした。今日と云ふ今日、そこにお氣がつかれて、世間の非難などと云ふうはべのことからでなしに、ほんとうに心から眞實に還つて下されたのを、私が喜ばないでどうしませう。……しかし、その喜びも、一粒種の小太郎を犠牲にせねばならぬと云ふ、あんまりせつばつまつたことのために消え失せて大きな悲しみになつてしまひました。』

病のために子をなくする場合でも親の身になつて見ればどんなにつらからう、ましてかうした目に陥つて可愛い子を犠牲にせねばならぬ場合……千代は恩愛の絆絶へ難くかきどくのであつた。『そりや俺だつて、ある犠牲のために子をなきものにするに云ふことが眞實に生きる道か何うかはつきりのみ込めない、しかしこれは自分たちで何うにもならない運命ならうと覺悟したのだ』

『生きる悲しみ』が松王夫婦を襲つてゐる間に、時は過ぎて行つた。彼等は今は涙を拭ふて、義に生きるべく立ち上つた。

「幸に源藏は寺小屋を開いてゐるから、小太郎に新に寺入をさせ、身がはりに立てるとにせやう。」
松王は千代に小太郎寺入の事についていろ／＼と注意をした。

「村のもてなしと許り、源藏を春藤の邸に呼び出し、菅秀才の首を打つて出せと嚴命した筈だから、まさか源藏としては正直にその命通りにする事も出来まい、と云つて身替りを立てるにしても山家育ちの手習弟子の中に、それに御立ちさうな者もゐないではないか、そこで小太郎をやれば、源藏はきつと身替りに立てやう。」

情と義のチレンマに苦しみながらも妻と共に、小太郎にわけを話して覺悟をきめさせた松王は、惻愴な子だけに健氣な覺悟をきくにつけ涙がこみ上げるのを忍びかねた。

玄番の迎へに、衣をあらため病をおして玄關を出た松王は衛士雑色を従へ行列を整へて源藏の館を差して行つた。

「もう今頃は寺入をしたことであらう。」

駕籠の中の塗板にうつる病みほらけた我妻が自分ながらも痛ましく見えた。ふと眼をやると彼方の道を千代が下僕を伴つて歸つて行く姿が、駕籠の垂れを通して見える。

「あ、小太郎は行つてしまつた。」

そのよる

緊張した氣持で對座してゐる四人、松王夫婦と源藏夫婦。

首實檢を了へてから數時間を経た暮過ぎ、今は柄にかけた手もゆるんで源藏は、松王に同情と共鳴を禁ずることが出来なかつた。今まで松王に對して抱いてゐた憎しみもなく、たゞ間違つた道から抜け出さうともがく松王の苦悶それに對して十分同情が出来た。「人間は無暗に憎めはしない、憎んでゐる時、對者は心からの素直さを持つてゐる時があるのだらう」「源藏どのあの時バツタリ首打つ音を聞いた私の心持を察して下さい。鬼か蛇のやうに人には云はれるこの松王にも人の情は持ち合せてゐるのです。」

この時の松王は全く人の親として、恩愛の一子を犠牲にしたと云ふ、云ひ知れぬ悶えに苦しむ一個の人間であつた。

「幼いながらもことをわけて云ひふくめると健氣な覺悟はして、家を出たのですが、定めてその時には見苦しい様を見せたでせうな」

「いや、極めて落ちついた様で、ニッコリとさへ笑を浮べて……」

源藏も泣いてゐた、大難關を突破せんが爲に拂はれた犠牲とは云へ、罪とがもなき子供を、手にかけてたは自分である。大きな力によつて動かされたとは云へ、自分のやつた行爲は決して許されはしない、殊に強い心になつて、可愛い一子を犠牲にした松王夫婦の心持を察する時、小太郎臨終のさまを尋ねられた

時の、ドギツイシヨックは堪へられなかつた。

「あのニツコリ笑ひましたか、千代、小太郎はニツコリ笑つたさうだ」
笑ひにまぎらさうとする松王、笑ひさへ出ない千代の悲しみ……

親として、子供を寺入させるのに、机本箱の中に死の装束を入れてやる——そんなものがうなづかるべきでは勿論ない。生きる道をあやまつたもの、破綻、業から業へ轉じて行く煩惱の生活が、みぢめな結果を生じ、正しい道に還らんとすれば又そこに起る、悲劇、脱れ方なき苦惱の生活。すべてを忍ばねばならない堅い決心を松王はしてゐるが泣かずにはゐられなかつた。悶えずにはゐられなかつた。

「主家にそむいた自分は、やはり主家に還るのがほんたうなんだ。だからそれに還るのだ、しかし一旦そむいた罪のむくいを決して許されるものではない、間違つた行爲の當然將來する結果は、自分がこれを嘗めねばならぬ。」が松王はすでに自覺した人であつた。すべてを投げ出して、すなほに罪のむくいを受けてこそ、ほんたうのすくひはあるのだ。

首實檢の大役を了へた松王は、主家の上にかゝる大難を先づ免がれしめ得たことを安堵すると共に、願ひによつて役を退き、一切の公的生活を絶つて、たゞなき小太郎の菩提を吊ひ、佛に仕ふることによつて、安住の生活を得やうとした。それには、まづ源藏の前にもひれ俯して、懺悔しやう。
さう云つた氣持で、源藏の館を訪れたのであつた。

無抵抗な者には敵對者はない。すなほに懺悔してゐる者の言葉は受け容れられる。松王は源藏の前で、すべてを告白した、ひたすらに罪の贖ひをした。そして、

「この上は一刻も早く菅秀才さまをお落し申し、時機を待つて主家再興の企てをするのが當を得たと思ひます。何うか貴殿はこれより秀才さまにお伴して、萬事を宜しき様取計はれたいと思ひます」とも云つた。

「私其は、これより小太郎の野邊の送りをすまし、その上は西國禮所を巡禮して、よき所に庵を結び静かに念佛の生活に入りたいと思ふのです」

思へば今日一日こそ、松王にとつては、ほんたうに意味深き日であつた。今日こそ彼は、ほんたうの人間に還り、生きる道を見出し、すくひの光を仰ぎ、悶えもとれて、ほんたうの自分を覺り得たのであつた。

夕暗は、すでに村落を單めて、夜のとぼりが人の世を包んでゐた。

戸浪は静かに小太郎のなきがらを抱いて来て、それを佛壇の傍に置いた。

香はまづ松王の手によつて燻ぜられ、次いで千代のたむけを小太郎の靈は待つた。

白布に覆はれたかはり果てた我子の姿、今日寺入りに羽織袴の凜々しい姿にひきかへて、この様は何としたことであらう。

「隣村まで行つて来ると云つたら、なつかしさうに追つて来てすがりついたあの姿」

千代は我を忘れて、なきがらにすがりついてよよと泣いた。女氣の忍びもあへぬ悲痛誰もとがめるとは出

来ないではないか。

それは源藏にとつても同じであつた。いな母としての戸浪にとつてはそこに人の子と我子の境などはなかつた。ともに涙にくれずにはゐられなかつた。

なきがらは六字の名號をそへて、駕に移された。その後について松王夫婦は従つた。暗の道を照らす先松火は消えんとしては燃え、燃えんとしては消えかゝる。(完)

その頃の離婆多

「俺は、孤兒だ」

さう云ふ感じは、ともすると離婆多の心を、淋しさに導いて行つた。そうして折角の才能をもつて居乍ら放縦に身をくづしだんくと、捨鉢的な心を増さしてゆくのであつた。

ことに、叔父の家に、養子が来てからは、彼は、日毎、憂鬱な思ひをつゞけねばならなかつた。叔父叔母の心づくしも、訓戒も、訴へるやうに哀願することも、それはむしろ、彼の心をますます掻き亂すことより外に、何の益もなかつた。

「ね……離婆多さん。どうぞ、私達の心を察して下さいな。」

私達は、あなたが、立派に生育して下さらなければ、亡き父上様や母様に、何といつていゝか、本當に申しわけがないのですから。

私達の心持——それがあなたにわからないのは、まだ私達の心づくしが足りないからでせうが、然し私達は、たゞ一途に、あなたの御成人を祈つてゐるのですから」

けふも叔母は彼のぼんやり凭たれてゐる椅子に手をかけて涙ぐみ乍ら云つた。

「えい。心配をかけてすみません」

彼はかるく眸をつぶつて

「どうせ、私は、孤兒で、父無兒なのですから」

とはき出すやうに云つた。

「父無兒つて、あなた、あなたは立派なお父さんがお出でになつたぢやありませんか？……」

「僕には、それがこの頃、信ぜられなくなつたのです。みんなが、僕を欺いてゐるやうな、そんな氣がしてならないのです」

「あなたは、何ぞ偽しやるのです？ あなたは、自分で、夢のやうなお芝居をつくり上げて、そのなかに

悲しい自分の影を浮べてゐらつしやるのです。さうして、悲しんでみたり、よるこんでみたり、寂しがつ

たりしてゐらつしやるのです。あなたのお父さんは立派なお役人……死ぬまで、あなたの身の上を案じつ

、全てを私達にたのんでなくなつたのです。お家の相續、その再興、それは、あなたの肩に負ひかぶ

つてゐるのでぞ」

離婆多は伯母の云ふことはよくわかつてゐた。心では感謝もしてゐた。けれど養子に對する氣兼ね、孤兒

であるために、世間に思ふやうに容れられないことなどから彼の心はいくらか拗ねこんでゐた。といふより

世を拗ねて終ふより外に、その苦惱からのがれる道はなかつた。ことに、かうした心持から、叔父叔母の

眼をかすめて使つた金はかなり多額にのぼり、借金しやくきんの督促を受ける苦しみは、油をそゝいだ火のやうに

自暴氣味を、あふりたてた。彼の心は日に日に粗暴さを加へるやうになつた。ことに酒に酔ふと叔父や叔母にさへ、むきにくつてかゝつた。叔母がうち案じつ、室を出てゆくと、彼は、身仕度して、逃げるやうに家を出た。さうして、いつものやうに、酒にしたしんだ。

「離婆多さん。どうぞもうよして下さい。お酒を召し上がることは……私は、苦しんで……」

叔母の娘のジイタは、彼に泣きついた。

「ほつておいて下さい。私は、私としてかく生きるより外に道がないのですから……」

「いえ、ほつておけません。妹として私は、みのがせないのです。」

離婆多さん。あなたは、室星にお祈をして、叔母さんが得られた天のお兒ではごさいませんか？ 神童だ

と、村人から、尊まれた智慧者ではごさいませんか？……何が、そんなにお氣に召しません。さア私に、

何もかも仰つしやつて下さい……父にしても、あなたがそんな日暮らしをされてゐることをどんなに悲し

んでゐるでせう」

ジイタがつめよる身をおしのけて離婆多は、酒屋を、韋太天のやうに飛び出した。さうして、あてもなく

眞闇を駆けめぐつた。

そこは、舊い荒れはてた都城の跡であつた。

もう、塔も城壁も崩れて、人影はなかつた。只蒼白い月の光りが、さら／＼と光りの束をなげてゐた。離婆

多は、どうしてそんな處に來たか、わからなかつたが、彼は、石壁に沿つて、數百年の過古に、文明と幸福に酔つてゐた都人を偲び、生あるものは、こはれてゆく寂しさをしみんと感じつゝ、お城の奥へとすゝんで行つた。

と、いまゝで、さえてゐた空が俄かにかき曇り、忽ち、眞暗な闇夜となつた。さうして雷鳴閃光するかと思ふと、瀧のやうな雨がふつて來た。

何よりも雷きらひな彼は、眞着になつてふるへてゐたが、とにかくすぐ前に月の光が見えてゐた祠までゆかうと、やつと、氣をとり直して一さんにかげ出した。

「俺の母は、旅さきから歸る途中雷にうたれてまもなく死んで終つた。そのとき生れたのがこの俺だ。ひよつとすると、俺もけふこの雷で……」

もう離婆多は生きてゐる心持はしないが、ますく雨は、激しくなり、雷はだん／＼と大きくなつてゆく。それに夜は更けてゆくにつれておそろしい嵐さへ加はり出して來た。

彼は、梁の上に縮みあがつて、祈るやうに、曉をまつた。

だが、時はのろく歩んでゆく、やたらに焦ら立てばいら立つほど、おそろしさは、加はつてゆく。

三更のころであらう。祠の扉をかたく占めておいたのにびり／＼とあく音がする。そつと息をこらしめてみると小さい青い鬼が、人間の屍をかついて這入つて來た。あつと思つて身をひそめると續いて赤い大きな鬼

が、怒りをふくんで慌しくかけつけて來て

「俺がもつて來た屍を、おい、こら返せつ……」

と云ふなり小鬼のもつてゐる屍を引つたくつた。けれど小鬼も仲々まげてゐない。

「何に？ 俺がもつて來たのぢやないか」

棕櫚のやうな頭の毛が後ろに逆立ち、釘のやうな荒い毛が足から手から一面にはえてゐる赤鬼と、小さいが口が、耳まではりさけてゐる青鬼とは、そこでつかみあひをはじめた。しかし、とても青鬼は赤鬼にかてない。忽ち、隅の方になげつけられたが、負け嫌ひの青鬼は

「何にこん畜生！」

と、起き上るなり、じつと大鬼をみつめ

「俺がもつて來たのが嘘なら、この梁の上にある人間に聞いて見るが、この人は、宵からこゝに居るんだから、よくそれを知つてゐる筈だ」

離婆多はぎくとした。氣がつかないと思つて身をかがめ、梁のかけに縮んでゐるのに鬼はちやんと知つてゐる。

「あゝ」と彼は、絶望の溜息をついた。が

「もうこうなれば、何もかも駄目だ。彼等は、もう自分の居ることも知つてゐる。この屍を判じさせられ

たら、實をいつても、不實を云つても、どうせ殺されなければならないのだ。同じ死ぬなら、本當のことを云つて正しきものに殉じよう」

離婆多はとう／＼小鬼に有利な證明をした。大鬼は、煽のやうな顔をして、屍をなげつけると共に、離婆多を驚のやうな爪で引つゝ、かんで、「あゝ」と云ふ間に、一脚を引きぬき、やけにくひしやぶつて立ち去つた。

離婆多は、痛さに狂ひ轉んだ。

だが小鬼は聽て、眞實を云つてくれたことを感謝し、屍の一脚をぬいて、寄せ補ひつぎ歸つて行つた。離婆多の脚はもとのやうになつた。彼は、ほつと安心した。

これは、夢であつた。離婆多は愕然として悟つた。

「俺は、いままでこの自分の身のみで執じて來た。自分の口のため、身を飾るため、意をよるこぼすため、それのみに心を迷はし、それが充たされないとやけになり、だらしない生活ばかりつゞけて來たのである。しかし悩みは惱をうみ、焦燥は焦燥を生む。そこに救はれる道はない。たゞひとすぢに正直の大道をふむ。そこにこそ救ひが成ずる、ことにこの身は、虚幻である、自分の脚は、自分のものではない。父母の與へた脚でもない。つぎたされた足だ。あゝ一切は因縁の和合だ。無常の風が吹いて來たら、この魂すら……、そうだ。俺は、孤兒でも何でもいゝ。ひとつ發心をして、悔いのない眞實の生活を辿つて行

かう。酒も女も自分の心を本當に救ふ道ではなかつたのだ。」

離婆多は、俄然、享樂を追及する生活をすて、新しい生活に這入つた。いままで、酒や女に耽けるこそ、人生に生きてゐるしるしだと思つてゐたことが馬鹿らしくなつて來た。

人のためにはたらくことは、愚かなことであると「考へてゐた」ことが、むしろ、そこに意義ある自分を見出した。

彼はやがて、釋迦の教團に這入つて、ぐんぐんと徳を修め、智を磨いた。

幸福

——ある淋しい男の話——

序曲

——幸福な生活は人間の心を随落させます。が、不幸は心の救となるのです。緊張！

私共の生活に無くてはならぬものです。ではその標準は？

人々よ 出發せよ。——闇の光に——

行かうではないか。——眞の幸福に——

【一】

「また暮れるかなあ」

淡い云ひ知れぬ寂しさに閉ざされ乍ら、富藏は斯う獨言を云つて静かに石から腰を離した。

そして歩かうと努めた。が何故か、歩めなかつた。その歩かうと云ふ氣持は、直ぐに烈しく襲つて来る飢と疲れの爲に押し消されて、又腰を下ろして仕舞つたのである。

「あゝあ」思はず溜息が出た。十一月の寒空に白く消えて行く溜息を凝視していると、袴々と情けなさ
が込み上げて来て、熱い涙が滲み出て来た。

一体乃公は何處へ行くんだらう？　そしてどうなるんだらう？　今朝から腹に何も入らない。江尻の在で
水を呑んだきり、何も入らない。どうしてくれるんだ。——誰も返事はして呉れなかつた。

「おゝ……」

熱い涙が頬を傳はつてポタリ／＼と膝に落ちるのを、みもやらず身動きもしなかつた。泣きたかつた。
泣いて泣いて、ありたけの涙を盡く出し切つて仕舞ひ度かつたのである。

乃公は、一体どうしたといふんだらう？　醜い、不愉快な回想が富藏の頭の中を渦巻にして仕舞つた。

「富藏、お前も、もう二十五ぢやねえか、いつ迄も、こんな小つほけな工場でブラ／＼してゐた日にや、
とてもうだつは上りつこはねえ。どうだ一番ツツ走る位の勇氣がなくちゃ、でけえ事は、出来やしねえ、
行つて見ろ、大阪へ——な」

と云つて自分を煽つた清吉の顔が目の前にあつた。

「ただ阿母がなあ、清兄い、阿母がどんな事になるだらうなあ、それに親方にもなあ」
と自分が心配さうに云つたのを

「富藏、手前も意氣地の無え野郎だな、阿母が何でえ、親方が何でえ、あんな、端野郎チョツ——富、

お前が腕の良い職人になりたいなら大阪だよ。何と云つたつて、行つて見な、——未だ考へてるのかえ、大阪は、いゝなあ、あのズーツとな」

と云つて、自分を、まんまと一杯はめた清吉の憎らしい顔が目の前にあつた。

「富藏や、お前今日大變顔色が悪いが、どうかおしかえ。え？ 何しろあんな危い仕事なんだから氣を付けておくれよ。お母さんはお前の顔を見ると、本當に吻つとするんだからね——」

と、迷ひながら歸つた時、目に涙を溜め乍ら云つた優しい、母の顔が目の前にあつた。そして傍から

「本當だよ富ちゃん、姉さんだつて同じだよ、氣を付けておくれよ。」

と合槌を打つて優しく笑つた、姉のおよねの姿が目の前にあつた。

阿母の云ふ通りだ、矢つ張りこの土地に居なくちゃ、いけないんだと、密つと寐乍ら涙を拭いた見すばらしい自分の姿が目の前にあつた。

一日の勞苦を終つて、茜色に空を染めてゐた太陽は、いつか沈んで、夕靄が秘かに迫つてゐた。

それなのに、それなのに何故乃公は、馬鹿な事をしたんだらう？

清吉、阿母、姉の顔！

富藏の頭は、絶え難い焦慮と、寂しさがこんがらがつて、どうにも仕末がつかなくなつて仕舞つた。

「さ早く歸るべえ、なあ早くつ歸つて、みんなでおいしい御飯を食ふべえ、なあ、娘や……」

突、然、富藏の前で斯う云つて行く人があつた。彼が急いで顔を上げると、鞆を擔いだ百姓の姿が夕暗中に消えて行つた。

「もう夜なんだな。今夜はどうする」

歩く元氣は出なかつた。

いけない。いけない。こんな弱い事で、何が出来るんだ、馬鹿奴。斯う云ふ考へが頭を支

配し出した。

「富、手前も意氣地なしな奴だな」

さうだ。清吉の野郎に、今に彼奴を驚かしてやらなくちゃならないんだ、こんな弱くてどうする。馬鹿

奴！ 心の中で斯う叫ぶものがあつた。

……矢ツ張り乃公は思つた通り、しなくちゃいけないんだ。大阪の友達の所へ行かなくちゃいけないんだ。迷つちやいけねえ……

堅い決心がついた。

彼は昂奮した心持を以て立上つた。

「はッ」

と、何かの物音に驚いて、目を覺ますと、眞黒な天井が直ぐ目の上にあつた。体を起すと、薄汚い煎餅蒲團

が自分の体を包んでゐた。

……あゝ矢張り夢だつたのだなあ……

「お、寒い」

窓を明ける勇氣も出なかつた。外は雪らしい物音。

何となく頭が重かつた。

昨夜、白くなつた湯に入らなければよかつたに……

「お客さん、起きなかつたかね」

階下から、皺枯れた老婆の聲が富藏の耳に入つた。

「乃公は昨夜、宿屋へ泊つたんだなあ」

こんな事を考へ乍ら、聲には返事をせずに、また床にもぐり込んで仕舞つた。

老母は行つて仕舞つたらしかつた。惱ましい幻想が富藏を襲つた。

「自分は一体何しに、世の中へ出て來たんだらうか？」

幸福になりたいからぢやないかと知らない人が答へた。

「だけれども幸福になれいんです！」

それは、お前が悪いからだ。

知らない人は又答へた。そして、知らない人は、

富藏、お前、愛と云ふ事を知つてゐるかね。それとも知らないかね。

と、訊いた。

「愛て一体何です」

富藏は訊いた。

知らない人は暫く考へて、

それぢや、お父さんや、お母さんを何と思つてゐるね。

と優しく訊いた。

「そりや、」

富藏は、返事が出来なかつた。

それだよ！

知らない人は、力強く云つた。

お互ひに助け合はなくぢや、いけないんだよ。お互が助け合つてこそ、初めて、人と云ふものは、温かい

――それが、人間らしい人のすることなんだよ。自分勝手は、いけない。富藏、解つたか。自分勝手は、い

けないんだよ。お前は、あまり、自分勝手過ぎた。よく考へてごらん――だから、自分は、苦しんでるぢや

ないか。

知らない人は、目に涙をためてゐた。富藏の目も熱くなつて来た。

知らない人は、又云つた。

富藏、お前の頭をごらん、まるで、冬の野原みたいぢやないか、——お前の体をごらん、お前の襦袢をどらん、汚れて垢だらけぢやないか。お前の着てる蒲團をどらん。丸で餅煎ぢやないか。——家に居てごらん、そんな事はないから、分つたな。

知らない人は斯う云ふと、すたくと向ふの方へ行つて仕舞つた。

「あつ、一寸待つて下さい。も少し話して下さい」

富藏は追かけた、が、知らない人の姿は、もう消えて仕舞つた。

重い氣持になり乍ら、薄汚い帳場の先で朝とも、晝とも、つかない飯を食ふと、富藏は、又草鞋を履いた。

そして、その足は、西の方に向いて歩いて行つた。

〔二〕

「ほんたうに困つたねえ、阿母さん、あの子は一体どんな氣なんだらうねえ。」

およねは、斯う云つてやせた阿母の顔を覗き込んだ。

富藏が行衛不明になつた事は、残された姉と阿母に取つて、どの位辛いことだか知れなかつた。先づ第一に襲つたのは、生活難である。姉が働く僅かの収入では、到底支へ得べくもなかつた事は、明らかであつた。そこで、およねは、心當りと云ふ心當りを殆んど尋ね盡した。が、杳としてその消息だも、知る事が出来なかつたのである。

——他人位、薄情なものはない——

常々、阿母からは云はれてゐたが、今度こそ位、およねに感じた事は、なかつた。

毎日の様に遊びに来た清吉が、その事以來すつかり、顔を見せないのも、およねには癢の一つであつた。

あんなに親しく、交際してゐた、裏の小母さん迄が、あの事以來、厭な顔をし出したのも、その一つであつた。

「他人は恐ろしいものだよ」

およねが、ブリ／＼し出すと、阿母はよく斯う云つてなだめた。

およねは、富藏の仕打は、憎らしいとは思つてゐた。が、何故か眞から憎らしいとは思へなかつたのである。

その譯は、自分にも分らなかつた。けれ共、それはわからなくても、いゝ事だと考へて、あちこちと探し

廻つたのである。そして、およねは、この自分の考へは、恐らくは、阿母も同じだと思つてゐた。——口には出さないが——

何故かと云へばその事以後、阿母が不動様に日參を初めたからである。

それは、富藏の家出後一週間余りを經た寒い日であつた。

不動様から歸つた阿母は、何だか頭が痛いと云ひ出した。もう二三十年來、病つた事のない阿母が頭が痛いと言ひ出した事は、およねに取つて、何事にも替へ難い云ひ知れぬ寂しみであつた、と同時に、何とな

く、死ぬんぢやないかしら？とも思はれてならなかつた。

「阿母さん、お醫者さんに診て貰つたら……」

と、勸めると

「馬鹿な、縁起でもない、それよりか今日お神籤を引いて來たんだよ、さ、ごらん」

と云つて、神籤を渡した。

それは、大吉であつた。

その大吉は、今日およねが秘かに、引いて來た福籤と、すつかりあつて居たのである。

およねは、變な氣がした。

「阿母さん、大吉は、あんまり、よくないといふんぢやないの？」

「さう云ふけどねえ」

阿母は心配さうに云つた。

「迷信なんだね」

およねは、いゝ事を云つたと思つた。そしてさうした心許ない自己慰安は、直ぐ阿母が

「さうなんだね」

と、合樋を打つてくれたので、半信半疑乍らも、少しは安心出來たのであつた。

「待人來たる、——だから、何とか消息がある譯なんだね、阿母さん——」

「もう何とか云つて來さうなもんだねえ」

「ほんとねえ」

「ねえ、およね、一体あの子は、何が不足だつたらうねえ。慙うやつて、三人で仲よく、暮らしてゐれば、何より幸福なんぢやないかねえ、お前さうは思はないかえ？」

「私ばかりぢやない、誰だつて同じよ、阿母さん——」

と、およねは、即座に答へた。

二人の子供をおいて、早く夫に先立たれた阿母に取つて、——まして勝氣な——今度の出來事は、余りにも意外な事であり、同時に口惜しくてならなかつたのは無理もない。まだ、およねには話しはしなかつたけ

れ共、およねの縁談も、纏りかけた此頃、その心持は一層であつた。そして、此事件で駄目になるのではないか、とも思はれ出して来たのであつた。

さう思ふと、富藏が憎らしくて仕方がなかつた。まして父親のない後、只々姉弟二人の成長を楽しみに暮らして来た阿母にとつて――

それとも、自分の育て方が悪かつたのかしら？ さうも考へて見た。

と云つて、別に手を上げると云ふ譯でもなし、又あの子とて、親に、さして口返答するのでもなかつたのに――

寒い夜は、深々と更けて行つた。

火鉢の火は、もうじやうが盛上つてゐた。時計が、不愉快な音をして、九つ鳴つた。

「阿母さん、もう寝んだら、どう？」

およねは、火鉢に頬杖ついて、寂しく考へ込んでゐる阿母に、思ひ余つて云つた。

「え？」

「頭痛は、どうなの？」

「大分よくなつたよ」

「さう、だけど用心しないといけないわ。きつと風邪なんだから――もうお寝みなさいよおつ母さん」

「だつて未だ、八時半か九時ぢやないか、こんなに早く寝ちゃ、申譯ない。」

「どうして？」

「だつてお前――」

「でも、風邪が、又ねじけでもすると、尙いけないわ」

「それも、さうだね」

阿母は、やさしい娘の爲に折れた。

「だけどね、およね、私は何だか、今夜誰か来る様な気がして、ならないんだよ」

「ほんとうに、さうね」

およねも、何だかそんな気がして、ならなかつた。で恁う云つてから、

「消息でもあるのかしら？」

と、獨一言のやうに云つた。

この時、玄關で格子の開く音がした。

およねは、非常な期待を以て、立つて行くとそれは叔父の久造であつた。

「おつ母さんは？」

「奥――」

火鉢を圍んで、三人は丸くなった。

「富藏から何とか消息はあつたかね」

「いゝえ」

およねは、答へた。

「ふ——む」

と暫く考へてから、

「實はな、こんなものが来たんだよ」

と、云つて、久造は、阿母に、手紙を渡した。

「お前読んでおくれ」

「はい」

正しく、富藏の手蹟であつた。およねは震へる聲で讀んだ。

叔父さん、

こんな手紙を出せる義理ぢや、ありません。そりや、よく知つてゐます。それなのに出す私の心持を、お察し下さつて、どうか、腹を立てずに讀んで下さい。

どうして、こんな馬鹿な事を、したのか自分にも分らないんです。家ぢや、きつと心配してゐるんでせ

う。濟みません。

大馬鹿者と、みんなは笑つてるでせう。ほんとに、馬鹿です。だけど、私は、人を恨まない、只、自身を恨みます。

叔父さん、人を恨むなんて、いけない事ですなえ。つくづくさう思ひました。

今、名古屋の友達の處に居ます。友達は別に、いやな顔もしません。だけど、内心は馬鹿と思つてると思ひます。

叔父さん、家へは、どうしても手紙をやれませんか。お察し下さい。そこでお願いがあります。富藏の一生のお願いです。——大阪へ行つて、一生懸命働きます。ですから少しの間、おつ母さんと、姉さんを預かつて下さい。一生のお願いです。きつと少しの間です。きつと立派になつて歸ります。もう目から涙が出て書けません。名古屋は、あした發ちます。それでは、叔父さん、くれぐれも、お願致します。富藏は拜みます。

名古屋にて

富藏 拜

×月×日

叔父さん
叔母さん